クリスタル・ジェネシス　０２　　『アルバセクト』

適当名言

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クリスタル・ジェネシス　０２　『アルバセクト』

【Ｎコード】
Ｎ７３８７Ｗ

【作者名】
適当名言

【あらすじ】
　霊石の溢れる世界フェアガルテ。そこに住む一人の少年ディムは自らの願いを得た。願いを持った少年に今まで向き合わなかった様々な事象が降りかかることになる…。一方、少年の敬愛する先輩ラゼスも目を背けていた自らの過去に向き合わされる。クリスタル・ジェネシス、学院編開始。　＊この作品は前作『アスルクレスタ』の続編です。前作を読んでいることが前提で書かれているため、先に前作を読んでからこちらを読むことをお勧めします。

前作の用語・キャラ（前書き）

前作『アスルクレスタ』のネタバレを含んでいます。まだ読んでいない方はそちらを先に読むことをお勧めします。

前作の用語・キャラ

＜用語＞

霊石…２００年ほど前に発見された“想像を創造する”魔法の石。これを身に着けて念じることで魔法を使うことができる。基本的に無色透明な物質である。色が変わる時は魔法が発動している証であり、赤、緑、青の３色が基本となる。魔法を発現していなくとも人が触れることでその色を変え、触れている人物が使える魔法の種類を示す。霊石一つで魔法は一つしか行えない。

（色について）

赤：強化系の魔法
緑：干渉系の魔法
青：練成系の魔法
黄：強化系と干渉系が使えることを示す
紫：強化系と練成系が使えることを示す
水：干渉系と練成系が使えることを示す
白：強化、干渉、練成の３系統が使えることを示す

魔法…霊石を使って引き起こされる現象の総称。３つに系統分けされている。

（系統について）

強化…霊石による自己改変。人の身で行える能力を一時的に強化する。使用時に霊石が赤色になる。

干渉…霊石による他の改変。何もないところに炎を出したり、物を凍らせたり、破壊したりできる。一般的な魔法のイメージそのもの。使用時に霊石が緑色となる。

練成…霊石による他の改変。フェアガルテ内の物質（非生物）を任意の形状、材質に変換する。使用時に霊石が青色となる。

上位魔法…各系統の魔法を極めたものが使える魔法。中には大きなリスクを孕んでいる。

変身…強化の上位魔法“霊石覚醒”。自分を人間以外の姿に造りかえる。

霊装…練成の上位魔法“霊装顕現”。霊石自体を武具に造りかえる。

召霊（召霊解放）…霊石で自身の想像の世界との門を開き、内部の者を召喚する。改変ではなく一からの創造である。使用時に霊石の色は変わらない。３つの系統に属さない魔法。

霊石使い（クレスタ）…霊石を使って魔法を使うことができる人間の総称。逆に霊石を持っていても魔法を使えない人間たちをアンクレスタと呼ぶ。

白のクレスタ…全ての系統の魔法を使えるクレスタ。全ての系統に召霊や上位魔法は含まれない。

黒のクレスタ…ラゼス＝ハイヤーンただ一人を指す。適正の検査では無色を指し示しながら、念じることで霊石とその周囲を消し飛ばす。霊石の爆発前に霊石が黒く染まることからこの名がついた。

魔導機械（マキア）…練成物質に魔法を記憶させ、クレスタなしに魔法を起動する機械。記憶容量は練成物質の体積に比例する。実行する魔法が大がかりになる場合、サイズが大きくなってしまう。

魔導技師（マキアータ）…練成系のクレスタ、または練成物質に魔法を記憶させる技能を持つクレスタのこと。基本的に練成系と干渉系のチームで活動する。

結晶獣（クオーツ）…水晶でできたような透き通った体を持つ生物に似て非なる

者。魔法を使った攻撃でないと傷つけることはできない。人間を狩る習性がある。ドラグハート聖竜王国、ゴルノイア魔導帝国、ウィスタリア以外の土地に生息する。体の大きさがそのまま個体の能力になっているため、大きさでランク付けされている。

（結晶獣のランクについて）

コルン級…小サイズ。３０ｃｍ未満。素人でも魔導機械で倒せる。

キーゼル級…中サイズ。３０ｃｍから３ｍ未満。

フェルズ級…大サイズ。３ｍから１０ｍの範囲のサイズ。

マイン級…特大サイズ。１０ｍを大きく上回るサイズ。

聖域…２００年前に7人の英雄が創り出した結晶獣が侵入できない領域。ウィスタリア、ドラグハート、ゴルノイアの3か所である。

七聖…聖域の守護者の役割を持っている7人のクレスタ。高い戦闘能力を有している。

騎士団…大元は２００年前の戦いで英雄と共に戦っていたクレスタたちが、聖域の維持、結晶獣の討伐、治安の維持、の3つを目的に創設した軍隊。２００年の間に目的に応じて3つの組織に分かれていった。

聖域の維持は白衣装の白銀の騎士団。

結晶獣の討伐は赤い衣装の紅蓮の騎士団。

治安の維持は青い衣装の紺碧の騎士団。

現在の騎士団上層部の人事は七聖筆頭のスカーレットが行っている。

フェアガルテ…この世界、又は大陸を指す呼び名。場合によっては聖域全体という意味にもなる。

ウィスタリア…フェアガルテの中央に位置する霊峰、又はその麓にある都市のこと。霊峰には原初の門と呼ばれる門があるが、開く手

段は無いとされている。ウィスタリア魔導学院は各国の騎士や学者を多く輩出する教育機関であり、そこの学生はウィスタリアを護る兵士になることもある。

ウィスタリア魔導学院…霊峰の麓にある全聖域内で最大の規模を誇る研究機関。教育機関としての側面もあり、学生は４年間ここで学ぶことになる。霊石や結晶獣に関する情報は全てここに集められており、世界が抱える問題に対する本部といえる。現在は結晶獣討伐のための騎士と人々の生活のための魔導機械開発者の養成がメインとなっている。

ゴルノイア魔導帝国…フェアガルテ東方に位置する国。皇帝ガーラント＝ゴルノイアが治めている。

（国内の都市）

エクストレム…皇帝のいる帝都。

ベルヴェルク…霊石のとれる鉱山のある土地。魔導技師の西の聖地。

セイレン…ゴルノイアの東端にある海に面した土地。

ドラグハート聖竜王国…フェアガルテ西方に位置する国。現在は若き王、セフィオン＝ドラグハートが治めている。

氷結の雨事件…ディムたちの受験のときにウィスタリアで起きた事件。都市中を蒼い氷が覆い、時が止まったような世界となっていた。

蒼星結晶（そうせいけっしょう）…クレスタが触れずとも蒼色をしている霊石。その存在自体、知っている人間が少ない。七聖のドレイクが狙っていた。フェイナの体から出てきたが、現在の行方は分からない。

＜人物＞

ディム…自分というものが分からない主人公。出身はゴルノイア魔導帝国のセイレン。セイレンにあるカミシロ道場で剣を習っていた。当時の経験から自分が無力であると痛感しており、自分がいなくても世界はうまく回ると思っている。フェイナやラゼス、クワルらとの出会いにより、自分が欲していたものを見つけ、自分から行動することの大切さを学んだ。目的を持った彼は、ウィスタリア魔導学院に入学する。
使用できる魔法は剣の作製。手に触れさえすれば、発動中の霊石からでも剣を作製することができる。また、理由は不明だがハイドの魔法“ガンショットアクセル”を使えるようになったことで、近接戦闘能力が格段に上昇している。

フェイナ…フェイナルフェイン＝ラピスティア。２回生。出身はドラグハート聖竜王国の王都ドラグレイス。
生物の意思を感じ取ることができ、人の悪意には敏感である女の子。だからこそ悪意の感じ取れない人を心から信用する。
また、相手の眼を見て相手の記憶を読み取ることができる。記憶を読み取る時、相手もその記憶を思い出させられる。記憶の読み取りで生じるフラッシュバックで相手の心が壊れてしまう場合がある。相手の眼を極力見ないように生活していたためか、人と喋るのは苦手。基本的に初対面の人間からは逃げる。普通に話せる相手はディムとルミネだけである。
２回生であるが、ルミネと同い年である。
使用できる魔法は召霊。ロンロンという空飛ぶ蛇を召喚できる。また、４つの翼を持つ鳥ミリリムや黒い犬ソウルを従えている。

クワル…クワル＝クロイツ。ディムと同じく１回生。出身はゴルノイア魔導帝国のベルヴェルク。ディムとウィスタリアに着いた途端に知り合った。鎧の練成が得意。自信家だが他者を馬鹿にすることは決してない。魔導技師である祖父と父を持ち、自分も魔導技師に

なるためにウィスタリアに入学する。魔導技師志望だが、体格ががっしりしており、騎士団志望の人間よりも腕力が強そうである。使用できる魔法は鎧の練成と操作。自身よりも大きな鎧の腕を練成して、干渉系魔法で操る。鎧には霊装の腕“ウルリクムミの鉄槌”がある。

キエン…キエン＝アイエン。１回生。出身はゴルノイア魔導帝国のセイレン。カミシロ道場時代のディムを知っている（ディムはキエンを覚えていない）。過去にタコ型の結晶獣に殺されかけたことがあり、その時はディムに助けられた（やはりディムは覚えていない）。そのときのお礼をいうためにウィスタリアまで追いかけてきたのだが、タイミングを見つけられないでいる。また、結晶獣に襲われた過去によって結晶獣恐怖症になっていたが、それは改善された。しかし、足や触手が多いものは苦手なままである。
使用できる魔法は手の変身である“滅火（ほろび）の御手（みて）”。手のみであるが、高温の炎に変身して殴りつける。

ハイド…ハイド＝ロベイン。１回生。出身はドラグハート聖竜王国のアトモス。強化を主軸に置いた戦闘能力は新入生の中でもトップクラス。力の無いもの、覚悟の無いものは霊石に触れるべきでないと考えており、ディムを蔑視していた。試験中のトラブルでディムを見直し、和解したそのときに結晶獣に襲われ重傷を負っていたが、無事に復帰を果たす。
使用できる魔法は強化と練成。主に使う武器は槍であり、練成で即座に槍を作る。ハイドを特徴づけているのは、独自の強化系移動術“ガンショットアクセル”である。銃声のような音とともに高速で移動することから自分で名づけた。

ルミネ…ルミネセンス＝アルカナム。３回生。フェイナの親友であると公言している。白のクレスタであり、学院でも有数の実力者。

高速な並列思考が可能であり、複数の魔法を同時に使いこなすことができる。ただ、本人は「物事をどれだけ単純にできるか」が頭の良さであると定義しているので、魔法以外でその思考能力が発揮されることはあまり無い。
万能なクレスタであるが、戦闘で使うのは主に銃である。銃といっても魔導機械ではなく、弾の装填、照準、発射を全てマニュアルで行っている。

ラゼス…ラゼス＝ハイヤーン。黒のクレスタと呼ばれる3回生。学院生でありながら現役の紅蓮騎士でもある。自分は魔法ができないといいながらも、驚異的な火力で結晶獣を一撃で倒すことができる戦闘能力を持っている。
使用できる魔法の系統は不明。魔法を使用すると霊石が大きく爆発して、巻き込まれたものを消し飛ばす。

スカーレット…スカーレット＝ディストール。七聖筆頭。“緋愛”の称号を持つ。２４歳女性で、ウィスタリア魔導学院の学院長。ディムに入学推薦状を書いた人である。近くにいる人間にはレティと呼ばせている。

ゴスペル…七聖スカーレットの護衛の騎士。黒い甲冑に加え、常にフルフェイスの兜を被っているため、その素顔は知られていない。

ドレイク…本名はギルサス＝ドラグハート。元七聖“黄昏”で紺碧の騎士団の元団長。ディムたちの受験の監督をしていて、“氷結の雨事件”を引き起こした罪で逃亡中である。今いる世界がもう一つの世界から見捨てられた世界であり、自分たちは結晶獣と共に閉じ込められたと思っている。人柱で維持している聖域の中で過ごし続けることに納得できず、霊峰にある原初の門を開くために蒼星結晶を求めている。

使用できる魔法は召霊。２００年前の英雄の使っていた召霊である竜の骸であるガシャクロを使役する。ガシャクロの戦闘能力はマイン級の結晶獣と同等に戦えるものである。

憂鬱からの脱出（前書き）

本文の視点がところどころ変わります。
〜〇〇〇〜
→のような形で誰の視点かを記してあります。ｏｕｔｓｉｄｅｒの場合は第三者視点です。

憂鬱からの脱出

～スカーレット～

もうすぐこの学院も新しい一年が始まる。一月前に立て続けに起きた２つの事件、“試験用結晶獣の暴走事件”、“氷結の雨事件”の後始末に私は日々を追われていた。

試験用結晶獣の暴走事件。今年の試験監督であるドレイクが騎士団候補生の試験に結晶獣が必要であると明言し、私が許可を出したことが事の発端である。予想されていた騎士団候補生１００人強に対し、３５体のキーゼル級結晶獣を捕獲するということであり、学院内であれば拘束を抜け出したところで被害らしい被害は無いだろうと判断した。私のドレイクに対する信頼が招いた結果だ。今後は身内だからといって信じられない事態が多くありそうだ。

ドレイクは捕獲した結晶獣の数の報告を偽っていた。実際に学院に入れられたキーゼル級結晶獣は試験用を含めて約１２０体、フェルズ級の結晶獣は４体であった。

ドレイクの一存だけでこれだけの数が動かせたとは思えない。ドレイクが捕獲の際に使った人員は紺碧の騎士団員であると思われていたが、誰一人として結晶獣の捕獲に参加していないことが分かった。ドレイクの肩書は、紺碧騎士団長、七聖“黄昏”、ウィスタリア魔導学院教師の３つである。彼の権限で動かせる人員には紺碧の騎士団以外にはないはずなのだ。

ドレイクには他に動かせる手駒がいたということになる。事実、ゴスペルが捕えた紺碧騎士４人は紺碧騎士ではなかった。このことからドレイクには組織的なバックアップがあると考えられる。現在は捕虜の尋問などで情報を収集中だ。

氷結の雨事件。学院の1回生、フェイナルフェイン＝ラピスティアが聖域を超える“霊域改変”を使用したことが原因であると報告が入っている。蒼の氷で都市全体を覆った魔法によって、私ですら学院の中に閉じ込められて動けないという非常事態であった。

幸いにも受験生ディムと学院生ルミネの2名によって問題は解決された。聖域が張られてからの２００年間でもドラグハート内戦やエクストレムの暴動に次ぐ大きな事件であったにも関わらず、死亡者０名という不可思議な事件でもある。氷に閉じ込められた被害者に至っては事件に巻き込まれたという記憶が無く、氷から逃げた人よりも元気な姿を見せていた。

ルミネの報告では、この事件もドレイクが関わっているとのことだ。ドレイク自身が語ったとされる動機は、もう一つの世界への道を開くこと。霊峰にある黒き門を“蒼星結晶”を使って開くのだとか。

確かに私たち七聖が聖域よりも護らなくてはならない存在として、霊峰の門がある。開かずの門。その先がどこに繋がっているかはディストールの名を継ぐ私にも知らされていないことだ。ただし私は一度、この開かずの門が一瞬だけ開かれたところを見ている。ドレイクの言うもう一つの世界があるのならば、そのときに現れたあの人はもう一つの世界の住人なのであろうか。

何はともあれ不確定要素が多すぎて判断する気にはなれない。蒼星結晶とやらも初耳である。ゴスペルはこの件に関して私を手伝う気配を見せない。

（私は私で調べるしかないということね。）

正直に言うと私には時間が無いので、誰かにお願いすることになりそうだ。

報告書をチェックしていると、執務室のドアがノックされる。ゴスペルが来たのだろうか。

「学院長、伝言を預かってきました。」

「どなたからかしら？」
「ゴスペル様からです。」

珍しい。「人を通すと自分の意志がうまく伝わらないからね」と言って直接しか話さない男が伝言とは。今までに2回ほどしか彼からの伝言は受け取ったことは無い。その時は決まって…。

「あのバカっ！　護衛対象を放ってどこ行った！」

…私に黙って出かけるときだ。
「学院長、冷静になって下さい。そもそもあなたに護衛は必要ないでしょう？　こちらがメモ書きです。」
私はそのメモを奪い、食い入るように見る。

『レティ、
私はしばらく旅に出る。行先は…挙げても限が無いので省略する。
私がいない代わりにと言っては何だが、
君の目の前の男をウィスタリアに置いておこう。自由に使ってくれ。
あと七聖の空きだが、彼女に頼んでおいた。
もし問題を起こしてしまったらそのときは頼む。』

読み終わると同時にメモ用紙は燃え尽きた。つい燃やしてしまったのだ。
確かに七聖の補充は難題だった。ドレイク並の人材などそういるわけではない。そこを補填してくれるのはありがたいけれども…。
「彼女って誰！？」
名前が無かった。
「そのあたりの話は旦那から聞いていますので、私の方でどうにかしますよ？」

伝言の配達人がまだそこにいたことを忘れていた。黒よりやや緑色っぽいタキシードを来た痩せ型の男。室内であるにも関わらず、服と同色の帽子を被っている上に、正装であるのにラフに着崩している。口調の丁寧さとは全く正反対な印象を受ける。目は細目であり、終始笑顔を崩さないため本心を掴みにくい。この男が言う旦那とはゴスペルのことだ。

「そう？　でも私はまだ仕事があるからその件はまた後でね。」

「仕事は何が残ってるんです？」

「色々よ。紺碧の騎士団の次の団長とか教員の補充とかね。それにしてもどうして七聖筆頭が学院長を兼任してるんだろ？　お陰で忙しくて仕方ないわ。」

私が望んでこうなったわけではない。先代の七聖…今は亡き私の祖父が趣味でやリ始めた学院だ。祖父のときは七聖の仕事というものが特に無かったこともある。今は理由あって騎士団長の任命を七聖筆頭が行うことになっているのだ。慎重に選ばなくてはならない。ドレイクの二の舞ではダメなのだから。

「紺碧騎士団長の件ですが、既にセオレムの了解を得ています。あとは学院長のＯＫで終わりです。教員の方はドレイクの穴埋めということなので、紅蓮の騎士団にお願いしまして、一人派遣されてきます。これがその書類です。」

机に紙束を置くタキシードの男。私が言う前から動いてくれていたらしい。これは私に暇な時間をつくるチャンスだ。

私は書類を手元に寄せながら、紺碧騎士団長の件にＯＫを出す。後任にと出てきた名前はセオレム＝スタニエ。七聖の一人であるので実力は申し分ない。問題としては引き受けてくれるかどうかだけだったのだ。どうやって説き伏せたのかは知らないが、私自身がやらなくてはいけない仕事からは解放された。

「本当に使える男ね、クレイン。」
「でしょう？　もっと褒めてくれてもいいんですよ？」
「じゃあ残りも代わりにやっといて。もちろん学院だけじゃなくて街の方のもお願いね。」
「うげ！？」
若干笑顔が引きつったが関係ない。ゴスペルの伝言通り自由に使ってやるつもりだ。
「今年はいつもと違うことをしてみようかしらね。」
自然と私の口からも笑みがこぼれた。

俺は帰ってきた

～ディム～

一か月。正確には3週間ほどか。俺にとって人生の転換期とも言える3日間を終え、俺やクワルら受験生は一度帰郷していた。

俺は実家には帰らなかった。両親に今の俺を見てもらうのもいいのかもしれないが、今はやめておいた。理由は特にない。なんとなくだ。

実家に帰らずにどこにいたかといえば、俺は師範の道場にお世話になっていた。泊まり込みでずっと師範と剣を打ち合っていた。もちろん軽くひねられた。やはりまだ遠い。師範は「儂を目指すな。儂より上を目指せ。」という。俺はいつか超えることができるのだろうか。

高く悠然と聳える霊峰。麓にある模型のような街。

砂漠を越えた列車を降り、俺は再びこの光景を目にしている。今思うと、駅だけ大きく街から離れすぎている。また徒歩で行くのかと多少鬱になりながら俺は歩き出す。

「ディムーっ！」

街の東方にある森の方から何かが飛んでくる。空飛ぶ蛇とそれに乗る女の子。今の俺にとっては救いの主だ。遠くであるにも関わらず俺のもとに届くその声を聞くとウィスタリアに戻ってきたことが実感できる。

蛇はあっという間に俺の傍にまで来ていた。さすがはロンロン、相変わらず速い。

「フェイナか。俺が今来たってよく分かったな？」

フェイナ。受験の時に知り合った女の子。俺が助けることができた女の子。呼び捨てにしたり丁寧語ではなかったりするが、一応は先輩である。でも、今更接し方を変えるつもりはない。これでいいのだ。

フェイナは俺の後ろを指さす。

「ミリィが教えてくれました。」

俺の後ろ、駅の屋根に留まる4枚の翼を持った白い鳥がいる。フェイナの召霊であるミリリムだ。ミリリムが見ていた景色をフェイナは遠くにいても知ることができるのだろう。

「ディムはこれからどうするんです？」

「とりあえずは宿舎に行かないとな。荷物も置かないと動きづらいし…」

そういって手にしている荷物を掲げてみせる。俺は他の人と違って荷物はあまりない。それでも移動しづらい量であることには変わらない。今この場にフェイナが来てくれたのは僥倖だ。歩くのが面倒くさいという俺の細やかな願いが叶ったのだ。

「そうですか。じゃあ、いつもの森で待ってますね！」

「へ？」

肩にミリリムを乗せ、ロンロンと共に去っていくフェイナ。その速さは言うまでもないこと。俺が間抜けな声を出している間に森の方へと消えていった。

「……歩くか。」

期待した分だけ、損した気分になった。そんな昼下がりだった。

「…疲れた。」

普段よりも多い荷物を持っていると、それだけで拘束されたような気分になる。要するに自由が無い。

途中で魔法を使おうとも考えた。ハイドの真似、ガンショットアクセルである。しかし、それは却下せざるを得なかった。理由は2つある。一つは自由に止まれないこと。もう一つは片手が剣で埋まってしまうことだ。両手がふさがっている状態では使えない。

結局俺は当初の予定通り徒歩で寮まで辿り着き、自分に宛がわれた部屋でようやく荷物の拘束から解放されたのだ。

部屋は広く、2段ベッド2つに机が4つある。4人部屋なのだろう。俺以外には既に2人が来ているようだ。本人はどちらもいないが、各々が自分の場所を勝手に決めて荷物を広げている。俺は同室の人間がどんな人物か見定めるために見えている荷物をチェックする。片方はごちゃごちゃとしていて、もう片方は逆に綺麗に整頓されている。対称的な2人だ。

ごちゃごちゃしている方から見た。机には自前の本棚が設置されており、中が埋まっても尚、机の上に溢れるほど本がある。全体的に魔導機械(マキア)関係の書物のようだ。魔導技師候補生(マキアータ)なのだろう。自分の興味に一直線で、他のことが疎かな人間を思い浮かべた。魔導機械関係以外の本も少なからずある。目についた本を取ってみる。

タイトル『ひ弱なあなたもムキムキに！　必勝トレーニング法』。

…最近になって変わりたくなったのだろうか。魔導機械の書物全般よりもページがボロボロになっている。読み手の必死さが分かって辛い。

次にとったタイトル『モテる男になる秘訣』。

……さっきのトレーニングの目的はもしやこれではないだろうか？

効果はあったのか後で聞いてみよう。

整頓されている方は、目立つ持ち物が無さそうだ。ただし、学生であるならば本の一冊や二冊は持っているはずだ（注＊俺は持っていない）。机にある本に目を向ける。

『フェアガルテの歴史』
『ドラグハート内戦の英雄たち』
『結晶獣の報告　２２３年版』
『騎士団憲章』
『騎乗型二輪魔導機械の第一歩』。

歴史書に騎士団関係の本。一冊魔導機械の本があるが、始めたばかりという印象だ。趣味の領域だろう。

『友達ができない人のための心理学』。
……なんかゴメン。気無しに引出しを開けたら本が一冊入れてあった。本当に申し訳ない。

まとめると、俺と同室の人間は、
・モテるためにムキムキボディを手に入れようとしている魔導技師候補生
・二輪魔導機械に手を出そうとしている友達が欲しい騎士団候補生
なのだろう。

他人の荷物を見ていて時間が経過する。気付けば日は傾きつつある。
「やべっ！　フェイナのとこに行かなきゃ！」
別に俺が言い出したことでも約束したことでもないが、待っていると言ったフェイナのことだ。俺が行かなければ夜の間もずっと俺

を待っていそうだ。

俺は荷物の展開もそこそこに、部屋を施錠して寮を飛び出ていった。

友との再会

～ディム～

農業区の東側は実に自然的である。整理された田園地帯を抜けると、まともな道が少なくなり走りにくくなる。日が沈んでしまい、足場が視認しづらくなったことも走りにくさに拍車をかける。

森に辿り着くころにはすっかり暗くなってしまった。辺りに街灯があるはずもなく、俺は暗闇に包まれた森の中を歩く。

「いてっ！」

太めの枝に頭を打った。地味に痛い。まともに前が見えない。

「何か明かりは…そうだ！」

霊石を取り出し、赤い剣を創る。赤色のみとはいえ、周囲は仄かに明るくなる。視界を確保した俺は先へと進む。すると、進んでいくうちに赤以外の色が混ざってくる。

（何だ、あの光は？）

俺は剣を仕舞って明かりへと向かう。優しい蒼い光。それはいつもの場所、フェイナのいる場所から出ていた。近づくにつれて高い女声の旋律が聞こえてくる。俺は最後の枝葉を越えて辿り着いた。

光っていたのは水。ほぼ円形の空間の中心に聳え立つ大木周りの池。下からの明かりに照らされた大木は普段と違うものに見えてくる。水面上に剥き出しの大木の根に立つのは着物の少女。左手に蒼くライトアップされた鳥を乗せ、俺には聞き取れない歌を歌っている。想像を創造することが魔法ならば、この光景は正しく魔法だ。それほど幻想的に俺の眼に映った。

呆けている俺の存在に気付いたミリリムがフェイナの手を離れてこちらに飛んでくる。それに合わせてフェイナは俺を見る。
「こんばんは、ディム。」
「ああ、こんばんは。遅くなってゴメンな。」
「？　なんで謝るんです？　あ、私が行きますからそのまま待ってて下さいな。」
池に入ってフェイナの元へ行こうとするが、彼女に手で制される。彼女はロンロンに乗ってこちら側へ到達する。
「お久しぶりですね。元気にしてましたか？」
「…まあまあかな。肉体的な話は置いといてだけど。」
（訳：肉体的にフルボッコにされてきました。今は　かろうじて元気です。）
「フェイナの方は？」
「私は相変わらずです。基本的にここにいますので。」
ここ、聖域の端が近い森はフェイナが好む空間である。あまり街に出ることは無い。そういえば自宅みたいに森に引き籠もる彼女はアウトドア派なのかインドア派なのかどっちに分類すればいいのだろう？
日が沈んでから時間が経っているにも関わらずここは寒さを感じない。何故か光る池のおかげで明るくもある。実はフェイナはここに住んでいるのではないだろうか。今の俺には大木の根も彼女専用のベッドにしか見えない。
「そうそうディム！　私、とうとう2回生になったんですよ！」
「あ、うん。おめでとう。」
それはそうだ。俺より一つ上なのだから……ん？　本当にそうだろうか？

「そういえばフェイナはルミネと仲がいいよな。どうやって知り合ったんだ？」

ルミネセンス＝アルカナム。数少ない白のクレスタであり、魔法を高速で複数行える思考演算能力がある。彼女は今年で3回生でフェイナとは一つ違いのはずだが…。

「2年前に入学式で会って、それからずっと友達ですよ。同い年ですから。」

なるほど、留年してたんだな。そういえば俺はフェイナの魔法を知らない。召霊を使えるのは知っているけど、練成や干渉は使えるのだろうか？　フェイナが騎士団候補生とは思えない。

「私はロンロンを呼ぶしかできません。だから勉強についていけなくて……。ディムが察してくれている通り、ルミネに置いてかれちゃいました。」

俺が聞いていい話なのだろうか。気まずくなってちょっと顔を俯く俺。

「でも、関係ありません！　もう私から距離を置くようなことはしないんです！」

えへんと胸を張るフェイナ。様子が変わったので俺は安心して顔を上げる。

「そしていいことを思いつきました。早速明日にはルミネに相談します。」

「何を？」

「ナイショです♪」

すごく楽しそうな顔だ。ルミネの名前が出たことが若干不安であるが、この際気にしないことにしよう。

「さて、そろそろ俺は帰るよ。」

「そうですね、ちょっと遅くなっちゃいました。ソウル、ディムを

送ってあげて下さいな。」
「了解した、主。」
音も無く俺の背後に現れる黒犬。本当にこの犬の気配は分からない。頼むから分かりやすい位置から登場してほしい。

夜の街を疾走する黒い犬。視認が難しく、音も無く移動するソウルは、普段でも存在を気付かれること無く街を闊歩しているかもしれない。俺を一人背に乗せたところで、その足取りに乱れは見られない。
「なあ、ソウル。一つ訊いていいか？」
「なんだ坊主？　可能であれば答えよう。」
「フェイナはどうしてウィスタリアにいるんだ？　騎士団に入るつもりなのか？」
目的も無くウィスタリアを受験した俺が言えた義理ではないが、フェイナには魔導技師も騎士団も目指している節は見られない。話を聞く限りでは適性検査は無色なのだろう。推薦した誰かがいるはずだ。その理由は？　セイレンの着物を着ているから元々ウィスタリアに住んでいたということも無いと思う。
「…それは我の口から話すわけにはいくまい。主に直接訊くといい。坊主になら喜んで話すだろう。」
それもそうか。何故俺はわざわざこの犬に訊こうと思ったのだろうか。
「ちなみに言っておこう。主は坊主よりも強いぞ。なにせ魔法を一切使わずに他の騎士団候補生を倒したこともあるのでな。」
「嘘だ！」
「本当だとも。今度相手をしてもらったらどうだ？」
ハッハッハと笑うソウル。

…嘘だ。嘘に決まっている。本気のハイドやキエンを前にして霊石無しで戦うことなんか無理に決まっている。

俺が唸っている間に寮の前についた。やはり速い。
「ありがとな。」
「ああ。……坊主！」
入り口を開けようとする俺を止めるソウル。こいつにしては珍しい。
「どうした？」
「強くなるのだ。お前には主の隣にいてもらわねばならない。そんな予感がするのだ。」
「…強くなるさ。」
フェイナより弱かったら格好つかないしな。

外から見る限り、部屋には明かりがついていた。幸い夜が極端に早いルームメイトではないようだ。自分の部屋とは言え、初めて会うわけだから、ノックしてから入ろう。

コンコンッ。
「はい。」
……聞き覚えのある声だ。でも今は突っ込みは我慢しよう。それは後だ。このことを予想できなかった俺に落ち度がある。声をできる限り高くして、と。

「クロイツさんのお部屋はこちらでしょうか？　あなたに会いたくて来ちゃいました。」
「マジで！？　誰、誰？　今行きまーっす！」
ガチャッと盛大に開けられる扉。文字通り部屋から飛び出してきたのはクワル。受験と事件の時、俺と一緒に戦ってくれた大切な友人だ。

「よう、クワル。久しぶりだな。今からどっか行くのか？　道暗いから気をつけろよ。いってらー。」
　入り口の脇で待っていた俺は早口で軽く挨拶をしてからクワルと入れ替わるように部屋に入り、扉を閉めて鍵をかけた。きっと今の俺の顔は何かをやり遂げた満足気な顔をしていることだろう。
　ドンドンと扉が叩かれる。
「おい、ディムてめえ！　何のつもりだ！」
「……どちらさまでしょうか？」
「おいらだよ！　分かっててやってんだろ！　返事が白々しすぎるんだよ！」
「申し訳ありませんが、今はおいらおいら詐欺というのが流行っておりまして…」
「オレオレじゃねえのかよ！？　…まあいい。クワルだ！開けてくれ！」
「…生憎、クワルは出かけております。ピーッという発信音の後にメッセージを…」
「おいらがクワルだって言ってるじゃねえかよおお！」
　そろそろ俺の方が疲れてきたので、扉を開ける。
「全く…久々に会ったってのにいきなり締め出されるとは思わなかったぜ。」
「俺も締め出すことになるとは思わなかったぜ。」
「んなわけねーだろっ！」
　もちろん確信犯である。

「ところでディム、さっきの女の子はどこに行ったんだ？」
「……」
…3秒ほど思考停止してしまった。
「ああ、俺を見てどっか行ったよ。」
　なんとなく俺だと言うのがマズイ気がして嘘を言うことにした。
「そうだな…、髪は長めだったな。真っ直ぐ下してた。髪の色は緑

色っぽかったかな。背格好は小さめ。結構飾りの多い服着てて体系はよく分からなかったけど、小柄って印象かな。」

どうせなら徹底的に嘘をついてみる。ここまで細かければ疑えまい。

「そっか…明日会えるかな。」

すまん、クワル。その願いは叶うことはない。

「全く、貴様らは変わらないな。少しはウィスタリアの学院生である自覚を持ったらどうだ?」

「げ!?」

部屋の中にはクワルの他に人がいた。本『結晶獣の報告　２２３年版』を片手に座る青い長髪の男、ハイドである。ハイドも事件の時に共に戦った仲間だ。

先程の分析。

・モテるためにムキムキボディを手に入れようとしている魔導技師候補生　↓クワル

・二輪魔導機械に手を出そうとしている友達が欲しい騎士団候補生　↓ハイド

「お前らかよっ！」

「それはこちらのセリフだ。何故貴様と同じ部屋で過ごさねばならんのだ。」

俺の方を見ることなく、手にしている本を読み続けるハイド。本といえば…。

『友達ができない人のための心理学』。

「ぶっはははは！」

「前触れも無く笑い出すな。気が触れたかと思うぞ。」

「ぎゃはははは！」
どうしよう。今はハイドが何を言っても何もかもが面白い。
「クロイツ。時間が時間だからそいつの体を押さえててくれ。」
「しゃーねーな。おいらも罰則は受けたくねえし。」
俺はクワルに羽交い絞めにされる。ハイドはどこからか棒を取り出す。
「ははは……ん？押さえるのは体なの？口じゃないの？」
ハイドの腰は落とされ、棒は水平に。棒の先端は…俺に。
「貴様を黙らせられれば何でもいいさ。」
「ストップ。ハイドさん、笑いの発作は今急激に止まりました。落ち着きましょう。」
「俺は落ち着いている。貴様は朝まで寝てろ。」
棒が放たれる。皆さん、おやすみなさい。

我らの部屋への闖入者

～ディム～

窓から光が差し込んでいる。外からは鳥の囀りが聞こえ、気持ちの良い朝の到来を告げている。

こんな気持ちの良い朝だ。春眠暁を覚えずという言葉はあるが、俺の目は完全に覚めている。気分はいい。

…体が痛くなければな。

「ハイドのやろう。気絶させるだけならもっとスマートにできるはずだろ。」

棒まで持ち出したのは俺を痛めつけるためとしか思えない。

「おはようございます、ディム様。」

「ああ、おはよう。」

起きてすぐに朝の挨拶を交わす。当たり前のことだが少し前の俺には遠い世界のことだった。

「朝食の準備ができております。」

「ありがとう。いつも助かるよ。」

俺は自分の机に用意されている朝食を見る。サラダとトーストとコーヒー。悪くは無いけどセイレン出身の身としては朝は米派だ。しかし用意されたものは食べよう。それが礼儀だ。

「食事を摂りながらお聞きください。本日は学院の初日と言うことで講義はありません。学院長のお話を聞いた後、新入生の歓迎会という予定になっております。」

「へー。歓迎会って何をやるの？」

トーストを齧りながら訊いてみる。

「具体的なことは秘密だそうです。」

「あ、そう。」
コーヒーを飲む。よく分からないけど、うまい。
「何か他に訊きたいことはありますか？」
「そうだな…」
いつ冗談と切り出されるかを待っていたが、相手は頑ななようだし俺が折れるしかない。

「アンタ誰？」

「これは失礼しました。ワタクシはティフェレンと申します。本日より、ディム様の専属のメイドとして仕えさせていただきます。レンと気軽にお呼びください。」
そう、何故かこの男3人の部屋にメイドさんがいるのだ。背は俺と同じくらいだろうか。女性としては高い部類に入る。
俺は新入生歓迎の企画だと予想していたが…。
「え！？　本物？」
「はい。ワタクシはティフェレン本人です。そこに嘘偽りは決してございません。」
そういうことではない。
「えっと、レンさん？」
「レンです。」
「じゃあレンさん、俺が聞きたいことは…」
「レンです。」
呼ばれ方に拘りがあるのだろうか。本当に頑なな人だった。
「レン、君は本当にメイドさんなの？」
「はい。多分…そうです。」
自信はないらしい。どうしてそこで自信がなくなるんだ！？　誰か俺に説明をしてくれ。

「ふぁああ。おはよっす。」

クワルが起きた。そういえばハイドはすでに起きてどこかに行っているようだ。
「おはよう、クワル。実はお前に訊きたいことが…」
「侵入者を排除します。」
手早く開け放たれた窓。クワルの腕を掴むレン。クワルはまだ寝ぼけている。
レンはクワルの腕を右肩に背負い、そのまま引っ張り上げる。クワルの体が浮いたところで腰と膝のバネを使ってさらに押し上げ、クワルは引っ張られる方向へと加速する。レンは引っ張っていた腕を離し、クワルは窓へ向かって飛んでいく。
「レン、ちょ…」
「ぎゃあああああああ！」
クワルは外に飛んで行ってしまった。ちなみにここは3階である。
「掃除が完了しました。」
「クワルーっ！」
俺は窓に駆け寄る。いくらクワルでもこれは危険だ。しかし窓から見る光景は昨日見たものと違っていた。
「はぁ…はぁ。目ぇ…覚めたぁ…。」
2階の高さ辺りにネットが張られている。ネットの上に大の字で転がっているクワル。大丈夫そうだ。

俺の荷物の中にあった縄梯子をクワルの元に投げる。この縄梯子は師範に持たされたものだ。クワルは縄梯子を登って部屋に戻る。
「死ぬかと思ったぜ。」
「俺も死んだかと思ったよ。」
「生きているとは素晴らしいことです。」
実行犯が言っても心に響かないと思う。
「レン、クワルもこの部屋の住人だ。侵入者じゃない。」
「はい、承知しております。先程はワタクシなりの冗談です。」
投げ飛ばした時点で冗談ではない気がする。俺とクワルが乾いた

笑いをしていると部屋の扉が開かれる。
「おい、貴様ら。そろそろ起きないと間に合わ…」
「侵入者を排除します。」
「うわあああ！」
繰り返される悲劇。いや、喜劇だろうか。早朝のランニングから帰ってきた様子のハイドにも洗礼が浴びせられる。それにしてもクワルはともかくハイドを投げ飛ばすとは、このメイドさんは中々の実力者と思われる。
窓からハイドが顔を出す。
「この女は貴様の差し金か？」
ハイドのこめかみがピクピクと動いていることが確認できる。お怒りのようだ。
「そうだったら俺も困ってないよ。」
俺は両手を上げて首を横に振る。目線でこの場はスルーしてくれとお願いする。…なんとか了承を得た。
「ディム様、皆様、そろそろお時間です。」
確かにそろそろ行かねば間に合わない時間だ。お言葉に甘えて俺たち3人は寮を同時に出て行った。
居住区の道をしばらく歩くとハイドが俺の肩を叩く。
「で、あれは何なんだ？　色々と尋常じゃないぞ？」
ハイドの疑問は尤もだ。でも俺も分からないからどうしようもない。
「分からん。だが、今は危険を感じないからいいかと思う。」
「それでいいのか？」
「もちろん、確認するさ。考えても分からないことは誰かに訊くのが一番早いって。この学院の責任者とかにね。」

それぞれが聞きたいこと

～ディム～

「……では新入生の皆さん。自らの意志の元、充実した学院生活を送ってください。以上です。」

学院長のありがたいお話が終わった。正直に言うと全く耳に入っていない。俺、あとおそらくクワルも、別のことで頭がいっぱいだ。

（学院長だったのかよ！　あの受付のお姉さんは！）

そういえば事件後の病室に合格通知を持ってきてたっけ。ラゼスさんやルミネが妙に畏まっているなと思っていたが、その理由はよく分かった。

学院長スカーレット＝ディストール。ドレイクと同じく七聖である。そして、俺の入学推薦書を書いた人。やはり俺はこの学院に来るまでこの人と会った記憶が無い。

学院長に訊くことが一つ増えた。既に俺の中ではレンのことよりも優先的に訊く事柄となっている。

幸い歓迎会は昼食時から開始されるため、少し時間がある。今から追えば学院長を捕まえられるかもしれない。慌てて追おうとする俺だったが、右手を引っ張られ、動きを阻害される。俺を掴んでいるのはクワルだった。

「おい、クワル。あのメイドの件で学院長に訊きに行くんだから離せ！」

「ディム、今のおいらにとってはそれよりも重要なことがあるんだ。先にそれを済ませてからにしてくれ。」

クワルの真剣な顔。以前この顔を見た時は“氷結の雨事件”のとき、俺を叱咤する時だったか。自然と俺の顔も真剣なものになる。

「何だ？　緊急なことか？」
「ああ、今じゃねえとダメだ。」
クワルは人差し指を人ごみの中に向ける。その指は出口へと向かう集団の最後尾のある人物に向いていた。
「昨日の子って、あの子か？」
指さす先の人物。小柄な女の子だ。髪は長めで真っ直ぐ下している。髪の色は緑色っぽい。結構飾りの多い白い服を着ていて体系はよく分からない。
どうしよう。本当にいたよ。
「た、多分そうじゃないかな。もしかしたら人違いかもしれないけど、特徴は大体合ってる…ね。」
「おっしゃー！　早速行ってくるぜ！　じゃあ、後でな！」
「ああ…。」
クワルはささっといなくなる。このままクワルを追いたい衝動に駆られるが…
「バカは放っておいて行くぞ。貴様もバカだがクロイツほどではないと信じさせろ。」
「分かったよ、ハイド。」
隣にハイドがいるからいいか。この男にしては珍しく俺と行動を共にしたいようだ。いいだろう、なってやるよ。お前の欲しいものに。
「貴様がいなくてはあの女についての抗議がしづらいからな。」
抗議ではないぞ。確認だからな。
追いかけたが、結局学院長は自分の部屋に戻ってしまっていた。
学院長室の前で立ち尽くす俺たち2人。
「さて、ハイドくん。俺たちはこれからどうするかね？」

「もちろんこのまま行くしかないだろう。早くノックをしたらどうだ？」

何故かハイドは俺を前に行かせようとしている。普段は自分から前に行く人間が急に後ろに下がると不安を感じる。

「な、なあ…学院長って恐いのか？」

「何を心配している？　別に取って食われることは無いぞ。」

ハイドの顔を見る限りは問題は無さそうだ。だからこそおかしい。

「…せめて骨は拾ってくれよな。」

「ああ。」

即答でＯＫされた。こんなのいつものハイドじゃない！

「一体この先に何があるって言うんだよおお！」

ガチャッ。

俺が叫ぶと同時に扉が開かれる。俺は滝のような冷や汗を流している。

「おやおやこれはこれは。話題の新入生その１と４じゃないですか。どうしたんです、こんなところで？」

出てきたのは学院長ではなく、正装っぽい恰好をした優しそうな男だった。とりあえず怒られずには済んだみたいだ。

「…これ以上騒いだら、殺すぞ。」

訂正。ものすごい恐い人だし、怒られた。ハイドまで縮み上がっている。

「どうぞ、入ってください。私で良ければ忙しい学院長に代わってお話ししましょう。」

「は、はい！」

笑顔の仮面に戻った男の案内で部屋に通される。入ると、そこは客間という感じの部屋だ。奥に扉があるので、学院長はそちらにいるのだろう。

「さて、まずは私の自己紹介からしておきましょうかね。私はクレ

イン＝ロプホール。…まあ、学院長の秘書みたいなものです。」
「あ、俺…いや、私は…」
「そちらのことは分かっていますよ、ディムくんとハイドくん。さて、学院長への用は何です？」
さっさと本題に入れということらしい。とりあえずレンのことを訊いてみるか。
「実は僕らの部屋にメイドさんが…」
「ああ、ティフェレンのことですか。」
やはり学院側から送られてきているようだ。その意図は一体何であろうか。
「先に言っておくと、彼女は別にこちらが手配したわけではありません。なので私や学院長に何を言っても彼女はあなたたちの部屋に現れるでしょう。」
「では何故あなたは彼女の存在を知っているのです？」
「うーん…すみませんが、それにはお答えできません。」
全く同じ笑顔をしているため、残念さを感じない。むしろ愉快そうに見える。
「これだけは答えて欲しいんですが、彼女が俺たちに危害を加えるようなことは無いという確証はありますか？」
「ふむ…なるほど。ディムくん、あなたは思ったよりもご自分の立場を理解しているようですね。大丈夫です。私、そして学院長が保証しましょう。彼女はドレイクの仲間ではない、とね。」
「え？」
隣でハイドが目を見開いている。ドレイクの名前が出てきて驚いているのだろう。こいつは“氷結の雨事件”のときは意識が無かったから詳しくは知らない。
ドレイクは今も逃げている。そして奴の目的を考えると、再びフェイナや俺が狙われることは十分考えられるのだ。
蒼星結晶。霊峰の扉を開く鍵とされる特別な蒼い霊石は、ドレイ

クとの戦いの後、その姿を再び消している。一度目はフェイナの体から現れていた。消えるときに最後に触れていたのは俺のはずだ。蒼星結晶が人の体を隠れ蓑にできるとすれば、俺と彼女のどちらかに隠れている可能性は高い。

ティフェレンは俺を名指しした。内心、俺は恐怖していたのだ。俺を捕えに来た刺客ではないか、と。

「ディムくん、とりあえずは安心してください。むしろ彼女はあなたを護りに来たはずですから。」

「…分かりました。ではこれで失礼します。ありがとうございました。」

「もういいんですか？」

「はい。あなたに訊けることは聞けたと思います。」

あとは本人に訊くしかない。学院長、そしてティフェレンに。

俺とハイドは2人で食堂へと向かっている。もうすぐ歓迎会とやらだ。

「貴様がドレイク元団長に狙われているかもしれないというのは本当なのか？」

ハイドが心配してくれるとは思わなかった。

「あくまで可能性の話だ。だけど本当に危険な奴が来たら逃げてくれよ？」

「それこそ冗談だろう。貴様が残って俺が逃げることなど天地が引っくり返ってもありえん。」

そうだろうな。それがいつもハイドが言っている覚悟なのだろうから。なんだかんだでこいつもお人好しなのだ。

障害物競争　開幕

～ディム～

現在、新入生歓迎会の真っ只中である。学院生代表とやらの挨拶もそこそこに（誰も聞いてなかったと思う）立食形式で食事が進んでいく。思ったよりも人が多くて、なかなか知り合いに巡り合えない。

「クワルいないなあ。」

「クロイツのことだ。あの女子にまだ付き纏っているのだろう。昨夜の貴様のせいで勘違いしているからな。」

「…聞いてたの？」

「嫌でも聞こえてくる。しかし、俺を巻き込まないのならば貴様らが馬鹿騒ぎをしても文句を言うつもりはないから安心しろ。」

昨日のあのやりとりはハイド公認だったようだ。じゃあ今日も遠慮はいらないな。

「それに、案外一方的に付き纏っているわけじゃなくなってるかもしれないな。貴様の嘘も真になりかねん。」

「どういうこと？」

「クロイツだけでなく貴様も忘れているようだな。貴様はその覚悟（つるぎ）で結晶獣から護り通しただろう。あの女子を。」

俺の記憶から結晶獣に関する記憶を引き出していく。思い当たった。キーゼル級狼型の結晶獣に襲われていた女の子。

「ああ、あのときの！」

「大方、貴様は嘘の輪郭をはっきりとさせるために、見たことのある実在の人物の特徴を挙げたのだろうな。」

俺は無意識のうちに記憶からあの子の姿を思い出していたのか。架空の人物の想像でも、実在するものに強く影響を受けているとい

うことか。一からイメージするとは難しいことだな。

「で、女子といえばだが…」

「どうした、ハイド？　何か言いにくそうだが。」

「貴様は昨日からアイエンに一度でも会ったか？」

ハイドがアイエンと呼ぶのはキエン＝アイエンのことだ。彼女も受験と事件を共に戦った仲間だ。俺にとっては同じ道場の門下生同士でもある。道場時代は全くと言っていいほど関わりは無かったがな。

「キエンか？　いや、会ってないな。俺がウィスタリアに着いた時にはもう遅かったし。さすがに女子寮にまで会いに行こうとは思わないよ。まだ先輩たちにも会ってないし。会いに行ったのはフェイナくらいだ。」

「…そ、そうか。…ディム、俺は…俺の知り合いにちょっと挨拶してくるから。」

「！？　ハイド？　一体お前どうした…。」

ハイドが俺に対して貴様ではなく名前で呼ぶなんて…今日のハイドはどこかおかしい。まさか、あの本？

「命があったらまた会おう。ではな。」

不吉なことを言って去って行った。この挙動不審さは本の影響ではない。目の前で何かがあったとしか考えられない。

俺とハイドは向かい合って話していた。ということは俺の後ろに何かがあるのだろうか。後ろを向いてみる。

「アハハハ…」

ゆらりと揺れながら立つ姿がそこに在り。周囲には人がいなく、異様な雰囲気が展開されている。右手は手首から先が“炎”である。

「キエン？」

「…昨日いないと思ったら、あの子に夜這いしに行ってたんだぁ…」

良く聞き取れないが、小声でぶつぶつ呟いている。幽霊のように

立っていた彼女はファイティングポーズをとる。
「キエンさん!?」
「歯ァ食いしばれやコラァ!」
迫りくる炎の拳。歯を食いしばったところで顎が消し炭になる一撃。キエンを相手に俺が避けきることは不可能だ。かといってガードも不能。受けはそのまま死を意味する。

俺の集中力が高まっていく。俺の眼はキエンの右手に溶け込んでいる霊石を捉えた。俺の右手はキエンの右手の霊石へと向けて伸ばされる。そして掴み取った。
俺の右手には刀身が炎でできた剣が握られている。これが俺の力、他人の魔法をも剣の作製で上書きする能力。今回の場合は、上書きと言うよりも魔法そのものを剣にしたようにも見える。まだ調べる必要がありそうだ。

「さあ始まりました! 注目の新入生! 七聖ドレイクを打ち破ったというディムと鮮やかな変身魔法を使うキエンの直接対決! 今や会場中がこの2人から目が離せない! 実況はわたくし、2回生のシャウラ＝スコルピオ。解説は“千の脳を持つ女”ルミネセンス＝アルカナムさんでお送りいたします。」
「何なのですか、その二つ名は。想像するとすごく不気味ですわよ? あと、盛り上げようとしているところ悪いのですけれど、もう終わりますわね。」

眼鏡をかけた女子と見覚えのある銀髪のあの人が何かを言っている。立食の会場にいつの間にか実況席が用意されていた。
(おっと、よそ見をしている場合じゃ…)
視線を戻すと俺の目の前には靴の裏がある。キエンが履いているものだろう。もちろん避けられることは無く、それは俺に命中する。
俺の手から離れた炎剣は元の霊石になった。

「おーっと！　これは早い決着となりました！　勝ったのはキエンです！　ディム少年が七聖を打ち破ったというのは何かの間違いだったのでしょうか！　解説のルミネさん、これは一体どういうことなのでしょうか？」
「そうですわね……そもそもこれは戦闘ではなく痴話喧嘩の類、ということでしょうか。あくまで類、ですが…」

いたた、と体を起こす。俺の前には誰かの右手が差し伸べられていた。
「今度は気絶してないね。耐性でもついたのかな？」
赤いローブを着たメガネの青年だった。俺が唯一、先輩と呼んでいる先輩、ラゼスさんだ。学院の3回生でありながら既に騎士団候補生ではなく正式な紅蓮の騎士団員になっている人だ。
「慣れという奴です。できれば慣れたくありませんが。」
「その様子なら大丈夫そうだね。」
「何がです？」
「待っていれば分かるよ。」

俺は周囲を見回す。気付けば机に在った料理が全て片付けられている。さっきの実況席もその後に設置されていたようだ。実況席の後ろの壁に“新入生歓迎、障害物競走”と書かれた横断幕が掲げられた。

「さて、前座を飾ってくれたディム少年が起きてくれたところで、早速今年の歓迎会の競技を説明したいと思いまーす！」

「競技？」
「障害物…ね。今年は歓迎が手荒そうだなあ。」
隣の先輩を見ると実に楽しそうな顔をしている。俺は逆に不安に

なった。

「今年の競技は“障害物競走”です。新入生の皆さんには、コース上に仕掛けられた上級生の障害物を突破してゴールを目指していただきます。」

上級生の仕掛ける障害物…。手荒い歓迎…。嫌な予感しかしない。

「コースは、簡単に言ってしまえばウィスタリアの駅と学院を往復するコースです。競技中に立ち入ることのできる場所は、学院の敷地内、居住区、中央広場、南区の街道、駅のみです。この食堂をスタート地点として、駅に行き、駅で帝都エクストレム行きの切符を買っていただきます。その切符を持って学院の正門に戻ればゴールです。」

中央広場まで出れば直線のみのコースというわけだ。曲がる必要が無いのならば、俺のガンショットアクセルでも行けそうだ。

「次にルールの説明ですが、魔法は何でも使っていいです。むしろ使わないと勝てないでしょう。ただし、建物などを壊した場合は失格となります。他は厳密にはルールを決めていません。…異常です。」

（…今この司会者、自分で異常って言ったぞ？　以上です、じゃないのかよ！？　意味的にはどっちでも通る気がするけどさ！）

「賞品についても説明しておきます。まず、先着5位までは半年分の学費が免除されます。」

何…だと！？　まさかこんな学院生の企画でそんなことが実現できるなんて。周りの面倒くさいという雰囲気が変わったことが伝わってくる。

「さらに3位までに入れば、次の3つから一つの特典を得られます。一つは“年末の長期休みに行われる騎士団の演習への参加権”。これは年末にアトモスで行われる騎士団演習に、騎士団候補生の立場

で参加できる権利です。一つは“ベルヴェルク魔導機械レースの本選出場権”です。毎年行われているベルヴェルク魔導機械レースにはウィスタリア代表として3チームが出場しますが、ウィスタリア予選に出ることなく、3つの枠のうちの一つに入れるというものです。最後の一つは“学院長のご褒美”です。詳細は我々も知りませんが学院長は男子限定だと言っていました。」

おおーっとどよめく会場。主に学院長のご褒美の辺りでだが…。

俺はそれよりも騎士団の演習に興味がある。先月の3日間で俺は、俺にできることは何かを学んだ。俺には結晶獣（クオーツ）と戦う力がある。戦うことで護れる人がいる。そして、生きていて欲しい人たちがいる。話に聞く限りでは騎士団という組織はそれを体現している。しかし、クワルから聞いた紅蓮の騎士団の話のように、“人命や環境を無視してでも”という一面があるというのなら、俺はそこで戦うことはない。俺は俺自身の眼で確認したいのだ。そのチャンスがこんなに早く訪れるとは思っていなかった。この勝負、負けるわけにはいかない。

「それでは5分後にスタートとします。参加する新入生はそれまで食堂で待機していてください。スタートが宣言されたときに、この食堂にいる新入生を参加者とし、それ以外の新入生は不参加とします。…それじゃあ皆さーん！　頑張ってくださいね！」

「それじゃあ、ディムたちの活躍を見物させてもらうよ。ではまた後で会おう。」

食堂のドアが開け放たれ、上級生たちが次々と出ていく。ラゼスさんもそれに混ざって出て行った。

「ディム、アタシと勝負よ！　アタシが勝ったら、アタシのお願いを一つ聞いてもらうからね！」

キエンが俺を指さして宣戦を布告する。何故怒っているのかは知らないが、しばらくはこの調子かもしれない。
「分かったよ。もちろん俺が勝ったら俺の言うことを聞いてくれるんだよな？」
「も、もちろんよ！」
この切返しで怯むかと思ったのだが、受けて立つと言われてしまった。また、勝たなきゃいけない理由が増えたようだ。とりあえず俺にしか目がいっていないキエンに忠告をしておこう。
「キエン、言っておくけど競技はもう始まっているぞ？」
「え？」
俺はキエンを後ろから捕まえようとしていた男を蹴り飛ばす。男は食堂の出口から外まで飛んでいき、倒れたまま動かなくなる。
「どういうことなの、ディム？」
「食堂という土俵で始まった乱闘ゲームってところだ。きっかり5分後に食堂にいるものが勝利者という、ね。だから、一緒に残るぞ、キエン。」
「え…う、うん。」

レースの開始は5分後だ。しかし、レースの開始時にこの場にいなければ参加資格が与えられないのだ。つまり、自分の意志でなくとも、この場にいることができなければ自動的に不参加、失格となる。邪魔者は追い出せばいいのだ。

俺が男を蹴り飛ばしたのを合図に食堂の内部は乱闘騒ぎとなる。良く見れば厨房には強固なシャッターが閉じられており、この企画の思惑通りになっていることが分かる。
「アイエンのことを護るとは、貴様は随分と余裕があるようだな。さて、ここで貴様との決着をつけようか？」
ハイドが戻ってきた。言動は相変わらずだが…。

「さっきは逃げたな？」
「な、何のことだ？」
過去のハイドの言動を振り返る。
（「時には自らの命がかかる場面もあるでしょう。その時に立ち向かえる人間とは、戦わなければならない理由、覚悟がある人間です。」）
（「貴様が残って俺が逃げることなど天地が引っくり返ってもありえん。」）
この男の覚悟を俺は疑ってもいいかもしれない。さっきのキエンを前にして俺を見捨てて逃げたのだ。
「言っておくが、俺はレースでお前と戦いたい。だからこの場は、共同戦線といかないか？」
「ま、まあいいだろう。本気の貴様と戦ってこそ意味があるからな。」
よし、さっきの借りを使って頼もしい仲間を得た。正直、剣なしでこの場を突破できる気がしない。この場で剣を出すと、恐らくだが企画の運営に消される、もとい失格にされる。ハイドとキエンがいてくれるなら心強い。俺とハイドとキエンが背中を合わせて周囲を威嚇することで、俺たちから人は離れていく。とりあえず、この場はこれで切り抜けられただろう。
「おい、ディム！　覚悟しやがれ！」
しかし、誰も来なかったわけではない。俺の元へと迫る巨大な甲冑の腕。これはクワルの“ウルリクムミの鉄槌”だ。これに掴まれたら一切身動きができなくなる。つまり、簡単に食堂の外に出されてしまう。幸い速さは無かったため、俺たちは後ろに跳んで躱す。
「クワル、まさかお前と戦うことになるとはな。一応聞いておくが、賞品目当てか？」

「当たり前だろ！　学院長のごほ……おいらには勝たなくてはいけない理由があるのさ。」
　間違いなく、今のクワルには背を預けられない。事件の時に最も頼りになった相棒が、今は残念な敵となってしまった。…本当に、残念だ。
　今は味方のハイドがクワルと対峙する。
「クロイツ、勝負はレースでつけてもらえないか？」
「何を言ってやがる？　おいらがおまえらと競争して勝てるはずがないだろ！」
　クワルは断言した。確かに強化系クレスタに足の速さで勝てるはずがないが…。
「何でだ？　別に足の速さのみを競うわけじゃないんだから、魔導機械（マキア）を使ってもいいんじゃないか？」
　俺の疑問に対し、クワルは肩をすくめる。
「まだ…作ってないんだ…。」
「そうか…。」
　クワルの答えに俺は肩を落とした。

「さあ間もなく5分です！」
　喋っている間に時間が来たようだ。ピストルを持った司会者が出口付近に立つ。クワルも俺たちを追い出すことを諦める。食堂内に残る新入生は５０人から６０人ほどだろうか。
「仕方ねえ。別の手段を使うとするか…。」
　多分、まともな手段では来ないだろう。今まで俺はクワルのことだけは予想を当てたことが無い。今回こそはクワルの行動を予測してみせる。
「ねえ、ディム。アタシたちも出口の近くに行かなくていいの？」
　キエンが食堂出入り口に向かう集団を指さす。
「いや、あの集団はすでにチームなんだろ？　チーム以外の人間が傍にいたらカウントダウンの時に押し出されるから危険だ。確実に

スタートまで中央で待つのが吉だ。」
「さらに言えば、これは短距離走というわけではない。障害物競争だ。スタートダッシュが大きく差を分けるものではない。…もし、フライングなどしたら目も当てられないしな。」
「…じゃあゆっくりスタートするってことね。了解したわ。」
俺とハイドの意見は一致している。ハイドと視線を交わし、互いにフッと笑う。

「カウントダウン！　5、4、3、2…」
秒読みが開始された。司会者の右手にはピストル。俺はピストルの音を聞いてから動き出せばいい。

今の内に剣を創っておく。新入生同士の乱闘で持ち出すわけじゃないから、運営さんには許してもらいたい。
剣の色は赤。剣の色ができることに関係していることは何となく気付いている。ドレイクを倒したときの蒼い剣はまた違っているようだったが…。基本的に剣の色が使える魔法の色と一致している、と俺は分析している。
このレース、最大のライバルはハイドだ。銃声のような音と共に駆ける強化技法“ガンショットアクセル”は移動用魔導機械の最高速を上回ることは体験済みだ。最高速ガンショットアクセルの連続使用は体力を著しく奪うが、出力を抑えれば居住区の病院から中央広場まで楽に移動できることは俺自身が証明している。俺の猿真似と違って、より高度に扱いこなすハイドにできないはずがない。
でも、実はハイドに勝つ必要は全く無い。俺の目的は3位以内に入ることだ。ハイドが先にゴールしても3位以内なら俺の勝ちともいえる。

「1…」

全員スタートの構えを見せる。出口付近で構えるグループは「ゼロ」の宣言…いや、ピストルの音と同時に飛び出すだろう。

ダーンッ！

銃声が鳴り響く。出口付近の集団が音と同時に一歩目を踏み出した。

「０！」

ドンッ！

司会者のピストルが競技の開始を告げる。ここからはレースの時間だ。周囲の人間と速さで競う必要がある。

「ねえ、ディム。今、ピストルの音が２つ無か…」

俺とハイドはほぼ同時に駆け出す。弾丸の如く、銃声を残して…。キエンが何を言おうとしたのかは分かるけれども、今は返事をする時間がないのだ。

出口ではフライングして飛び出した先頭集団が、上級生から失格を言い渡されている。約１０人ほどだ。俺とハイドの作戦は実に上手くいった。

正式なスタート以前に発砲音が聞こえれば、間違いなくそこで動き出すはずだ。全員が銃の音に耳を傾けて集中している状況を逆手に取ったのだ。

どうやったらここまで銃声に似せた音になるのか実は良く分かっていないが、ハイドのガンショットアクセルの際に生じる音は銃声に近い。１テンポでも早くハイドがスタートすることで、何人か騙されてくれたのだ。

本当ならば俺がやる予定だったが、ハイドの意味深な目配せが「

任せろ」と言っていた気がしたので、任せた。これで足に自信がありそうなライバルを何人か潰せただろう。

スタートは良好。中央広場まで何も用意されていないため、問題なく辿り着く。先頭はハイド、続いて俺だ。ここまでは予定通り。問題は上級生の用意する障害物とやらだ。

～クワル～

「ちょっと、ディム！　アタシを置いてくなあ！」

ディムとハイドは例の強化魔法で駆け出して行った。おいらはあの魔法の燃費を知らないが、少なくとも足の速さでおいらが勝てるはずはない。出遅れたキエンや他の参加者もおいらよりは速い足で追いかけていく。

「っにしても、こんな罠かけるか普通？」

おいらはゆっくりと食堂を出ていくと、外にはフライングで飛び出し、参加資格を失った奴らがいた。

「クロイツ、お前の仲間だろ？　何とかなんねえのか、あいつら。」

おいらと同じようにゆっくりと食堂を出てくる参加者もいる。おそらくはおいらと同じ考えだろう。

「足の速さで勝てないのは分かってるさ。だから、おいらのような奴は違う場所で勝てばいい。おまえらもそう思ったからこそ、ゆっくりしてるんだろ？」

「ってことはクロイツも居残り組か。」

居残り組。こういうのが出てくることは当然だろう。

「ああ、このレースで切符を買いに走るのはバカのすることさ。」

あとは中央広場あたりで、ディムたちを待てばいいのだ。

障害物競争　第1関門“あなたを撃ち落とす”

～ルミネ～

わたくしは今、空にいる。といっても自分で飛んでいるわけではない。浮遊型魔導機械を使用した乗り物の中にいる。この乗り物には、外から見ると「実況席」と書かれているはずだ。中にはわたくしを含めて数人の男女がいる。わたくしの隣にはマイクを手にしているメガネの少女がいる。

「さーて！　いよいよ始まりました“新入生歓迎障害物競走”！　ここでもう一度私たちの紹介をしておきましょう！　実況は2回生、シャウラ＝スコルピオです！　解説は“目が合ったら辞世の句”でおなじみのルミネセンス＝アルカナムさんでーす！」

「まず、あなたの辞世の句とやらを聞かせてもらえます？」

わたくしの前でそのようなことを口走る人間に会ったことは無い。一応言っておくが、“千の脳を持つ女”なんて二つ名も今日初めて聞いた。

「今大会は競技開始前から波乱の連続ですね、ルミネさん。」

「そのようなルールにしたのはあなたでしょう？　ご自分でも仰ったように“異常”ですわ。」

異常には目の前の少女も含まれている。きっと伝わってはいないだろう。わたくしは周りに伝わるように大げさにため息をついた。それには、実況者が鬱陶しいということに加え、この場に自分がいることへの不満も含まれている。

歓迎会はエンターテイメント。競技に参加できない人たちのために状況を伝えるという役割だということは分かるが、普段ならばわたくしがする仕事ではないのだ。何よりも性に合っていない。

それにしても、この実況者のいうことは尤もだ。企画の思惑に参加者同士の潰し合いがあったのは間違いない。それにどれだけの人間が気付けるかが勝負の分かれ目の一つであった。それをディムは全員に一気に知らせた。わざわざ目立つ立ち回りをしてまでだ。本来ならば他が気付かない内に何人かを気絶させるところだろうが、彼はそれをしなかった。全てはスタート間際のフェイクのため。全員の警戒心を周囲の人間に向けさせておいて緊張感を高め、ピストルの音を偽装し、緊張感から解放された参加者がフライングで勝手に失格になっていくという算段だ。

彼に対するわたくしの認識を改める必要がありそうだ。何が彼を変えたのかは分からないが、間違いなく例の事件の時の彼とは違う。

「異常と言えば、わたくしは競技のことを知らされておりませんが、本当にわたくしが解説でよろしいのですか？」

「あ、大丈夫です。細かいことは私が捕捉しますから。」

ならばあなただけでいいのではないのか、とわたくしは再びため息をつく。

先頭集団が中央広場に出てきた。突出している人間は2人。どちらも見覚えのある顔、ハイドとディムだ。それに１０人ほどが続く。

「トップはハイド選手！　さすがは優勝候補といったところでしょうか！」

「ここまでは予想通りですわね。しかし障害物競争ですから、ここからが本当の勝負と言ったところでしょうか。まだ後続に魔導機械が控えているとも思われますし…。」

ここまでは単純な足の速さだけの勝負だ。それではこの結果になることが目に見えている。先頭の足を止めるための仕掛けが障害物として用意されているはずだ。

言っている間に先頭の2人は南区の街道に躍り出た。いつもと違い、道の上に様々なものが置かれている。もちろん都市の許可を取ってやっている。…はずである。

「さあ、やってきました。まずは第一関門、“あなたを射ち落とす”です。」

「はい？」

「ここでは両脇に立ち並ぶ商店から上級生の狙撃班が新入生を狙っています。発射される弾に当たると5mほど中央広場方面へと弾かれてしまいます。新入生の皆さんが、いかに障害物をうまく使って狙撃を回避できるかがポイントです。」

まさか障害物を使って避ける競争だとは思わなかった。でも、あの岩の配置には別の意図がありそうだが…。

「道理で無造作に岩が置いてあるだけだったのですか。」

「新入生にとっての障害物…それは先に学院に入った我々であるということです。」

「少しあなたを見直しました。こんなにも楽しい企画でしたら、わたくしも喜んで参加しましたのに…。」

「…だから何も言わずに、ここに連れてきたんですよ…。」

「？　何か言いまして？」

「いえ、何でもないですよ。」

射撃でわたくしを使わないことだけが、この人の失敗であると思う。わたくしならば誰一人として通さないだけの弾幕を張ることもできる。残念ながら、このような上空では何もできそうにない。

～ハイド～

ここまでは体力も精神力もあまり使わずに来ることができた。本番は街道からだ。まず、道の上に無造作に岩が並んでいる。これの

何が障害なのかは知らないが、俺の選択肢は突撃することのみだ。
強引に進むのがダメならば、上級生に無理やり止められるだろう。
俺たちが聞かされている情報は、駅に行って切符を買ってこいということだけだし、岩を無視して進めばいい。

岩場の近くまで来ると、ご丁寧にも地面に赤線が引いてある。この線を越えると何かがあるはずだ。突っ切ればいいのは分かってはいるのだが、置いてある岩に興味がある。とりあえず近づいてみることにする。
「特に何も変哲のない岩、だな…」

パァンっ！
「うお？」

パンパンっ！
「うおう？おおう？」

3回の銃声。3回の衝撃。俺は気付いたら赤線より手前に戻されていた。
「おかえり。どうだった？」
…ディムにも追いつかれてしまった。
「分からん。後ろから見てたなら、貴様のほうが分かっているのだろう？」
「まあね。でも俺が聞きたいのは、撃たれた感想なのだよ、ハイドくん。」
撃たれた…か。確かに銃声も聞いている。ということはどこかに銃で狙っている人間がいるのか。俺は辺りを見回してみる。岩場の陰には誰もいない。
「それが知りたければ…次は貴様が行けえ！」
「ちょ、てめ…」

俺はディムを赤線の中に蹴りこんだ。そして周囲を確認する。道に置かれている岩に異変は無い。ディムがバランスを崩しながら歩いていくと、両脇の店の窓に変化が見られた。窓から銃が出てきたのだ。

（なるほど、俺はあれに撃たれたのか。）

俺の口からは乾いた笑いが漏れていた。一体、何人配置されているんだ？　見えただけでも片側１０人はいた。狙われたのは一人。両脇の銃口たちは全てディムに向いている。

パパパパンっ！

「ぎゃあああ！」

銃は一斉に火を噴き、ディムが俺のところまで戻ってきた。明らかに不自然な飛ばされ方である。おそらくあの弾丸には当たったものを一定の方向に移動させる効果が付与されているのだろう。殺傷力もゼロだ。魔導機械技術は何でもアリな気がしてくる。

「ご苦労だった。貴様のおかげで、俺も状況がつかめてきた。」

「……どういたしまして。」

「俺たちにとっての障害物は岩じゃなくて、弾丸だということだ。主催者側は岩を弾除けに使えとでも言いたいのだろうな。」

問題は狙撃が両側から来るということだ。岩の陰でやり過ごせるのは片側のみ。街道の道幅はかなり広いが、狙撃手から見れば近すぎる距離だろう。両側からの死角にならないと意味をなさない。

「ハイド、悪いが先に行かせてもらう！」

ディムは突きの構えをする。さっき初めて見たが、こいつは俺のガンショットアクセルを高いレベルで模倣している。細かい制御が効いていないようだが、最高速は俺と並ぶ代物だ。

つまりは高速でゴリ押しをするということだろう。いくら銃弾が速かろうと、当たらなければどうということは無い。高速で動く標

的の方が照準が定まらないはずだ。しかし置かれている岩によって、一直線には走れない。岩が配置してあるのは、参加者の足を止めるための仕掛けでもあったということか。俺には関係ないがな。

ディムは高速で駆ける。放たれた銃弾は奴を捉えることはできていない。このまま抜けられるかと思ったが、そう甘くは無かった。曲がるために一度、ディムは足を止めた。俺より遥かにぎこちないターン。そこを狙われて撃たれる。

「うお。え？　ちょっ！　あたたたた！」

一発当てられたディムは走る勢いを全て殺され、続く他の銃弾の餌食となり、俺の隣まで戻ってきた。

俺は見ていた。最初の一発を放った相手を。そいつは左前方の店の屋根の上にいる。一人だけ別格な狙撃手がいるのだ。もう、情報収集はいい。俺もゴリ押しで行くとしよう。

「そろそろ後ろの連中もくる。俺は先に行くぞ。」

俺は駆け出した。進行を阻むは銃弾。ならば俺自身も銃弾で対抗しよう。

意志を力に。想像を創造する。…俺に弾丸の如き速さを。

俺は音速の世界に足を踏み入れる。体だけでなく、意識もである。この瞬間では周囲から撃たれた銃弾の行先も見える。俺が注視するのは、ディムを射ち落とした屋根の上の男。彼から放たれた銃弾は、見事に俺に命中するコースを通っている。だが、俺の左手には槍がある。これが俺の答えだ。

俺へと迫る銃弾に対し、俺は自分から槍をぶつける。当たった瞬間に俺はその槍を、手放した。後方へと転がっていく槍。しかし俺は前に進める。俺はこの一瞬が欲しかった。

（いける！）

俺の足が前方にある2本目の赤色のラインを越えると、俺に対する銃撃は止まった。これで第一関門は突破したということだろう。ゴリ押しした分、消耗が激しい。次はどんな仕掛けが待っているのか…。

障害物競争　第2関門“その膝は曲げないで”

～ルミネ～

やはり、ゴリ押しで突破されてしまった。ディムはまだ第一関門の前で考え込んでいるが、彼も突破できるだろう。むしろ彼の方が常識外れなことをしてくると思っている。

道に置かれた岩は正真正銘の障害物だ。直線の広い街道を、真っ直ぐ走れなくするためだけの障害物。狙撃班が的を狙いやすくするためだけのものだ。

「いやー、すごいですね、彼。学院生の中で最高のスナイパーの銃弾を槍で落としましたよ。」

「仕方がないでしょう。いることがバレていては、スナイパーの本領は発揮できないでしょうし。本来はこのようなシチュエーションならば、わたくしのようなタイプが向いているのですが…」

「いや、完全に封殺することが目的じゃないですからね？　分かってますか、ルミネさん？」

「もちろん分かってますわ。」

わたくしの気が済んだところでテキトーに見逃せばいいということだ。

「などと言っているうちに、残ったディム選手に後続のグループが追いついた！　次々とディム選手を追い抜いて…」

パパパパパパン。

「いなかったー！　先程一人に逃げられたスナイパーチームの執念が火を噴いたあ！　全員が第一関門のスタート地点で立ち往生！　突破したのは依然ハイド選手のみ！」

「そういえば彼、そろそろ次に着くのではありませんこと？」
ハイドを見てみると、間もなく白いエリアに到達するところだった。そこが第2関門なのだろう。
「では第2関門“その膝は曲げないで”の説明をしたいと思います。」
「また妙な名前ですわね。」
「ちょうどハイド選手が入ったので彼を使って説明しましょう。」
「どわあああ！」
ハイドが白いエリアに入った瞬間に、彼は盛大にこけてしまう。滑ったとか躓いたようには見えなかった。
「こけて当然、といったところでしょうか。あのエリアは特殊な状態になっています。」
「“霊域展開”かしら？」
「さすがはルミネさん。その通りです。あれはルミネさんと並ぶほどの性悪女による干渉系魔法です。今回の効果は『領域内の全ての人間の膝の関節を固定する』と聞いています。」
「大がかりな魔法を使っている割には、随分とせせこましいことをしますわね。それからシャウラさん、後でわたくしの研究室にご招待しますわ。」
それにしても、凄いのか凄くないのかよく分からない魔法を聞かされた気がする。
“霊域展開”は干渉系の上位魔法である。発動時に決めた範囲内に自分の定義（ルール）を強制的に適用させる。範囲を広げれば広げるほど大掛かりな魔法となり、ルールが複雑になるほど難しい。また、ルールの対象は、領域の中に全て納まる必要がある。対象が人間ならば領域の中に全身が入らなければルールの影響を受けない。
実はわたくしは霊域展開を使えない。白のクレスタといえども、

上位魔法が使用できるとは限らないのだ。この術を使える人間はよほど干渉系に特化したクレスタなのだろう。

足を曲げられなくなったハイドは、ぎこちない足取りで前に進み始める。速度は先ほどとは雲泥の差だ。彼の強化魔法を以てしても、霊域の束縛からは逃れられない。

「シャウラさん、彼が進んでいく先に模様が書いてあるのですが、あれは何です？」

恒例の赤いラインが引かれた後、白く塗られていた地面が今度は黒く塗られている。１０ｍほど黒い地面が続いており、赤いラインの後からまた白い地面に戻っている。そして黒い地面の中にはいくつかの白い円が見られる。円は直径３０ｃｍほどの大きさだ。それが一列（ところどころ２個並列になっているが…）に、一定間隔に並んで白い地面同士を結んでいる。

「あれがこの関門の本番です。あれを渡るためのルールは簡単です。白い円を踏んで渡ればいいのです。ただし、各円に触れられるのは１回ずつです。また、黒い地面に触れてもいけません。ルールを破った者には第１関門と同じ弾丸を受けていただき、赤線の手前からやり直しとなります。ぶっちゃけて言えば、けんけんぱです。」

わたくしが言うのもなんだが、この人たちは新入生を撃ちたいだけなのではないかと思ってしまう。

ハイドが黒いエリアに到達する。そして踏み込んだ瞬間に５ｍ後退させられていた。先程と比べて、この５ｍは重みが違う。

「流石のハイド選手も自慢の足を封じられては苦戦している模様です。」

「どのように突破するのか楽しみですわね。」

「おっと！　第1関門に動きがあったようです。そちらを見てみましょう。」

…スタートの赤いラインの手前で、ディムとキエンは穴を掘っていた。まさか地下を潜っていくつもりなのだろうか？

「ディム選手、キエン選手と共に穴を掘っています。今は深さ1mほどでしょうか。一体彼らは何をしようというのでしょうか！」

「腕に覚えのある練成士でしたら地下に道を創るという発想もあっていいかとは思います。ですが、競技的に問題は無いのでしょうか？」

「基本的に最初に言ったことさえ破らなければいいということにしています。『南区の街道をコースとする』というルールに関してはグレーな気がしますがね。」

ディムは穴を掘ることをやめた。手には青い剣。彼は両手でそれを持ち、正面に真っ直ぐに構えた。

～キエン～

「キエン、手伝ってくれ。」

ディムからスコップを手渡される。近くの店で買ってきたのだろうか。

「はあ？　アンタ、まさかとは思うけど、穴でも掘って行こうって言うの？」

「大体そんなかんじ。」

ディムはザックザックと穴を掘り始める。アタシは彼の正気を疑うしかない。時間を考えているのだろうか。少なくとも今日中に完成するとは思えない。

確かにアタシは正攻法での突破は難しいと考えている。当たれば後ろに戻される弾丸では、拳で叩き落しても、当てられても結果は変わらないのだ。全て回避することがアタシにはできない。盾を使っている奴もいたが、一発で盾を飛ばされ、2発目でアウトになっている。

「アンタ、本当にやる気あるの？」

「ああ。これなら確実に突破できる。…はずだ。」

確実なんて言葉を使うなら、もっと自信を持ってほしい。とりあえず、アタシには対策が思いついていないから彼の案の手伝いをすることにする。

「掘ればいいのよね？　どんくらい掘ればいいの？」

「助かるよ。1mくらい掘れればいいかな。」

1m。少なくとも地下にトンネルを掘ろうと言うわけでは無くて安心した。何をする気かは分からない。

直径2m、深さ1m弱の穴ができた。彼とアタシはその穴の中にいる。…だから何なのだろう。

「で、この後はどうする気なのよ？」

「欲しいものは創ればいいって思ってね。キエンは何があればここを突破できる？」

何があれば…か。ここで邪魔になるものは、両側から撃たれる銃弾だ。当たったものを弾き飛ばす魔法が掛けられているために、直接当たらなくても効果が発揮されてしまう。だから代わりに弾に当たってくれる何かがあればいい。

「弾除けみたいなものかな。盾は、それ自体を吹っ飛ばされるから、できればその辺にある岩を利用したいところね。」

「でも、両側をカバーできない。ならば、創ればいい。両側を防ぐことのできるものを。」

ディムはいつもと違い、青い剣を両手で握っている。そして、低姿勢になり、そのまま進む方向に真っ直ぐ向ける。その切っ先は掘

られた後の土壁だ。
「俺の後ろについて来て。行くよ、キエン！」

ディムは勢いをつけて土の壁に剣を突き立てる。すると、剣に触れた土は次々と左右に分かれていく。幅が１ｍほどの空間がそこにはできている。ディムが突き進むと同時に、土は彼に道を譲るように左右に分かれていく。何よりも驚いたのは道を開けた両側の土の変化だ。
「これって、剣？」
ディムが進んだ後には、両側に２ｍを超える大剣が突き刺さっていた。いや、刺さったのではない。地面から生えたのだ。ディムは大剣の柵を創りながら、一直線に進む。障害物として置かれた岩も例外なく剣に変えていった。アタシは彼の後ろについていく。
「アンタってこんな練成ができたのね。」
「俺もルミネに言われるまで知らなかったよ。」
アタシたちはそのまま２本目の赤いラインを超えることに成功した。両脇からの銃弾は、ディムの剣の柵を越えることはできなかったようだ。先に進もうとしたアタシだったが、何故かディムは引き返していく。
「どうしたの？」
「いや、後始末をね。」
彼は通ってきた道の途中で青い剣を突き立てる。そして、道を遮るように巨大な剣が練成された。これで通ってきた剣の道は封鎖されたことになる。
「強度に自信は無いけど、これで時間が稼げるだろう。」
彼はアタシも連れてきたくせに、これが勝負であることを忘れていない。
（…なんか変わったな。今までは誰かに勝つことなんか考えてなかったくせに…。）

「よし、キエン。勝負の再開だ。いっくぜー！」
ダーンッ！
高速移動術“ガンショットアクセル”。アタシが返事をする前に彼は高速で離れていく。
「ま、待ちなさーい！」
アタシも慌てて追いかけた。

～ディム～

足が上手く動かない。正確には膝が動かない。よく分からない力で固定されている。俺が聞いたことも無い魔法だろう。驚くことに、俺の剣も赤色から無色になっている。俺はこれをガンショットアクセルが使えないことと分析している。どうしてもハイドが膝を動かせない状態で駆け抜けるイメージが湧かないのだ。

必死で足を動かして進むと、地面が白から黒に変わる場所へと到着する。境目にはいつも通りの赤い線。そして赤い線の手前には、案の定、ハイドの姿があった。
「やあ、苦戦しているようだね、ハイドくん。」
「…。」

返事が無い。ただの屍のようだ。

「おい、ハイド。本当に大丈夫か？」
「…貴様もやれば分かる。」
動き出したハイドは黒く染められた地面を指さす。そこには黒い地面の上に白い円が点々と反対側まで続いていた。直感的に、黒い場所を踏まずにいけばいいことは分かる。じゃあまずは最初の白い円に向かうとしよう。

まずは右足から…右足が白い円に入る。何も起きない。俺は安心して左足も同じ円に持ってくる。左足が着いた瞬間…

パァンっ！

グンっと後ろに引っ張られる。第1関門で何度も味わった感覚だ。俺は赤いラインより3mほど手前まで移動させられた。

「…こいつは酷いな。」

「貴様は今のので大体のルールの見当がついたのだろう？」

「まあ一応はね。」

膝を縛って、けんけんぱ、か。膝のバネが使えない以上、ほぼ足首の力だけで跳んで行けと言うことか。

「ハイド、ガンショットアクセルは…」

「貴様も真似ているなら知っているだろう。あれは腰から下の力のほとんどを使う。膝が封じられている今は使えん。」

俺だけではなく、本家もダメらしい。

「じゃあ、膝が動くようにするしかないな。どうすれば元に戻る？」

「おそらくは、この魔法を使用している術者が近くにいる。術者を気絶させれば元に戻るだろうが…」

「じゃあそれで。」

「待て。近くと言っても、おそらく術者はコースの外だ。それは無理だろうな。」

確かに見える範囲（街道）には俺たちの他に姿が無い。

「一応聞くけど、黒い地面に触れると撃たれる？」

「俺は撃たれたな。」

じゃあ、やはり白い地面を渡っていくしかないのか。ん？

「あの白い円は踏まなきゃダメなのか？」

「知らん。一度に飛び越えることなど…」

「よし、試してみるか。ハイド、俺を全力で吹っ飛ばしてくれ！」

「正気か？」
「ああ。ちゃんと１０ｍ飛ばしてくれよ？」
足を封じられているが、手は動くはず。ハイドがパワータイプでないことは不安要素だがなんとかなるだろう。
「あ、一応槍をくれないか？」
ハイドから念のため槍を譲ってもらう。

「行くぞ。」
「来い！　…うおっ！」
ハイドに投げられ、宙を舞う。スピードはそれなり。だが、あと少しが届きそうにない。
「せいっ！」
俺は最後の白い円に槍を突き立てる。そして、腕の力だけで体を赤いラインの向こう側へと運ぶ。そして辿り着いた。
「ハイド、やったぞ！」
喜びと共に振り返る。

ビュンっ！

その瞬間にハイドが超高速で俺の隣に飛んできた。勢いを殺せずに、ゴロゴロと転がっていく。
「お、おい。ハイド、どういうことだよ？」
「…俺にはまだ腕があった。そういうことだ。」
俺にもピンときた。この男は、腕で跳んできたのだ。ハイドの代名詞、ガンショットアクセルで。
「そんなことができるなら、もっと早くやればいいのに。」
「先入観の問題だ。さっき貴様を投げた時に思いついた。」

何はともあれ、第２関門も無事に突破だ。俺の目標は３位以内にゴールすることだし、このままハイドと協力していけば達成できそ

うだ。

障害物競争　第３関門“仁王立ち”

～ルミネ～

「いやー、ルミネさん。順当と言えば順当ですが、この２人は別格ですね。」

「見たところ、第１関門は練成系が有利で、第２関門は干渉系が有利といったところでしょうか。強化系は関門以外のスピードで有利ですし、バランスがとれてますわね。２人が突出して見えるのは、対抗馬になりそうな強化系クレスタがレース開始前に脱落しているからでしょう。残っている強化系クレスタに第１関門を突破できる技量があるようには見えません。あと、第１関門にディム以外の練成系クレスタが一人も現れていないことも気になります。おそらくは後方でレース用魔導機械を急ピッチで作っているチームがあるのでしょうね。魔導機械の参戦までこの構図は動かないと見られますわ。」

「ありがとうございます。まさか本当に解説していただけるとは思っていませんでした。」

「あなたはわたくしを何だと思ってここに連れてきたのですか！？」

まったく失礼な後輩だ。

「じゃあそろそろ最後の第３関門の説明をしたいと思います。」

わたくしは地上を見下ろす。しかし、空から見て特に何かあるようには見られない。道の中央に一人立っているだけだ。

「シャウラさん。わたくしには学院生代表が一人で立っているだけにしか見えないのですが…。」

「その通りです。第３関門は“仁王立ち”。街道に立っているのは、学院生に２人しかいない紅蓮の騎士であり学院生最強の男、ユーバ＝スコルピオです。」

ユーバ＝スコルピオ。学院生代表であり、紅蓮の騎士。学院生でありながら紅蓮の騎士に選ばれていることからその実力は保証されているも同然だ。同じく紅蓮騎士であるラゼスとは違い、生粋の戦士である。パワータイプであり、強化時の彼はフェルズ級の結晶獣並の防御力を持っていると言われている。

スコルピオの名で分かることだが、隣に座っているシャウラの兄だ。今回の競技をシャウラが仕切っているのは、ユーバ代表の影響力を彼女が利用しているからに他ならない。

「ユーバ代表が直接相手をするのですか？　さすがにそれは新入生には無理だと思われますが…。」

「ですよねー。もちろん、兄は何もしません。ただそこにいてもらうだけです。攻撃されれば反撃はしますけどね。」

自分から何もしない？　それで先頭の２人が足を止めるとは思えない。

「で、一応仕掛けはあります。でもここはルミネさんにも秘密にしておきます。」

秘密なのか。では直接見て確かめることにするとしよう。

～ディム～

白く塗られたエリアを抜けると、膝は元通り動くようになった。

俺とハイドは再び速度を上げて走る。

「次は…え？」

そろそろ次かと身構えていたが、今までと比べて何も置いていない。街道にある、いや、いるのは一人だけだ。確か、昼食前に挨拶をしていた学院生代表とやらだったか。

「おい。貴様はどう思う？」
ハイドは慎重になっているようだ。前のところで酷い目にあったのが響いているのだろう。
「足を止める理由が無いね。あの人に近寄らずに突っ切る、でいいかな。代表やってるくらいだから実力者だとは思うけど、見たところ俺たちにスピードで勝っているようには見えない。」
代表の体格はクワルよりも大きい。むしろ、ここで殴り合えと言われたら、このレースを諦めざるを得ない。そう思わせる迫力がある。

「結局、俺や貴様には芸があまり無いな。やることはいつも強行突破だ。」
「いいんじゃねえの？　やれることがゼロじゃない。確かな一つがあるんだからさ。」
「…誰の受け売りだ？」
「あ、バレた？」
思えば、俺はラゼスさんのこの言葉がきっかけでウィスタリアに興味を持った。

（「まずは一歩踏み出してみようぜ？」）

今の自分にある一つを持って進んでみる。そうして空っぽだった俺は、変われたんだと思う。あの頃に比べると俺にできることが増えているとは思うが、それも最初の一歩を踏み出した結果だ。

俺としては今はさらに言葉を追加したいと思っている。一人の一つがダメだったときは二人の二つでやればいいじゃないか、って。

「よし。バカの一つ覚えだが、一気に駆け抜けるぞ。」
ハイドは俺よりも先に飛び出していく。代表は腕を組んだまま動

かない。だが、俺の眼には妙なものが映っていた。宙に浮いた水晶体が2つ代表の傍に並んでいる。それぞれ赤色と緑色をしている。大きさから考えて霊石だろう。飛び出したハイドに合わせて2つの霊石がこちらに向かってくる。

「喝(カーッツ)！」

代表が怒声を上げる。ハイドは代表に注意が向いているのか、2つの霊石の接近に気付いていない。

「ハイドっ！」

2つの霊石に接触したハイドは見えない何かに吹き飛ばされ、俺の足元にまで戻ってくる。実に見慣れた光景となってしまった。

「…俺は一体何をされた？　貴様は何か見えたか？」

「何言ってるんだ？　お前に霊石が2つ近づいてきてただろ。なんで避けないんだよ。」

「貴様こそ何を言っている？　霊石が近づいてきていただと？」

「はあ？　今も代表の前に浮いてるだろ？」

「…俺には何も見えん。」

ハイドは本当に見えていないようだ。以前にもこんなことがあった気がする。あれは確か…。

（「あれを見てみろよ。どう見ても服が飛んでるだろ。紫色の服。」）

（「…どこにあんだ？」）

そうだ。ルミネと初めて会ったときだ。俺にはルミネの飛んでいる服だけが見えていたが、一緒にいたクワルには何も見えていなかった。あの時、俺だけに見えていた服はルミネが来ているものだった。あの時と今が同じだとすれば…

2つの霊石の元には、クレスタが一人いるのではないだろうか。

「俺には何も見えてないが、貴様が見たものはあると仮定しよう。その場合、俺と貴様の認識の違いには魔法が関与しているということになる。では代表の魔法か？　俺が知る限り、代表は強化系しか使えないはずだが…。」

「なあ、ハイド。姿を消す魔法ってある？」

俺にだけ霊石が見えている理由は分からないが、ルミネの件も考えると、姿を見えなくする魔法を使っているということが一番しっくりくる。

「…そう考えることが自然か。干渉系魔法で十分可能だな。他にも変身でできるか。つまり、代表以外の何者かがいるわけだな。」

「ああ。そして、なぜか俺にはその場所が分かる。」

「決まりだな。俺が代表に注意を払いつつ先行する。貴様は俺に見えない奴の相手をする。では、行くぞ。」

俺は2つの霊石に気付かないフリをしながらハイドの後に続いた。

～ルミネ～

眼下では、ハイドが吹き飛ばされていた。ユーバ代表が何かしたようには見えない。わたくしは風を操って索敵を行ってみた。すると、ユーバ代表の前に風の流れを遮るものがあった。

「隠蔽魔法（ステルス）ですか…それも光干渉によるものですわね。肉眼で違和感が全くないとは優れた技能をお持ちのようです。」

「あちゃー、バレましたか。ついでに補足しておくと、姿を消している彼は無音の歩行術を会得しています。さて、索敵魔法（サーチ）を持たないハイド選手とディム選手はここを突破できるのでしょうか！」

見たところ、姿を消している男のステルスの技術はわたくしと同等だ。まともなサーチがなければ何が起きているのかも理解できないだろう。

しかし、わたくしは知っている。ディムがわたくしのステルスを見破ったことがあることを…。彼が何をしているのかは知らないが、あの時と同じならば、すぐにでも彼らはここを突破するだろう。

「あーっと！　ディム選手、見えない敵を蹴っ飛ばしたぁ！　…こらっ！　ジェフ！　何やってんの!!」

やはり、ディムにはステルスで隠れた相手（名前はジェフというらしい）が見えている。代表は当初の予定通り手を出さず、ディムとハイドは先へと進んでいった。駅に入っていき、上空からは状況が分からなくなる。

「ところでシャウラさん。これが最後の関門と仰いましたが、少し寂しくはありませんか？」

「…仕方が無かったんですよぅ。5分ではできることが限られていましたから。」

何故5分なのだろうか。その数字で結びつくことは一つしかなかった。

「まさかとは思いますが、この競技が決まったのはつい先ほどとか？」

「てへっ。」

舌をペロッと出す実況の少女。あの5分の真実は準備のための時間稼ぎだった。…無計画すぎる。

「仕方がないじゃないですか。兄は昨日まで遠征だったし、何も用意してないって聞いたのも今朝ですからね。紅蓮騎士とはいっても学院生代表は無理だって何度も言ったのに…。」

この娘も苦労人だったのか。自分勝手な娘だと思っていたけれど、考えを改めよう。

「まあ、楽しいからいいんですけどね♪」

「…わたくしの同情と反省を返しなさい。」

「でも、どうせ紅蓮騎士なら兄よりも黒のクレスタの方が代表に相応しかったと思いますけど…」

「それは無いわ！」

「え？　ルミネさん、どうしました？　私、何か変なこと言いましたか？」

「…失礼いたしましたわ。何でもありません。」

つい声を荒げてしまった。でも、仕方がない。あの黒のクレスタが代表だなどと想像したくも無い。

…家名も背負えぬ者が学院の名を背負えるはずもないのだから。

障害物競争　復路（ｖｓ多脚走行魔導機械）

～クワル～

おいらは中央広場で待っている。周りで情報収集している奴の話を聞くと、ディムとハイドの２人は無事に駅まで辿り着いたようだ。

やはりおいらはあいつらを倒さなくては勝利できない。

「…正直に言うと、おいらはこの勝負の賞品に興味は無いんだけどなぁ。」

「だったら、ここで黙って見てな。」

居住区からガシャガシャという音と共に巨大な甲虫が現れる。大きめのフェルズ級くらいのサイズだが、もちろん結晶獣（クオーツ）じゃない。これは魔導機械（マキア）、多脚型の走行魔導機械だ。聞こえてきた声の主は女性。一応おいらが知っている人間だ。おそらくはこの魔導機械の中にいるのだろう。

「遅い参戦だな、サマリク。もう一位集団は駅に到達してるぜ。今から行くとでも言うのかよ？」

「ふん、ハンデとしては十分だろう。オレの『オーラケイファー３号』で一気に駆け抜けてくれる！　クワル、てめえは黙ってここにいろや。ハス、ラス、出陣だ！」

「仰せのとおりに。」

「わ、わかったよ。」

甲虫は街道に入ったかと思うと、ガシャガシャという音と共に走り始め、次第にその音の周期が速まっていく。車輪の方が速いだろうが、十分な速度があるようだ。

「ぎゃあああ、何じゃありゃあ？」

「な、銃弾が効いていないだと？」
甲虫は先行する他の参加者や上級生の妨害を蹴散らしながら、真っ直ぐに走っていく。携行できるような銃の火力ではあれを落とせることは無いだろう。さらに言えば、干渉魔術でもあれを止めることは至難の業だ。

サマリク＝オーラライト。西の魔導機械の権威であるオーラライト博士の娘だ。親をすでに超え、練成に関しては右に出るものはいないと言われていて、何故この学院に来たのかも分からない。だが、干渉魔術を使えることは無いようで、魔導機械としての仕上げはお付の2人がやっている。
おいらの予想であるが、あのオーラケイファー3号とやらはレースが開始されてから作られたのだろう。恐ろしい才能だ。サマリク一人では大したことはできないが、魔導技師（マキアータ）はチームとして動けて初めて有用なのだ。おいらのいたベルヴェルクのチームにここまでの実力者は今はいない。

ディムたちの対抗馬としては若干力不足だろうが、おいらにとってはどちらが勝とうが関係は無い。ここに戻ってきた方から切符を奪うためだけにここにいる。

「理由は知らねえけど、約束したしな。」
おいらには負けられない理由があるのだ。

～ディム～

さて、状況は今のところ良好。駅に着いたのは俺とハイドの二人だけだ。このリードをキープし続けられればクリアだ。

…そう、ここまでは問題無かったのだ。

「なあ、ハイド。エクストレム行の切符だっけ？」
「そうだ、早く買え。」
俺は財布の中身を確認する。そして、後ろのハイドを涙目で見た。
「足りない…」
「どうした？」
「足りないんだよおおおお！」

不覚。まさか金額が届かないとは思っていなかった。
（「はあ？　アンタ、まさかとは思うけど、穴でも掘って行こうって言うの？」）
あのとき、地味に始めようとしてスコップを買ったのが間違いだった。
「ハッハッハッハ！　全く愚かだよ、貴様は。仕方がないから、今回だけは貸してやろう。」
ハイドは自分の懐に手を入れる。こうなっては仕方がない。一時の恥を忍んで、この勝負に勝つことだけを考えろ！
「…どうしたハイド？　貸してくれるんじゃないのか？」
ハイドは懐に手を入れたまま固まっている。額にはうっすらと汗。
「ディム…」
「ハイド、まさかお前…」

「財布…落としたみたいだ。」

虚しい時間が過ぎていく。俺とハイドは駅の入り口で膝を抱えて座っていた。
「…この駅って恐ろしいほど人がいないな。」
「ああ。誰かに借りようにも、借りるべき人間がいない。」

すでに切符売り場のお姉さんにお願いしてみたが、却下されている。どうやら駅の人もグルだ。金を用意することも課題らしい。だから指定されたコースに居住区があったのだ。

ようやく次の人間が現れた。幸いなことに身内、キエンだ。俺は立ち上がって手を上げる。

「はあ、はあ。やっと追いついたわよ、アンタたち。」

肩で息をするキエン。キエンにとっては長距離のダッシュは苦手のようだ。俺はすぐにキエンに本題を告げることにする。

「キエン、会いたかったよ。俺はお前を待ってたんだ。」

「え、それって…」

キエンの顔が妙に赤い。きっと走った疲れが顔に出てるんだろう。そんなことより、俺はレースに勝たなければいけない。

「金、貸してくれないか？」

「だと思ったわよ、チキショーっ！！」

腹への衝撃（パンチ）。それを感じた俺は体をくの字に曲げて吹っ飛び、駅の中へと転がり込んでいった。入り口が開いていて本当に助かった。いや、無事ではないけれど…。

「貴様はわざとやっているのか？　無自覚だとしたら本当に馬鹿だな。」

ちゃっかり自分の分を借りていたハイドが倒れている俺を見下ろしている。

「お前に言われたくねえよ！　自分だけ先に借りてきやがって。」

「…貴様は正真正銘の馬鹿だよ。」

馬鹿と繰り返した後、ハイドは先に切符を買いに行った。俺が体を起こそうとすると、キエンが手を差し伸べてくれる。

「全く。ハイドもだけどバカばかりね。切符を買わなきゃいけない

のにお金を確認してないなんて。」
「返す言葉も無い。俺は全額じゃなくて少しでいいから貸してくれ。」
俺は顔の前で手を合わせて頼み込む。しかしキエンの顔は険しい。手に財布は持っているのだが、それが開かれる気配は無い。
「頼むよ、キエン。ハイドには貸したんだろ？　だったら俺にも…」
「…いいけど、条件があるの。」
「条件？」
条件とは何だろう？　今、俺とキエンはどちらが勝つかという勝負の真っ最中だ。勝った方が負けた方の言うことを聞く。まさか、俺に負けろということだろうか？
「もうアンタとの勝負はいいから、アタシをゴールまで連れて行きなさい！」
「…ＯＫだぜ！」
正直、キエンとの勝負はどうでも良かったから、これは条件とも言えない。俺は親指を立てて快く了承した。キエンから金を借りて切符を購入する。
「あ、お姉さん。切符にサインもらえます？　…あと、ディムくんへ、とも書いてください。」
切符売り場のお姉さんは困惑しながらも切符に自分と俺の名前を書いてくれる。そうだ、俺だけじゃ意味が無いからハイドを止めなければ…
「またアンタは何やってんのお！」
再びキエンの拳が俺の腹を捉える。駅だけでも二度目の吹っ飛び。俺は大の字になってしばらくピクピクしていたと思う。実際は時間が全然経っていないようだが。俺を見下ろすのはハイドとキエン。キエンはともかくハイドも待ってくれているのは良かった。

「あ、まだ2人ともいたか。…とりあえず俺と同じように切符売り場の人の名前と自分の名前を切符に書いてもらってきてくれ。」
「何でそんなことする必要があるのよ。」
「…なるほどな。貴様は馬鹿だがその悪知恵は認めてやる。」
ハイドには伝わったようだ。ハイドは槍を持って突撃するだけが能じゃない。観察と判断、理解力に優れていると思う。何より、俺と同じ作戦を思いつくあたり、こいつも悪知恵が働くタイプだ。キエンは分かっていないようだが、説明する気力が無い。
「キエン、すまないが説明はしない。ただ、あとでこれが役に立つからそのときは話を合わせてくれ。」
「…分かったわよ。」
キエンは渋々と言った様子で了解してくれた。2人のサインが終われば、後は学院まで行くことだけだ。上級生の障害はおそらく復路では意味をなさない。復路での障害、それは同じ参加者ということだ。

俺たち3人が駅から出てくると、街道を走る巨大な物体が見えた。その大きさはフェルズ級結晶獣並。8つの足を動かしながら走る姿は虫を思わせる。
「何だあれ？　まさか、結晶獣？」
「いや、違うな。あれは魔導機械だろう。思ったよりもデカいのが来たな。」
確かに結晶獣ならば、駅に向かうよりは学院に向かうはずだ。それにしても足の動きが気味悪い。結晶獣かと思った理由はそこにあるのかもしれない。結晶獣ではないのなら心配することは無い。俺たちはただ先に行けばいい。
しかし、俺とハイドが歩き始めてもキエンがその場で固まって動かない。まさか結晶獣恐怖症が再発したのか？
「どうした、キエン？　大丈夫か？」

「あ…、足がいっぱい…。きゃあああああ！」

キエンは悲鳴を上げて逆走し始める。以前の結晶獣恐怖症よりは動けるだけマシになっているが、相変わらず苦手なものがあるらしい。置いていく選択肢もあったが、今の俺はキエンと一緒にゴールすると約束したのだ。目の前の魔導機械をどうにかしなければならない。

「ハイド、あれをどうにかできな…、ってもういない！？　薄情すぎるだろ、あの野郎！」

辺りを見回すが前方の魔導機械と後方のキエンしかいない。つまり、俺は一人でこいつをどうにかするしかない。

俺は剣を構える。迫りくる魔導機械は、今までに相対した相手の中でも2番目の大きさを誇る。一番巨大な相手は七聖ドレイクの召霊であるガシャクロだが、あのときは俺の手に不思議な力を持った剣があった。つまり、俺自身の力でこの大きさの敵と戦うのは初めてなのだ。

（大丈夫だ。相手は結晶獣じゃない。大きさがそのまま強さになるというわけじゃないはずだ。）

俺は自分を落ち着かせる。機械の虫は俺がいることに構うことなく向かってきている。見た限り、その表面はとても固そうだ。だが、その殻を無理に破る必要はない。キエンがまともな状態に戻ればいいのだ。俺でも不気味に見えるあの足の動きがダメなのだろう。ならば…

（あの足を…叩き斬る！）

俺の剣の威力は、紫水晶の試験で分かっている。あれならやれるはずだ。…当たればね。

俺の創る剣は今のところ3種類ある。ただ剣の形をしているだけの無色透明な剣。ハイドの“ガンショットアクセル”を真似できるようになる赤い剣。そして、刀身に触れる非生物を剣に造りかえる

青い剣だ。俺は基本的に赤い剣を使っている。理由は簡単だ。そのときだけ、俺は基本的な強化魔法を使用できるのだ。速さが要求される接近戦で体の感覚が追いつかないことは致命傷である。だから、俺は強化魔法を使えない青い剣を実戦で使用することはない。

対象が生物でない場合、青い剣が一番破壊力があることは分かっているが、当たらなければ意味が無い。高速で動く相手に使える代物ではないのだ。

では赤い剣でいいのではないかと思うが、こちらは攻撃力に不安が残る。キーゼル級の結晶獣に全力の突撃をしただけで剣が折れてしまったし、ハイドでもフェルズ級の結晶獣に当たられるダメージは小さくは無いが大きくも無い。

ある程度の速さと爆発的な攻撃力を兼ね備えていることが望ましいが、今の俺にそんな力は無い。そんな能力を持っているのは、キエンくらいだろう。

そうか、キエンのあの炎ならやれるのか。

俺は二度、キエンの炎を剣として手にしたことがある。あの炎の剣を何かに向けて振るったことは無いが、キエンの魔法を剣にしたものだ。クワルの鎧をも簡単に貫いた炎なら目の前の魔導機械も問題なく斬れるはずだ。

集中しろ。初めてガンショットアクセルを使った時のように。あのとき、俺はハイドをイメージした。だからキエンをイメージすれば、同じようにできるかもしれない。

今の俺は俺でありながらも、キエンでもある。邪魔する壁はその手で打ち砕いてきた彼女自身だ。俺が彼女と同じ力で打ち破れば、それが彼女の自信にもつながるはず。俺の憧れた強い彼女に俺はなるんだ。手には炎。侵略する炎。自分の進む道を創り出す炎だ。

俺の手にあった赤い剣の刀身が炎に変化する。機械虫の足の動き

も目で追えている。あとは、動き回る足にこの剣を振るうのみ。俺は向かって右側の1本目の足の付け根に向かって炎の剣を振り下ろした。

硬いものを斬った感触は全く感じなかった。まるで水を斬るような感覚。炎の剣が通過した後、溶解した切断面を見せながら胴体と足が別れを告げていた。魔導機械は進んでいた慣性のままに俺とすれ違っていく。俺は足と交差するたびに剣を振り、片側の4本を全て斬りおとした。

魔導機械はズズンという音を立てて動かなくなる。良く見れば、魔導機械の後部にハイドが張り付いているのが見えた。俺が斬った側とは反対側の足に攻撃した痕がある。俺より先に動いていただけで、薄情者ではなかったらしい。

「おい！　中にいる奴ら、早く出てこい！　焼け死ぬぞ！」

ハイドが慌てて声を上げている。胴体部分からは3人の人が出てきた。ハイドはそれで全員脱出したことを確認すると、ホッと一息をつく。俺はそこで初めて気づいた。俺の切断した場所から、赤い炎が全体に広がり始めていることに…。

「な、何だよこれ！？　こんな危ないものだったのか？」

斬った相手を焼き尽くすまで止まらない炎。それはまるで体を蝕んでいく毒のようだった。強大な力を持ちながら、苦手なものに対して力を振りかざさない彼女の思いを俺は初めて理解したのかもしれない。本気で立ち向かう時に、自分の力が抑えられなくなることが一番恐ろしい。彼女はそんな状態で戦ってきていたのだろう。

「そうよ。…だからアンタは二度とそれを使わないで。」

魔導機械の停止を確認したキエンが戻ってくる。いつもの調子を取り戻したようだ。今は俺の方がいつも通りじゃない。

「貴様はやはり普通ではない。それはともかく、慣れない魔法はむ

やみに使わないことだな。思いもよらない事態を招くこともあり得るからな。」

ハイドの発言に俺は黙って頷いた。

障害物競争　復路（ｖｓ多脚走行魔導機械）（後書き）

ちなみに、キエンは逆立ちして第２関門を突破しました。

障害物競争　終幕

～ディム～

このレースもいよいよ最後である。俺とハイドとキエンは3人揃って中央広場へと足を踏み入れた。噴水の前には数人の参加者が待っていた。その中には馬鹿でかい鎧の腕を備えた男もいる。

「やっと来たか。待ちくたびれたぜ、ディム。」

今回のクワルはいつもと違う。まず、鎧の腕が両腕になっている。そして、完全にクワルから離れているのだ。クワルは鎧を腕力ではなく、干渉系魔法で操作している。だから不自然ではない。そもそもクワルは何故鎧の腕に触れていなければならなかったのか。

「クロイツ、それは練成か。いつもの霊装とは違って準備時間があったからこその装備だな。」

「今日のおいらは一味違う。本気でかかってこねえと後悔するぜ？」

甲冑の腕が拳を握ってこちらに向けられる。クワルの眼は本気だ。こちらにはキエンがいるにも関わらず臆した気配は無い。ということはキエンの対策も立ててきているだろう。

それに俺たちは人数でも負けている。ここにいるということは腕に覚えがある連中ばかりだろうし、盗みに特化した奴がいるかもしれない。まともな戦闘ならば、逃げる算段をするところだ。

「なあ、クワル。一応聞いておくが、お前たちの狙いは切符だよな？」

「何当たり前のことを言ってやがる？」

そう、これはレースだ。ゴールの条件である切符を持って学院に戻れば勝利。彼らは買ってきた人間から奪うことで勝利しようという連中だ。だから…

その勝利条件に疑念を抱かせてやればどうなるかな？

「そうか、この切符が欲しいのか。でもさ、切符買うときに俺の名前書かれたけど、他の人の名前でもゴールできるの？」

俺は懐から切符を取り出して、自分の名前と駅員の名前が書かれていることを見せつけた。

「なにっ！」

「どういうことだっ！」

掴みは良し。ここからずっと俺のターンだ。お前たちのモチベーションを下げてやる。

「人の切符を奪ってはいけない、などというルールは設けられていないし、切符を持ってゴールしろとも言っていた。でもな、お前らは忘れている。競技の説明で『切符を買って』と明言されていることをな。」

待ち伏せしていた連中の目が丸くなっている。実は俺も待ち伏せという手段は考えていたが、どうしても競技説明でさらっと言っていた『切符を買って』発言が気になってしまった。実際はどう適用されるかは企画者だけが知っている。自由度が高すぎるルール自体が思考を誘導しようとする罠である可能性を否定できない以上、それで勝てると言う確信など持てるはずがない。最終的には俺も分からないことだけど、クワルらにも確信があることはない。

「つまり、切符に書かれた署名が、その証明だというわけか…。」

「まあ、そういうことだね。皆待ちくたびれただろうけど、待った分だけ時間をロスしただけさ。今回は行動しなかったことが失敗だったわけだ。」

俺たち3人は待ち伏せ組の傍らをゆっくりと歩いていく。妨害が入る気配は無い。彼らにとっては目の前にあった勝利が急に無くな

ったように感じていることだろう。

…彼らの後方まで歩いたところで俺はキエンの手を取った。

「え、ディム？　どうし…」

「待った、ディム。」

クワルに声をかけられて俺は足を止める。振り返ることはしない。やはりこの男は体育会系の外見とは違ってしっかり考えている。おそらく俺の思惑もバレている。

「確かにおいらたちが勝てるかは分からなくなった。だが待ち伏せして切符を奪っちゃいけないというわけじゃねえよな？　おまえらの切符を全部奪った上で駅に行けばいいことになるんじゃね？」

正解だ。俺がクワルの立場ならそれをやるだろう。実は金さえあれば予備の切符という作戦まであったが、さすがに金欠の俺では無理だというもの。サインの件（くだり）で混乱させて乗り切るつもりだったが、潮時だ。彼らの後方というこの位置まで来ればもう条件はクリアだし、とっととずらかろう。

「逃げるよ。しっかり掴まってて。」

「ちょ…きゃあああ！」

俺とハイドは銃声をその場に残して一気に走り出した。キエンは鯉のぼりのようにパタパタとゆれている。

「ディム、てめえ！　待ちやがれ！」

クワルの怒声が後ろから聞こえてくるが、俺たちに速さで勝てるはずがない。この勝負はもらった。俺たち3人の勝利だ。正門は開かれている。俺たちはそこに転がり込んだ。

「結局、3人とも“騎士団演習の参加権”に落ち着いたな。」

障害物競走が終わり、俺、ハイド、キエン、それにクワルの4人で帰路についている。競争の結果は、1位ハイド、2位俺、3位キ

エンで終わった。クワルは3位までが確定した時点で辞退している。他の参加者でゴールしたのは3人だけだったという寂しい結果となった。

俺は当初の目的通り、騎士団演習の参加権を獲得した。半年以上先の話であるが、まだ知らないことが多い俺には時間は多い方が都合がいい。ハイドとキエンもあの3つの中では一択しかないも同然だっただろう。

「まさかおまえら3人が組んでたとはな。してやられたぜ。一人一人ならおいらでも勝てるはずなのによ。」

頭をかきながらのクワルの発言、負け惜しみであるが、かなり悔しそうだ。本気で勝ちに来ていたらしい。それに俺は気になっていることがある。

「なあ、クワル。どうしてお前は中央広場で待ち伏せなんかしたんだ?」

開始前にクワルは学院長のご褒美が目当てだと言っていた。でも、俺の知るクワルはそんなことで本気になったりしない。例え不利でも障害物競争という競技自体を楽しむ奴のはずだ。そのときのクワルの行動は、効率とかは一切考慮しない。だからこそ予測不可能なはずだった。今回のクワルはどこかが違っている。俺のしょうもない策に嵌まることがおかしい。

「…それが確実だと思ったからだよ。少し浅はかだった。」

クワルはどこか沈んだ声で答えると、俺たちから離れていく。

「どうした?」

「わりい。用事を思い出したから、先に帰っててくれ。」

クワルは学院へと引き返していく。何かがおかしいことは分かるのだが、クワルは俺たちを避けている気がする。ここで俺が何を言っても拒絶されると思った。

「さて、そろそろ共同戦線は終わりにしようか。」

「ハイド…」

「俺は元々貴様と慣れあうつもりはない。俺の今年の目標は、貴様を完膚なきまでに叩き潰すことだ。でなければ俺は成りたいものになれない、そんな気がしている。」

ハイドも俺たちから離れていく。元々こいつとの距離はこんなものだ。今回は逃げたことをダシにして無理やり仲間に加えただけ…。そのはずだ。

「そうか。じゃあ俺の目標の一つに加えておくよ。少なくとも今年の内は、お前には負けないってな。」

「…ふん。せいぜい精進することだ。いずれ借りは返させてもらうがな。」

借りって何のことだ？　俺が首を傾げていると、ハイドは離れていく足を止めて振り返る。その顔はいつになくシリアスだ。

「あと、警告だ。良く理解もせずに力を振りかざすな。今回は特に被害は無かったが、何かが違えば大惨事になっていた。貴様がまたそれを繰り返すことになれば、その時は俺が貴様を討つ。覚えておけ。」

今回。それはあの炎の剣のことだろう。熱という毒を帯びた炎。誰が名づけたかは知らないが、滅びの火の名を持っているだけのことはある。俺はキエンの心が生みだした魔法を意味も分からずに模倣した。危険性を考慮していなかった。あまりにも短絡的だった。

“氷結の雨事件”の後、俺は師範の元で思い知った。知らないことは無力であると。考えないことは後悔の要因になり得ると。

師範は俺に言った。「良く知り、良く考え、そして行動するのだ」と。そこに俺の求める願いがあるのだと。

ハイドになりたいものがあるように、俺にもなりたい自分がある。でも…まだ遠いな。

「覚えておくよ、じゃあな。どうせ部屋で会うけ、ど！？」

ハイドに手を振って別れを告げていると、俺の襟が上に引っ張ら

れた。地に足がついていない。俺は持ち上げられている。
「ディム!?」
キエンが俺に手を伸ばすが、俺は急速に2人から離されていく。
地面を走っている振動が伝わってくるが、何故か足音がしない。俺を掴んでいるものが何かを確認すると、それは大きな黒い犬だった。
フェイナの連れている犬、ソウルだ。
「あ、キエン。俺も用事ができたみたい。じゃあな!」
「ちょっと、何よそいつ! どういうこと!?」
俺はソウルの口にぶら下がったまま、素直に拉致されていった。

~キエン~

ディムが犬の化け物に攫われていった。追いかけていきたいが、速すぎてアタシの足では追いつけそうにない。仕方がないので、近くにいる俊足の人にお願いしてみる。
「ハイド、アタシを背負ってあれを追いなさい!」
「何故俺が?」
「さっきお金を貸してあげた利子と思え!」
「それを言われるときつい。だが、無理だな。いくら俺でもアイエンを背負って追えるものではない。」
嘘は言ってないように見える。本当に無理らしい。
「じゃあ、アンタだけでも追って。」
「少し遅かったな。もうすでに場所が分からん。音も聞こえないから探しようがない。」
ハイドと交渉している間に、もう犬はどこかに行ってしまった。
ハイドの言うとおり、もう追う手段が無い。

「ディムの心配ならいらないだろう。アイエンは知らないだろうが、あの犬は危険なものじゃない。昨日もディムが背中に乗っていたし

な。」

そうか。あれは誰かの召霊なのか。それもディムの知り合いで敵じゃない人の。ならばここで無理に追う必要は…って、昨日？　昨日と言えば思い当たることは一つ。

（「会いに行ったのはフェイナくらいだ。」）

アタシの手に力がこもる。

「ア、アイエン！？　どうしたんだ、変身なんて使って…。」

「別に…時間を取らせて悪かったわ。」

冷や汗を流すハイドを置いて、アタシは何となく歩き出す。分かっていたはずだ。昔からアタシはディムの視界に入ってないって。

（でも、いつかアタシを見てもらう。）

そのためにアタシはまず知ろう。ディムのこと。そして、フェイナっていう子のことを。

当てはないけれど、居場所を調べてみよう。話はそれからだ。

約束と主従

～ディム～

「で、どういうことなんだ？　ソウルを使って俺を拉致するとは…」
俺が連れてこられた場所はいつもの森。もちろん待っていた人物は、最早ここの主といってもいいフェイナだ。
「拉致なんて頼んでません！　私はソウルに案内を頼んだだけです！　そうですよね、ソウル。」
俺とフェイナの視線が黒い犬に向けられる。黒い犬は楽しそうな笑みを浮かべていた。
「すまない、主。あれは案内を頼んでいたようには聞こえなかったのでな。『早く会いたいから、なるべく急いで連れてきてください』だったか。」
「早く会いたいからなんて、そんなこと言ってません！」
フェイナは顔を赤くして犬に食ってかかる。

ソウルはただ命令をこなしただけだな。意図は置いておいて。
「まあ、そんなことはどうでもいいか。で、急ぎの用ってのがあるの？」
とりあえず話を本題に戻しておこう。下手すると、本題に入ることを忘れて帰ることになりかねないしな。フェイナはソウルと話すのを止めて俺に向き直る。
「いえ、本当に急いでたわけじゃないんです。ただ、大丈夫かなって心配になって…。」
フェイナは俺を心配していたのか。立場的には先輩だからそれでいいのかもしれないが、俺としてはその逆でありたい。
「ドレイクさん…でしたっけ？　まだ捕まっていないのですよね。」

ドレイク。今指名手配されている元七聖。蒼星結晶という特殊な霊石を狙う男。蒼星結晶に関わりのある俺やフェイナを狙っていることは十分考えられる。

フェイナも俺と同じように分かっていた。まだ“氷結の雨事件”は終わっていない。ドレイクも蒼星結晶も行方知れずなのだ。

でもフェイナが心配することは無い。俺がなんとかするから…。

「そうだね。でも、大丈夫さ。あの時と違って、学院の方も俺たちのことを分かっているから。きっと護ってくれるよ。」

「…そうですよね。学院の皆さんもいますよね。だから、約束してもらえますか？　一人だけで立ち向かわないって…」

「もちろんさ。俺一人なんかの力じゃ弱すぎる。」

だから、俺は強くならないとな。

「とりあえず、暗い話はこれで止めよう？　それともまだ何かある？」

「いえ、特には無いですよ。では、本題に入ります！」

あれ？　さっきまでのは本題じゃないの？

「ディムを連れて行きたい場所があるんですよ。」

「へえ。どこに連れて行ってくれるの？」

ここ以外でフェイナが行きたい場所というのは非常に興味が湧いた。こういう話ならいくらでも歓迎だ。

「まだナイショです♪　それに今すぐというわけじゃないんです。」

内緒…か。何故かその一言で不安になったが、今すぐじゃないことのほうが気になる。

「そうですね…明日の講義が終わったら東棟の入り口まで来てくれますか？」

「分かったよ。その時には教えてくれるんだろうな？」

「モチロンです！　絶対に来てくださいな。待ってますからね？」

フェイナと翌日に会う約束を交わした俺は街の方へと帰り始めた。まだ、夕暮れだ。ソウルに送ってもらう必要もない。この時間の農業区は静かである。聞こえてくるのは虫や鳥の声だけ。考え事をするにはうってつけだ。

まだ学院生活が始まったともいえない今日一日で、結構な変化があったように思う。俺たちと行動しないクワル、俺に協力的なハイド、暴力的なキエン…。皆、“氷結の雨事件”で思うところがあったのだろうか。俺のように…。

そういえば、今朝には一番大きな変化があったな。新入生歓迎会のゴタゴタですっかり忘れていた。

（「ワタクシはティフェレンと申します。本日より、ディム様の専属のメイドとして仕えさせていただきます。」）

あれは何者なのだろう。学院長の秘書の話では害意は無いということだった。秘書の話しぶりでは俺の護衛のようだ。確かにハイドをも投げ飛ばす技量の持ち主だ。俺よりも明らかに強い。俺に護衛をつける理由も分かっているつもりだ。だからこそ疑問なのだ。

何故、俺だけなんだ？

フェイナのところに行って確信した。フェイナには誰もついていない。ということは学院側には狙われるのは俺であると断定している情報が何かあるんじゃないだろうか。

これ以上は考えても埒が明かない。知っている人間から聞くしかないのだ。

夕暮れの帰り道、俺一人だけと思っていた道に人影が一つあった。
メイド服の女性だった。別に口に出してはいなかったが、噂をすれば影がさす、というやつだろうか。

「ようやく見つけました、ディム様。ご無事で何よりです。」
俺が近づくと会釈をするティフェレン。今朝唐突に現れた自称メイド。
「レン、か。丁度良かった。お前に訊きたいことがある。」
「何なりとお聞きください。」
「お前に命令している主人は誰だ?」
これを答えるはずがない。はぐらかして当たり前のはずだ。それこそが黒幕の存在を匂わせてくれる。まずはその足がかりを得る!

「これはおかしなことを。ワタクシの主人は、ディム様ただ一人でございます。」

…まあそう言うよな。質問の切り口を変えよう。
「質問を変えよう。誰の指示で俺のメイド…いや、この場合は護衛と言った方がいいか。誰の指示で俺の護衛をすることになったんだ?」

「勿論、ワタクシ自身の意思です。ディム様以外の人間の命令などワタクシは聞きません。」

頑な過ぎる。俺としてもそれは嘘だという材料が無い。
「なあ、なんで俺がお前の主人なんだ?」
「ワタクシがそう誓ったからです。」
「でも、俺は護衛を頼んでないけど?」
「本当の従者というものは、主の命令が無くとも主のために動くものでございます。止めよと仰るのならば、すぐにでも止めますがい

かがいたしますか？」

この人、頭は大丈夫だろうか？　それはさて置き、気になることは多いけど、実は迷惑でもないんだよな。でも、本気で俺の従者であるというなら、言っておかないといけないことがある。

「レン、何故俺がお前の主人なのかという理由はもういいや。ただ、俺の従者なら言っておきたいんだ。お前には俺を護るだけじゃなく、俺の仲間たちも護って欲しい。誰一人例外無くな。できるか？」

「もちろんでございます。このティフェレン、ディム様の願いのために動きましょう。ワタクシの主はディム様ただ一人ですので。」

言うことは言った、よな。今、ティフェレンから聞き出せることは無いだろう。やはり、一度学院長に直接会わないといけないな。

「そういえばレン。どうして俺が農業区にいるって分かったんだ？」

「先にお帰りになられたハイド様にお聞きいたしました。」

ハイド、また投げられてたりしてないだろうか…。

クワルと少女

～ディム～

今日から講義が始まる。今朝は昨日とは打って変わって静かな朝だった。答えは割と単純で、俺が起きた時にはクワルもハイドもいなかったからだ。ティフェレンが言うには2人とも既に学院に行ったとのことだった。確かに俺が逆の立場だったら、面倒に巻き込まれる前に退散するかもしれない。…ただ、寂しい静かさだなと思っていた。

結局昨日はクワルと話していない。というのも、俺が帰った時点で既に寝入っていたのだ。ハイドと2人でおかしいなと言っていたが、今は様子を見るしかないと結論付けた。

俺は騎士団候補生用の制服に袖を通す。白を基調としたピシッとした印象を与える服だ。多少窮屈であるし、鏡に映る自分に違和感も感じた。俺はいつも黒い服ばかり着ていたから、真逆の色だと落ち着かない。そのうち慣れるだろう、と俺は寮から出て行った。

「ディムー！」

一人とぼとぼと歩いていると、後ろから声を掛けられる。

「キエン…か。おはよう。」

「どうしたのよ？　元気無さそうじゃない。」

「ちょっと色々あってね…」

ティフェレンのこと。クワルのこと。分からないことだらけだから、少しでもそれらのことを考えるととても疲れる。はぁ、とつい溜息を漏らす。

「…もしかして昨日、あの後何かあったの？」

キエンが下を向く俺の顔を覗き込んで訊いてくる。昨日あの後？昨日キエンと別れた時は…ソウルに拉致られたときか。まあ、心

配してもおかしくはないか。
「いや、特に問題は無かったよ。あの犬は知り合いだしさ。」
「それならいいわ。…ねえ。　ディムとフェイナ…さんって、2人で何してるの？　一昨日も昨日も会ってるでしょ？」
「何って…ただ喋ってるだけだよ。」
　キエンは何を気にしてるのだろう？　俺は疾しいことは何もしていないはずだ。
「…ん？　昨日フェイナに会ったって何故知ってるんだ？」
「勘よ。」
　勘なのか。当たる勘って恐いよな。どうして当たるのだろうか。
「今度アタシも一緒に連れて行ってくれない？　フェイナさんと話してみたいわ。」
「本当か！？　分かった！　じゃあ今日…は無理か。次の機会に連れて行くよ！」
「なんでアンタ嬉しそうなのよ…」
　キエンがフェイナに興味を持ってくれている。フェイナは相変わらず俺とルミネ以外に心を許していないから、これをきっかけにしてもっと色んな人と関われたらいいなと思う。俺はそれが自分のことのように嬉しい。

「で、元気出たところで悪いけど、アンタ何か悩み事あるでしょ？　アタシに話しなさい。」
「え？　強制？　まあ、言うけどさ。」
　俺はキエンにクワルのことを相談した。ティフェレンの件は“氷結の雨事件”やドレイクのことが関わってくるから伏せておいた。
「そういえばクワルとアンタは受験の時いつも一緒だったもんね。それが入学してから避けられている気がする…と。」
「どう思う、キエン？」
「アタシが思うに、アンタの勘違い、気にし過ぎね。」
　そうか、俺が気にし過ぎているだけか。

「あ、噂をすれば本人よ。誰かと一緒みたいね。」
俺とキエンが学院の正門をくぐると、クワルがいた。少し距離があるため、クワルはこちらに気付いていない。声は聞き取れないが誰かと喋っているようだ。クワルが喋っている相手に注目してみる。小柄で緑色の長い髪をした女の子だ。

ハイドの声がフラッシュバックする。
（「貴様の嘘も真になりかねん。」）

何となく納得した。クワルには大きな変化があったんだな。別に俺を避けてたんじゃなくて、あの子のところに行こうとしてたんだな。
「ねえ、ディム。あの子誰？」
「俺も良く知らない。クワルに直接訊けばいいさ。…キエンの言うとおり、俺の勘違いだったんだな。昨日も障害物競走の後にあの子のところに行ってたんだろ。」
俺たちはそのままクワルたちのところまで歩いていく。すると、こちらに気付いた女の子が逃げるように立ち去ってしまった。

「…すまん、クワル。邪魔したみたいだな…。」
「おう、ディムか。別に邪魔じゃねえさ。ちょうど用事も済んだところだったしな。」
クワルの表情からは、怒りなどの感情は読み取れない。本当に何でもないようだ。
「用事って？」
「彼女がおいらに頼みごとをしてきただけさ。詳しい内容までは聞くなよ？」
「俺もそこまで野暮じゃないよ。とりあえずいつも通りで安心した。」

クワルに頼みごとということは魔導機械関係だろう。詳しく聞く必要はない。多分聞いても分からないだろうし。

「安心…だと？　おまえ、おいらの心配でもしてたのか？　おいおい。おいらが競技で負けたぐらいで凹むわけないだろ？　それにおいらのことよりも自分の心配をしたほうがいいぜ。今日最初の講義が難問そうだからな。」

「もう情報が回ってるのか。で、どんな内容なんだ？」

「おいらも詳しくは知らね。とりあえず行こうぜ？　もうすぐ始まるしよ。」

ノイン先生の“魔導機械工学？”

～ディム～

俺たちにとっての最初の講義が始まる。科目名は『魔導機械工学1』。明らかに魔導技師（マキアータ）用の科目名であるが、全学院生の必修科目である。元々俺には受けないという選択肢は無いから関係は無いけどな。それというのも、俺の指針が「知らないことは無力である」という師範の教えに基づいているからである。

俺はキエンとクワルに挟まれる形で座っている。左に座るキエンは、あまり興味が無さそうにしている。それも無理はないだろう。刀などの武器ですら「手で殴った方が速い」と言ってあまり使いたがらないのだ。自分で管理もできない魔導機械の話など、キエンが興味を示すとは思えない。一方、右に座るクワルはメガネまでかけての本気モードだ。さすがは魔導技師志望だ。でも、俺は今までクワルがメガネをかけている姿を見たことが無い。

「なあ、クワル。なんでメガネかけてるんだ？　目、悪かったっけ？」

「いや、こいつは伊達だ。真面目そうに見えるだろ？」

ポーズだった。

バァンっ！

いきなり扉が開け放たれ、一人の女性が入ってくる。服装はここではないどこかで見たような格好だ。どこだっただろうか。

「はい、静かに！　早速始めるぞ！」

この人が先生のようだ。魔導機械工学の担当というイメージとは違う強い口調。講義室内は徐々に静かになっていくが、まだちらほらと話している声が聞こえる。

ダァンっ！

講義室に銃声が響き渡る。別に俺やハイドが魔法を使ったわけではない。音の発生源は教壇に立つ女性の手にあった。銃。魔導機械技術で作られた武器だ。

「聞こえなかったか？　あたしは静かにしろと言ったんだ。次に命令に従えないものがいた場合は、命令違反で射殺する。」

講義室内に物音が一切しなくなった。おそらく自分の鼓動が一番良く聞こえるだろう。気怠そうにしていたキエンですら、姿勢を正して座っている。この先生は魔導機械工学の先生じゃなくて、どこかの軍隊の教官とかじゃないだろうか？

「よし、いい子たちだ。ではまず、あたしの自己紹介をしておこう。あたしの名前はノイン＝ベイオネットだ。ここでお前たちの指導をすることになったが、今も尚ゴルノイア軍の軍人でもある。」

そのまんま軍人だった。どこかで見た服装だというのも当たり前だ。セイレンで見た軍人と同じ格好だ。周囲が多少ざわついていた。

クワルも驚いている。

「何で驚いているんだ？　あの人有名なの？」

「“帝国の女王蜂（クイーン・ビー）”って呼ばれてる人だ。2、3年前にエクストレムに駐留していた紺碧の騎士団を壊滅させた部隊の隊長だ。」

それって犯罪者じゃないのか？　それとも俺が知らない何かがあるだけか？

「そろそろ黙るように。」

再び静まり返る。なぜかノイン先生は帽子を深く被って顔を隠していた。思ったよりも知名度があって恥ずかしかったりしたのだろうか。

「この講義では、携帯できる魔導機械、特に銃について学んでもら

う。内容も理論的なものよりは実践的なものだ。本格的な魔導機械については、魔導機械工学2の方で行うから心配するな。」

銃か。俺にとってはフェルズ級に通用しない中途半端な武器という印象しかない。それこそ対結晶獣（クオーツ）よりは対人間の武器と言った方がいいかもしれない。

「さて、諸君らには愚問かもしれないが、『魔導機械とは何か』を説明できるものはいるか？」

はい、といくつか手が挙がる。もちろんその中に俺はいない。俺の身近な人間では右隣に座るクワルが挙げている。ノイン先生はクワルではなく、前の方の女子を指名した。

「練成物質に魔法を記憶させて、魔法に関係のない第三者がその魔法を使用できるものです。魔法の記憶とは、魔法を発動する上での“想像”のプロセスを物質に組み込むことです。現段階で記憶させられる魔法は干渉系のみ。覚えさせた魔法はいつでも使用できますが、練成物質が壊れることで、記憶も失われます。さらに、人の脳と違って新しく“想像”を構築はできませんので、記憶するためには人の脳よりもはるかに大きな体積が必要になります。」

うん、やっぱり俺の知らないことも入ってる。にわか知識で発言しなくてよかった。干渉系魔法しか記憶できないのか。

「…十分だ。要するに、利点は魔法を使えない人間が魔法を使えるということ。欠点は直接霊石を使用した魔法には遠く及ばないことだ。こんな欠点を抱えていようと魔導機械というものは普及した。人間誰もが全ての魔法を使えるわけではないからな。あれば使いたい人間など山ほどいるというわけだ。」

確かに俺自身もその恩恵を受けてきた。聖域と霊石があれば人々は生きていける。それは魔導機械あっての話なのだ。

「日常に溢れている魔導機械に関しては、何故できたのか疑問に思う人間はいないだろうと思う。ではここで質問だ。今、あたしが手

にしている銃。これはどうして生まれた？」
　何故銃というものが生まれたのか。俺は確かに疑問に思っていた。フェルズ級の体に弾かれるだけの威力しかない。その理由は体積の不足にあるのだということはさっきの説明でなんとなく理解した。しかし、キーゼル級ですら数人がかりで銃弾を撃ち込む必要があるのではないだろうか？

　俺が考えている間に学院生の誰かが答えている。
「魔法を使えない人間が結晶獣と戦うためです。」
「座れ。…おそらくお前たちの多くがそう思っただろう。だが、それだけでは不正解だ。魔導機械技術は聖域が張られてから生まれたものだ。騎士団以外の人間が結晶獣と戦うことは想定していない。それに携行できる程度の銃に結晶獣を倒す力はあまり無い。せいぜいコルン級くらいしか有効打にはならないだろう。キーゼル級を倒すことは不可能ではないが、何発撃つ必要があると思う？　結晶獣には明確な急所が存在しない。結晶獣を倒すと言うことはその体を完全に破壊するということだ。」
　ノイン先生の話を聞く限り、携行できる銃は結晶獣との戦いに向いていないということになる。そういえば、列車に乗っていた兵士が使っていた銃は、列車に備え付けになっている多少大きなものだ。あれはフェルズ級には効かなかったが、キーゼル級を倒すことを想定しての装備なのか。

「では、そろそろ…おっと、そこの青色の髪の奴。分かったか？」
　ハイドが起立する。ハイドが答えると言うことは、騎士団が知っているような知識だと言うことか。
「ハイド＝ロベインです。つまりは、携行できる銃…拳銃は、人を撃つための物というわけですね。」
　ハイドは俺が持っていたイメージをそのまま口にした。

「正解だ。世界にはまだ結晶獣という人類共通の敵がいるというのに、人間同士での争いは無くならないということだ。詳しくは歴史の講義で聞くように。」

俺は辺境ともいえるフェアガルテの東端、セイレンから出ることなく過ごしてきた。それも7年ほどは黙々と剣を振っていただけ。俺が知らないところで世界には何かがあったのか。

「何故、このような話をあたしの講義でするのか。それはお前たちならば分かるはずだ。分からない奴は先月にここウィスタリアで何が起きたのかを考えろ。そう、“氷結の雨事件”だ。当時はマイン級結晶獣が出現したなどというデマが出回っていたが、その情報源は紺碧騎士に扮した人間であった。何者であるかは現在尋問中だが、その行動は我々に敵意あってのものだと思われる。いいか、我々を襲うものは結晶獣だけとは限らないのだ。聖域の中でも何に狙われるか分かったものではない。いざというときに抵抗する手段を持て。」

それで銃を持てという話になるらしい。ハイドやキエンくらいの技量があれば、いらない代物であるが全員がそうだと言うわけでもない。それにもしハイドやキエンを相手にしても、銃は有効だということは昨日の障害物競走で上級生が示してくれた。

「今日はとりあえず銃に触れてもらうことにする。今から全員移動だ。」

早速実践らしい。有言実行にしても早すぎる先生だ。

移動してきた場所は、一言でいうと射撃場だ。部屋の奥の方には的が用意されていて、柵の手前から撃つようになっている。

「よし、ハイドだったか？　お前がまず撃ってみろ。」

「はい。」
ハイドは柵の前まで移動して、先生から銃を受け取り的へ向けて構える。そしてすぐに発砲。普段とは違い足からではなく、手から銃声が鳴り響く。銃弾は的の中心を射抜いていた。
「ほう、手慣れているな。」
「アトモスの出身ですので、これくらいはやっていますよ。それよりも、これはかなり旧式の銃ですね。火を使った爆発のエネルギーで発射するタイプだと、無駄に銃声が大きくて反動が大きいと思うのですが…。」
「ああ、半分はあたしの趣味だ。今日は全員これでやってもらう。初めて撃つ人間には知っておいてもらいたいのだ。…銃を撃つ重さをな。」

以降、全員に同じものが配られ、順番に撃っていくことになった。
「おいおい、ディム。中心とは言わないからせめて的には当てろよ。」
「うるさい、クワル。俺に集中させろ。…これで！」
銃声と反動と共に俺の手から銃弾が放たれた。今度こそ俺の弾は的に当たった。

…隣の的に。

「さすが、ディム。今度は的に当たったな。おいらにはとても真似できねえや。」
「くそ！　何も言い返せない。」
などとやっていたら、俺たちの後ろにノイン先生が立っていた。
この人に今のを見られていたのか。気まずさで俺の頬に一筋の汗が流れる。
「お前がディムか。こいつは酷いねえ。よし、お前だけの特別指導をしてやろう。ついてこい！」

笑顔で酷いと言われるとは。って特別指導!?
「い、いや、遠慮しておきま…」
「……」
「是非ともお願いします!」
無言で銃を取り出す先生。命令違反は銃殺とでも言いたげだった。クワルは小声で「骨は拾ってやる」とか言っている。他人事だと思いやがって。
「…各自、残り時間はとりあえず銃に触れておけ! 終わったら全ての銃は…そうだな、ハイドが回収してあたしのところまで持ってくるように!」
俺以外は自習ってことね。なんで俺だけ…。

連れてこられたのはすぐ隣の同じような射撃場だった。違うのは的。どこかでみたような水晶体。紫色だったら入学試験を思い出すことだろう。
「先生、これは一体…」
「へー、お前があのドレイクを倒したディムか。さっきのハイドって奴の方が強そうだけどねえ。」
俺をじろじろと観察する先生。先月の事件はやはり有名な出来事なのだろうか。でも、今の俺に七聖を倒した力はない。期待されても無理だと言うものだ。
「早速だけど、お前には銃を教える気はない。代わりに覚えて欲しいことがある。」
そういって俺に渡してきたものはナイフだった。
「どういうことですか? まさか銃の代わりにナイフ投げでも覚えろと?」
「そのまさかだ。一応そのナイフは練成で造られたものだ。それを使って、ここからあの水晶を割って見せろ。今からその手本を見せ

てやろう。」

ナイフを右手に持ち、柵の前に立つノイン先生。腰につけている霊石が赤く光っているため、強化を施していることは分かる。俺はじっくりとその動作を観察していた。集中して見ていたため、次第に目が乾いてくる。１回強く瞬きをした直後、ノイン先生の手にナイフが無かった。

「と、まあこんな感じだ。悪いがあたしでも割れなかった。」

あっはっは、と大げさに笑う先生。柵より１０m先の水晶を見ると、中心にナイフが突き立っていた。良く見えなかったが、俺の瞬きの間に投げたとしたら、かなりの早業だ。それだけの技量があっても割ることなんかできていない。俺は本当にこれを覚える必要があるのか？　１０m位なら近づいて斬った方が早いと思う。

「あの…本当に俺はこれを覚えなきゃダメなんですか？　習得しても意味がない気がするのですが…。それに俺は人を相手に攻撃なんてしたくありません。銃もこれもやりたくはないんです。」

叱られるかもしれないが、俺は口答えしてみた。この先生は、拳銃は人殺しのために生まれたと言った。何故、俺が人を殺すための武器を持たなければならない？　それで的に当てられるから何だと言うのだ？

先生が俺の頭に手を伸ばす。俺は叩かれると思って目を瞑った。しかし、次に来ると思われていた衝撃は無く、軽くポンポンと撫でられただけだった。

「…ディム、あたしも好き好んで人を撃ってやしないさ。本当なら人は言葉で物事を解決できる。あたしも言葉で解決することを優先したいと思っているさ。でも言葉が通じないこともある。聞く耳持たずに襲ってくる人間と、人を殺す本能のある結晶獣、両者の違いは何だ？　お前も見ただろう？　思い通りにいかないことに対して暴力で解決しようとする人間の姿を。」

（「俺の返答は変わらない。お前には渡さない！」）
（「交渉は決裂だ。ならば後は…力づくで奪うのみだ！」）
俺はドレイクの提案を拒絶した。その後に戦った。あのときの俺はそれが普通だと思っていた。ガシャクロという化け物を出されて戦わなきゃと思った。もう互いに交わせる言葉は無かったのだろうか。

俺は、ドレイクを“人”と思っていただろうか？

「好む好まざるに関わらず、戦いの時というものは唐突に訪れる。だが、結晶獣と戦う術しか持たない人間が人間と戦うとどうなると思う？」

ノイン先生の真剣な眼差しが俺を見つめる。俺はクワルが言っていたことを思い出す。

（「紅蓮の騎士団は対結晶獣戦闘の専門家だ。その理由は単純だ。圧倒的な火力で結晶獣を打ち倒すからだ。周囲の環境や人命など考慮しない。問題は全て破壊することで解決する。」）

俺がこのまま結晶獣と戦う技術だけを身に着けると、いずれはそうなるのだろうか。

「銃は人と戦うための武器だ。だが、それが直接人を殺す武器だと断言できるとは限らない。破壊力が過剰な戦闘用魔法を行使することができる世の中だ。むしろ銃は人の命を奪わずに無力化するための武器にもなる。そういう弾丸も開発されているしな。」

そうなのだろうか。俺が頑なに銃を持たないことで、俺はいつか対峙した人間を殺めるときがくるのだろうか。先のことは分からない。でも、俺の頭に人間と戦う可能性が無かったことも事実だ。い

つのまにかドレイクのことも人間として扱っていなかった気がする。俺は人間も結晶獣も等しく敵とするかもしれない自分自身を想像して不安になった。

「…ここまではあたしがお前たちに銃を教える理由の一部分だ。そして、お前にナイフ投げを教える理由も教えてやろう。……ぶっちゃけ趣味だ。」

ズルっとこけてしまった。ここまで真面目に話してきておいて、そこに理由は無いのかよ。

「趣味…ですか？」

「ああ。昔、お前みたいな剣しか能がないという奴がいてな。で、そいつに聞いたんだよ。『近寄れない奴とはどうやって戦う気だい』とね。そしたらそいつ『じゃあ投げればいい』の一言だぜ？　もう本当にこだわる奴はこだわるんだなと思ったよ。驚いたことにその後すぐに、それで戦えることまで示されてさ。確かあん時は、エクストレムの城門を護る紺碧騎士との戦闘だな。連中の妨害が激しくて近寄ることも儘ならなかった。あまりに攻めあぐねて、対フェルズ級の大砲で城門を破ろうという話になったんだが、その時に、そいつが一人で城門に向かっていったのさ。城壁の窓や上にいる騎士団に次々と剣をぶん投げてどんどん無力化していったんだぜ。おかげであたし達の部隊も城門に辿り着けて、無事攻め入ることができたんだ。さすがに大砲までぶっ放すと一般人にまで嫌われるからね。あたしがナイフ投げを練習したのもあれを見たからなんだよなあ。実用性は置いといて、かっこいい。だから趣味だな、うん。」

先生は急に嬉々として喋りだした。生憎、早口すぎて半分ほどしか聞けていない。でも、先生がその人に好意を持っていることは伝わってきた。

「先生、その人って男ですか？」

「ああ。…言っておくが、お前が期待するような展開は無いぞ？」

「フラれたんですね、分かります。」

ズガンっ！

俺の背後に何かが突き立った音。後ろをチラっと見ると、ナイフが突き刺さっている。いつ投げたんだ？　全く分からなかった。

「いらんこと言わずにさっさとやれ。今後もあたしの講義の時間にはここで練習しておきな。出席にしといてやるからよ。」

先生は出口へと向かっていく。あとは一人でやってろということか。一応やっては見るが、その前に俺はなんとなく興味を抱いたことを訊いてみることにした。

「先生、最後にいいですか？　さっきの話に出てきた人、名前は何て言うんです？」

やれやれという顔をしながらも先生はこちらを向いてくれた。どうやら、その人の話題をすると断らないようだ。タブーもあるようだが。

「…奴の名前、か。お前に言うのはやめておこう。今では割と有名人だし、変にお前が騒ぐかもしれんしな。」

では、と言って先生は去って行った。有名人ということは、その内に耳にするかもしれない。

さて、一人残されたところでナイフ投げをやってみるか。先生は下から投げていたけど、まずは上から投げてみよう。

「せいやっ！」

ナイフは思った通りの弾道で的へと飛んでいく。ちゃんと刀身も的へと向いている。意外とできるものだった。

カーン！

悲しい音と共にナイフは弾かれた。先生が簡単に突き刺していたから忘れていたが、この的は結晶獣と同じようなものでできている。

ただ飛んでいっただけではダメージを与えられない。ならば、と俺は剣を創る。身体能力を強化すれば、ナイフに加わる力も強くなるはずだ。

「そおいっ！」

カーン！

…同じ結果だった。理由は分からない。だがまずは回数をこなそう。考えるのはそれからだ。

「せいっ！」

「ていっ！」

「どりゃー！」

ぐぬぬ。何故か上手くいかない。これは成功例をもう一度見たい気がする。

「…貴様は馬鹿な声を出して何をやっているんだ？」

投げるのに夢中でハイドがいることに気付かなかった。馬鹿な声だと？　確かに途中からどんな声で投げるといいかとか考えていたので、自分でもそう思う。

「ハイドじゃないか。どうしたんだ、こんなとこ来て。」

ハイドは時計を指さした。

「夢中なのは結構だが、次に遅れるぞ？」

すぐに片付けて次の講義室に向かうことにした。

ゴートン先生の“歴史”

～ディム～

今度こそ座学のはずだ。歴史。これでいきなり「よし、闘技場に移動するぞ！」とか言われるわけがない。

歴史の先生は俺たちが来た時には既に教壇に立っていた。別に遅刻したわけではない。早めに来ているだけだろう。先生は、白髪が混じった高齢者という感じの人だ。

「えー。では歴史の授業を始める。……。」

困った。何故か何も言わずに固まっている。前の方で学生の一人が「先生、とりあえず自己紹介してもらえますか」と小声で囁いている。あくまで小声。

「おお。そうじゃった。…わしはゴートンという。ここでは皆にフェアガルテの歴史を知ってもらおうと思っておる。」

ようやく始まったようだ。もう少しテンポを速くやってほしいと思う。

「さて、今日は何を話そうかのう？」

決まってないのだろうか。それともボケているのだろうか。直前のノイン先生の講義で歴史の話は聞いておきたいと思ったのにこんな先生かよ。

前の方で先ほどの学生が「先生、とりあえず3つの国の成り立ちあたりからお話になられては？」と俺のところまで聞こえる小声で話している。あくまで小声。

「よしきた。まず3つの国というのは知ってのとおり……これ！誰じゃ、3つとか言った輩は！　国は2つじゃ！　ドラグハート聖竜王国とゴルノイア魔導帝国じゃな。ここウィスタリアは国という

扱いにはなっておらぬ。理由は、国土の小ささもあるが、ウィスタリアがフェアガルテ全体の管理者という立場だからというのが大きな要因じゃな。この世界には結晶獣というものがおるから、いざというときに人類で一丸となる必要がある。そのときに国という枠は邪魔にしかならんからの。七聖とはそのときのための指導者なのじゃ。」

スイッチが入ったかのように喋りが速くなった。始めからこれで良かったのに…。

「ｚｚｚ」

ん？　ステレオで寝息が聞こえてくる。両隣…クワルとキエンは机に突っ伏してお休み中だった。

「さて、それぞれの成り立ちという話じゃが、違いは特にない。全て、聖域の張られた場所に人が集まっただけに過ぎぬ。結晶獣のいる場所では生活も儘ならぬからの。聖域は3つ創られた。大陸中央の霊峰、そして西と東に一つずつ。人が多い場所に聖域を創ったと言われておる。現在まで残る文献が無いだけで、聖域以前にもこれらの国があった可能性はあるが、わしがここで語ることは歴史じゃ。歴史とは記録じゃから、わしの類推を話すのはお門違いと言ったところじゃな。

歴史と呼べるものは聖域が創られてからの２００年ということになる。順番に追って話してやるところじゃが、今日は最近の話をすることにしよう。何故最近の話をするのかと言うと、２００年間の歴史の上で大きな変化があったからじゃ。あー…先月にあったのは何ていったかの？」

おっと、ここまでスラスラ言ってたのに、また止まってしまった。また、例の学生が「“氷結の雨事件”です、先生。」と補足している。俺が思うにお前は先生の隣にでもいればいいんじゃないか？

「ほっほっほ。そんな名前じゃったの。まあ、名前なんてどうでもいいのじゃ。問題は、人間同士の争いが生まれていると言うことじゃ。その事件もそうじゃし、1年ちょっと前のドラグハート内戦もそうじゃな。先月の事件はまだ分からない点も多い。じゃからドラグハート内戦の話をするとしよう。」

ドラグハート内戦。セイレンにいたときには全く耳に入ってなかったことだ。内戦があったらしいということは聞いたのだが、詳細を俺は全く知らない。

「おそらく分からぬ者もおるじゃろうから、じっくりと話すことにしよう。

まずはドラグハート聖竜王国について知る必要がある。ドラグハート聖竜王国はエインス＝ドラグハートという２００年前の英雄が創り出した聖域の上に建国された国じゃ。その英雄の名前を国名とした。英雄エインスが王になったわけではなく、彼の弟が王となっていたのじゃがな。それはともかく、ドラグハートの名を持つものが王として君臨していたのじゃ。ゴルノイアとの違いは、議会の存在が無い、完全な絶対王政だということかの。

ドラグハートの国民は、英雄の血を継ぐ王を神聖視しておった。『英雄ドラグハートの言うことは絶対だ』とな。聖竜王絶対主義者と言うべき人間が生まれていき、その者達は国交のため、人類のためと言いながら、その思想を持ったまま国外へと進出していった。そして、ドラグハートの支配は国内に留まることは無く、ゴルノイアやウィスタリアにまで伸びていったのじゃ。

その主義者の代表が旧白銀の騎士団じゃ。元々は聖域の守護を目的とする七聖直下の騎士団じゃが、いつしか聖竜王直属の兵隊とな

っていた。その事実を知るころには七聖も聖竜王の支配下にあった。七聖を掌握したドラグハートの支配は、最終的に紺碧の騎士団にまで伸びた。紺碧の騎士団は聖域内全ての治安維持を行う組織。これで、一度ドラグハートは聖域の全てを支配下に置いたのじゃ。」

…まさかゴルノイアという国の存続の危機にまでなっていたのか。今の俺なら反発するだろうが、セイレンにいた頃の俺だったら、上が変わっても関係ないとか思っている気がする。それに、戦いが起こるとしたら内戦じゃなくて、ゴルノイアとの戦争ではないだろうか？

（「“帝国の女王蜂（クイーン・ビー）”って呼ばれてる人だ。2、3年前にエクストレムに駐留していた紺碧の騎士団を壊滅させた部隊の隊長だ。」）

クワルが言っていたノイン先生の話。紺碧の騎士団を相手に戦ったのは、この状況でだったのだろう。ゴルノイアという国を取り戻すために。結晶獣ではなく、人間を相手にしたんだ。

「当時のゴルノイアでは『騎士団以外の軍事力が必要だ』とする宰相派と呼ばれる集団もいたが、帝国議会の半数以上が聖竜王国の主義者で埋まっており、宰相らは投獄された。わしはこの話を聞いた時、全てが終わったと思うた。おそらく、当時の一般人には何が起きているのかも分からなかったじゃろう。ただ為政者が変わるだけじゃと。誰が上にいても変わらないと楽観視しておった。

…聖竜王がアンクレスタの虐殺を始めるまではの。」

俺の頭は混乱していた。知らないことを一気に聞かされたからとかそういうことじゃない。何故、俺はそんなことも知らないんだ？

俺の周りにはアンクレスタは珍しくなかっただろ？　両親もそうだし、幼いころの友人も皆アンクレスタだった。…セイレンだからか。辺境であることが幸いだったのだろう。

「虐殺は一度だけ行われたのじゃが、その情報は隠された。しかし、情報をいくら隠したところで、いつかは知られることになる。当時、丁度七聖筆頭の代替わりが重なったことも影響していたのか、宰相派の残党と今の七聖筆頭であるスカーレット学院長がゴルノイア国内で蜂起しての。お飾りだった皇帝が真実に気付き、自らの権限で議会を解散させたのじゃ。

それとほぼ同じころに、ドラグハート国内でも主義者に反抗する勢力が表立って動きだした。『真にドラグハートを継ぐもの』を名乗る若者を旗頭に反乱を起こしたのじゃ。反乱軍と騎士団の戦いの末、聖竜王が討たれ、新たな聖竜王、新たな騎士団長の元に様々な組織の構造が再構築された。簡単に言ってしまったが、これがドラグハート内戦と呼ばれるものじゃ。全部を纏めると内戦と呼ぶものではないがの。」

まとめると次のようになるのか。

・絶対的な権限を持つドラグハートの聖竜王と、これを崇める主義者というのがいた
・主義者の教育を受けた人間をウィスタリアやゴルノイアに送り込み、徐々にその数を増やす
・聖竜王と主義者は白銀の騎士団、紺碧の騎士団、帝国議会、七聖を支配下に置いた
・ゴルノイアで帝国議会が解散に追い込まれ、ドラグハートでも反乱がおきる
・反乱軍が勝利して、今のドラグハートと騎士団がある

２００年の争いの無い歴史は、実は水面下では争っていたということか。俺は本当に世界に目がいっていなかった。セイレンでは何も考えずにただ生きていた。近くにいる人間すら遠い世界の住人に

感じていたくらいだ。自覚をしていなかったが、その当時の俺は考え方から第三者だったということだろう。

前では先生が「何か質問はあるかの？」と訊いている。一応、この先生の見解を聞いておくか。今の騎士団についてを…。

「先生、勝利した反乱軍は正義なのでしょうか？　再構成された騎士団は信頼に足るものでしょうか？」

俺は聞き方を間違えたのかもしれない。ゴートン先生の返事は、俺の思惑からは大きく外れたものだった。

「もちろん正義だとも。歴史においては勝ったものが正義だからのう。個人の思いとは関係なく…じゃ。　そうそう、唯一正義になれなかった反乱軍のものもいるのう。彼奴は負けたということじゃ。

元紺碧の騎士団団長、ドレイクはな。

わしが何を言おうと関係は無かろう。信頼とは自分の意志でなければ意味がない。何を信じ、何を為すのか。それは君たち次第じゃよ。」

ゴートン先生の“歴史”（後書き）

ここからしばらく説明が多くなります。
同じことを繰り返す場合もあるのでご容赦を。

アルカイン先生の“結晶獣に対する戦闘技術”

～ディム～

「ねえ、ディム。さっきの講義は何について話してたの？」
講義終了と共にキエンが夢の世界からお帰りになられた。気になるなら聞いていればよかったのに。
「ドラグハート内戦について、だな。キエンは知ってる？」
「そりゃ知らない方がどうかしてるわよ。良かった。別に聞いてなくても問題は無かったようね。」
キエンにはっきりと「お前の頭はどうかしている」と言われた気がする。ああ、知ってたさ。知らないことは無力だってな。だから俺はキエンやクワルみたいに寝るわけにはいかない。…寝るつもりもないけど。

ドラグハート内戦に勝利した反乱軍が、騎士団の再構成に大きく関わっている。騎士団と言っても、さっきの話では紅蓮は入ってないから白銀と紺碧か。そして、先月まで紺碧の団長だったドレイクは、反乱軍の一員だった。蒼星結晶を狙っているのは反乱軍とやらか？

（「我が真なる名、ギルサス＝ドラグハートの名において命ず。」）

ドレイクが詠唱（かたり）のときに言っていた言葉。確かにドラグハートと言っていた。これが本名なら何故偽名を使っていた？　まさかドレイクは反乱軍ではなく、主義者側の残党なのか？　蒼星結晶を狙う、俺たちの敵って何なんだ？

答えが出ない。それはまだ情報が足りないからだ。そもそも講義

の内容だけで分かることなら、とっくに学院の方で把握してるだろう。学院側の情報も押さえておきたい。ドレイクのことや蒼星結晶のことに関しては、俺は第三者ではなく当事者だ。やはり、自分なりに調べたいと思う。

俺の肩をキエンがツンツンと突く。

「ディム、次の先生来たから、あまりボケッとしないでよね。」

さっき寝てた人に言われたくない。

次の先生か。講義の科目名は“結晶獣に対する戦闘技術”だ。今日は講義室に集められたとはいえ、普段は実戦をひたすら行うらしい。この科目は昨年まではドレイクが担当していた。ということは今年の先生はこの科目を初めて担当するということだろう。さっきの歴史の先生みたいなのはやめてくれと願っていた。俺の期待に応えるかのように、先生の服装は赤で統一されていた。

「いやー、私なんかが講義をするとは思いませんでした。じゃあ、自己紹介でもしておきましょうか。私は紅蓮の騎士団所属、アルカインといいます。よろしく。」

紅蓮の騎士団。対結晶獣の戦闘部隊。ということはラゼスさんの上司だろうか。正直に言うと、強そうに見えない。まあラゼスさんも弱そうに見えるから、見た目で判断してはいけないのだろう。紅蓮の騎士ということはフェルズ級結晶獣を一人で相手にできる実力者のはずだ。

「今日は初回ということで、騎士団候補生と魔導技師候補生の皆さんに座学という形でお話をすることにしましょう。ズバリ結晶獣に関する知識を得てもらいます。まず、結晶獣とは…」

結晶獣（クオーツ）とは、２００年前に霊石が発見された時期に現れた怪物の総称である。水晶の体を持っていることが特徴であり、当時の人間

たちが持っていた武器が通じず、霊石を使った攻撃しか通じない。また、本能として人間を殺そうとする。

結晶獣は大きさごとに４つのランクに分けられる。コルン級、キーゼル級、フェルズ級、マイン級だ。サイズが大きくなるほど、強大な力を持っている。俺が一人で相手をできるのはキーゼル級までだろう。フェルズ級は一人では分が悪い、というよりも俺は倒したことが無い。

人類の天敵となった結晶獣であるが、今は一般人に危害を加えるようなことはない。何故ならば、英雄たちが創り上げた魔法である聖域が結晶獣を寄せ付けないからだ。聖域の効力は結晶獣のサイズが大きいほど大きく、聖域が張られてからマイン級結晶獣は目撃すらされていない。

ここまでは俺でも知っている知識だった。しかし、先生の話はまだ先があった。

「しかし、近年の結晶獣は変化してきている。昔は無色の個体ばかりであったのに、色のついた結晶獣が現れ始めた。色のついた結晶獣と色の無い結晶獣はどう違うのか。それは魔法を使うかどうかにある。色のついた結晶獣は人が霊石を扱うように魔法を使うんだ。赤色をしていれば強化魔法を使ってくるし、緑色なら干渉魔法を使ってくる。現在、確認されている色付きの結晶獣は、赤と緑と黄色だ。」

色付きの結晶獣。魔法を使う結晶獣たち。先生が言った確認されている３色を俺は全て見たことがある。ラゼスさんが倒した黄色のフェルズ級トカゲ型、試験で出てきた赤色のキーゼル級狼型、フェイナが追い払った緑色のフェルズ級目玉型。黄色に関しては直接戦ったわけではないから確認していないが、確かに赤と緑はそれぞれの色に対応した魔法を使っていた。最近になって現れたということは、結晶獣も進化していると言うのだろうか。

「おそらく君たちの内、騎士団候補生には訓練の他に聖域の外での実戦をするときがあると思う。忘れてはいけないことは『一人で立ち向かうな』ということだ。フェルズ級以上の結晶獣は文字通り化け物だ。人間が一人でまともに戦えると思わないこと。さらに色までついてたら紅蓮騎士ですら手こずる相手だしね。」

「え？　紅蓮騎士なら一人で相手をできるのではないのですか？」

つい声に出してしまった。アルカイン先生は気を悪くすることなく俺の疑問に答えてくれる。

「うーん。一人でやらざるを得ない場合は仕方ないけど、勝率がかなり下がるからな。普通は一人でやらないよ。紅蓮騎士の中でも一人で活動できるのは、団長かラゼスくらいだからな。ま、ラゼスの場合は燃費が最悪だから団長みたいに聖域の外を一人旅なんてことはできないけどな。」

燃費が最悪というのは分かる。ラゼスさんの魔法はガシャクロの腕を消し飛ばすほどの火力を持っていたけれど、使うたびに霊石が無くなっている。俺たちみたいに精神的な疲れでは済まないのだ。

それにしても、ラゼスさんは紅蓮の騎士団でも特殊な立ち位置みたいだ。良く聞く呼び名として黒のクレスタってのがあったっけ。俺の魔法の知識に黒は無いけど、一体何なのだろうか。

フェイナの提案

～ディム～

一日目の講義が全て終了した。俺が知らないことが多すぎて、整理しとかないと混乱しそうだ。とりあえず今日の講義を受けた結果、俺がしなければならないことは決まった。学院長に直に話を聞きに行くことだ。本当ならこのまま学院長室に向かいたいところだが、そうはいかない理由がある。今日はフェイナと約束があるのだ。

（確か、東棟の入り口って言ってたな。）

「ディム、どこ行くの？」

俺が一人で向かおうとすると、キエンに呼び止められる。そういえばキエンとの約束もあったな。キエンも連れて行けばどっちの約束も果たせそうだ。

「ちょっとフェイナに呼ばれててな。良かったら一緒に行くか？」

「ああ、そういうこと。じゃあ行くわ。」

「今日はおいらも暇だから行っていいよな？」

俺たちの話を聞いていたクワルも便乗してきた。まあ人数が増えたところで困りはしないからいいか。

「なあ、ディム。おいらには東棟に向かってるように思えるんだが…」

特に目的地を告げずに一緒に歩いていると、クワルが東棟に向かってほしくないような口振りで訊いてくる。

「そのとおりだけど、何か問題でもあるのか？」

「うぐっ。そうなのか。…大丈夫だ。おいらが会いたくない人がいることは間違いねえが、会うと決まったわけでもねえ。」

クワルの顔が少し青い気がするが、大丈夫だという一言を信じよ

う。多分俺たちに言っているのではなく、自分に言い聞かせているのだろうが。クワルが会いたくない人が一体どんな人かは気になるが、今聞くのは止めておこう。

さて、東棟に到着した。東棟は正式には研究棟というのだったか。学院内で魔法や魔導機械の研究を行っている場所だ。学院の教師の部屋も大半がここにある。優秀な学院生だとここの部屋を研究室として与えられるとも聞いている。騎士団候補生や下級生にはあまり縁がない場所だ。…今思えば、フェイナとの関連性が分からない。

入り口には端の方で静かに立っているフェイナがいた。

「あ、ディム。遅いじゃないですか。待ってたんですよ。」

「ごめん。」

俺としては最速で来たつもりなのだが、待たせてしまったらしい。いつから待ってたのかは知らないが、遅れたと言うのなら謝ろう。

「…３０秒くらい。」

「謝罪は撤回させてもらう！　むしろそれは今着いたところだろ！」

フェイナは今日も絶好調のようだ。

「あれ？　ディム一人じゃないんですね。確か、キエンさんと……」

「……」

クワルの顔を見てフェイナは首をひねる。段々と横への首の曲げ方が大きくなり、仕舞いには９０度くらいまで傾いた。そういえば、フェイナはクワルの名前を聞いてないな。考え込んだところで聞いたことのない名前など出てこないだろうに…。すると、何かピンと来たのか頭を縦に戻した。

「キエンさん！　お久しぶりです！」

「ええ、久しぶりね。と言っても病院で１回会っただけだけどね。」

「ちょっと待てい！　おいらの存在が無かったことにされてね？

せめて『どちら様ですか？』くらい聞いてください、お願いします。」

フェイナはクワルを見なかったことにしたようだ。しかもキエンと握手することで誤魔化そうとしている。俺はどうすればいい？クワルを無視したことにツッコムべきか、キエンに自分から握手したことを喜ぶべきか。…まあどうでもいいか。今日はツッコミが楽になりそうだし。とりあえず俺がフォローを入れて話を進めよう。

「どちら様ですか？」

「なんでディムが訊いてくるんだよ！？　おまえがおいらの名前を知らないはずないだろ！」

「…本当に、クワル様ですか？」

「え？　何？　おいら疑われてるの！？　どうしよう、おいらには自分で自分を証明する手段がないぜ！」

「なるほど、失礼しました。確かにあなたはクワル様です。」

「どうしてそうなった！？　今の会話のどこで証明できたの！？」

よし、飽きた。切り替え、切り替え。

「で、フェイナ。俺をどこに連れて行きたいんだ？」

「あ、そうでした。こっちです、ついてきてください。」

本来の目的を忘れてたようだ。それはともかく、俺たちは東棟の奥へと案内されていく。そして、階段まで行き着くと、上下に分かれている内の下へと降りて行った。外の明かりが入らぬ廊下が続いている。明かりは最小限だけ灯されていた。

「かなり暗いけど、これってわざとなの？」

「そのようだぜ。おいらが聞いたかぎりだと、地下の研究室は光をあまり入れたくないんだとよ。全く、どんな連中がいるのやら。」

せめて廊下ぐらいちゃんとした明かりをつけて欲しいものだ。幸い廊下は物が無く綺麗だから歩けているが、段々と気が滅入ってくる。ここにいる人はどんな神経をしているのか、クワルと同じく俺

も疑問に思う。
「着きました！　ここです！」
目的地に着いたようだ。通ってきた廊下のどの扉を見ても研究室って書いてあった。ということはここも研究室のはずだ。入り口の上に部屋の名前が書いてある。
『アルカナム研究室』
アルカナム研究室。アルカナムを研究しているわけじゃなくて、アルカナムさんの研究室だよな。俺はその場で回れ右をする。
「さあ行きましょう！　ルミネー、連れてきたよー！」
「嫌な予感はこれだったのかああ！」
俺はフェイナに襟を掴まれ、引きずられていく。クワルとキエンは嫌がる俺を見て首を傾げていた。
室内は数多くの霊石に囲まれていた。それぞれが光を放っているため、部屋の中は明るい。さっきのクワルの話とは真逆の部屋だった。部屋には幾つか机があるが、誰も使っていない。唯一、一番奥の机に部屋の主がいるだけだった。部屋の主、ルミネは俺たちに気付くと椅子から立ち上がる。
「あ、モルモ…ディムくん、やっと来ましたわね。」
「今、何を言いかけやがったんだ、アンタは！」
くっ、俺はまた嵌められたのか!?　この人が関わるとロクな目に遭わない。実験といいながら発砲してくる危険人物だ。確かにこの人のおかげで分かったこともある。俺にとってはマイナスよりもプラスが大きいのだけれども、死にそうな目に遭うことだけは勘弁して欲しい。
そして、相変わらず目的の人物以外とは離さない人だ。俺の後ろにいる2人には目すら向けていない。

「早速ですけど、この書類にサインしてくださる？」
「まずは説明からしてくれ。」
説明を要求はしたが、きっとまともな説明はしてくれないだろう。書類とやらを受け取って内容に目を通す。
「簡単に言えば、ディムくんにはわたくしの研究の助手になってもらいます。この書類は研究室の一員として正式に認めるというものになりますわね。」
説明してくれるとは思ってなかった。大体そんな内容が書いてある。むしろ書面に何も問題ないことに驚いている俺がいる。何かが隠されていないか心配だった俺は、「ライター貸してくれ」とクワルに頼んで炙ってみたり、水道まで持って行って水をつけたりしたが何も出てこなかった。これ以上思いつかなかった俺は諦めて書類にサインする。
「名前を書くだけで何故そんなにも時間がかかるのです？　…まあいいですわ。これでＯＫ、と。」

さあ、一体どんな罠が待っていたのか。もうある意味楽しみになってきた。…しかし、待っていてもルミネの不敵な笑みが見られない。
「あれ？　何も無いの？」
「何を言っているのですか、あなたは。」
本当に何も無かったみたいだ。拍子抜けである。俺の覚悟を返せ！　というか何かオチが欲しい。
「わんわん！」
「俺が求めているのはポチじゃない！」
俺が悪かった。本当に。だからフェイナ、その奇行をやめてくれ。

仕切り直し。

「で、研究ってのは俺の魔法についてですか？」
フェイナを使ってまで俺をここに呼んだのだ。それしかないとは分かっているのだが、ルミネの口からも聞いておきたい。ルミネがそう思っているのなら、俺としても好都合だ。自分のできることを知っておかないと前に進めない気がするから。俺一人よりはルミネの協力が得られた方が早く調べられそうだ。。
「色々ですわ。わたくしはあなたに掛かりきりになるつもりはありませんので。」
だがルミネは思ったよりも乗り気じゃないみたいだ。
「あのー、どうして俺を呼んだんです？」
「あら？　わたくしはフェイナに頼まれただけですけど、聞いておりませんの？」

俺はルミネの研究室ということから勘違いをしていたようだ。そういえばフェイナは言っていたな。
（「いいことを思いつきました。早速明日にはルミネに相談します。」）
全部フェイナが仕組んだことのようだ。後ろで楽しそうにしている彼女の方を見る。
「どういうことだ、フェイナ？」
「折角知り合ったんだから、皆で一緒に何かやりたいんです！」
「…それだけ？」
「はい！」
フェイナのことだ。言った以上の意図は無いのだろう。具体的に何をするのかとかは何も考えていないと思う。困った俺はルミネを見つめて目で訴えるが、彼女は首を横に振るだけだ。
「例えば、何をするつもりなの？　フェイナはルミネの研究とかあまり興味ないよね？」
「うーん、そうですね……人助けしましょう！」
「はい？」

「人助けですよ、人助け！　ウィスタリアの中でも困っている人はたくさんいるはずです！　その人たちの力になりましょう！」

もう一度ルミネに目を向ける。多少困惑しているが、許容するつもりだろう。責任者が何も言わないのなら俺も従おう。フェイナがこんなことを言い出すのも分かる気がする。『人を助けたい』という思いの裏には、助けて欲しかった過去があるからだと思う。だからきっと俺の中にも同じ思いはある。

「キエンさんと…クワルさん？も一緒にどうですか？」

この部屋に入ってから初めて話を振られた2人。正直、途中で帰ってないことの方が不思議だ。話の展開も滅茶苦茶すぎるしな。キエンは何て言うか想像つかないけど、クワルは二つ返事でＯＫしそうだ。あのお人好しは人助けならいつもやってそうだし…。

「すみません、おいらは帰ります。多分、ここに来ることはもう無いでしょう。失礼します。」

クワルの返答は俺の予想から外れていた。それに少し棘がある言い方だった。言い終えてから早足で来た道を戻っていくクワルを俺は追いかけた。

「クワル、待ってくれ！」

地下の廊下をカンカンと足音を立てて走っていくとすぐに追いついた。

「どうしたんだ、お前？　らしくないぞ？」

「…おまえこそ何を言ってるんだ？　おいらはいつも通りだ。問題ない。」

クワルには自覚がないようだ。でも俺にも、どうクワルらしくないのか上手く言葉にできなかった。とりあえず思いついたことを訊いてみる。

「まさか、ルミネが『東棟で会いたくない人』なのか？」

「違えよ。…おいらもうまく言えないんだけどよ。多分、おいらが

いたら上手くいかないんだ。」
クワルは何を言っているんだ？　お前がいたら上手くいかない？　逆じゃないのか。クワルがいなかったら今の俺はいないというのに。
「ディム、おまえがフェイナさんのために頑張っていることは知っているつもりだ。でもな、おまえは彼女のことを知らないんじゃねえか？」
「確かに昔のことは聞いてな…」
「過去のことだけじゃねえよ。今もだよ。おまえは気付いてねえかもしれねえが、彼女…怯えてたんだよ。おいらにな。」

そうなのか？　フェイナは今、怯えていたのか。俺には全く分からなかった。クワルはこういうところが俺より鋭い。でも、彼女は最初は誰にでもそうなのだ。だからクワルの人となりを知ってもらえれば怯えることも無いはずだ。
「最初は俺だってそうだった。だから問題無いさ。」
「そんなことはねえよ。彼女が極度の人見知りだってのは知ってるさ。でもそれだけじゃねえんだ。説明はできねえけどよ。」
フェイナの活動に参加するかどうか。今はそれだけじゃなくなった気がする。クワルが暗い廊下を階段の方へと歩いていく姿が、まるで俺から離れて行ってしまうことを暗示している気がした。

研究室に戻ると3人とも部屋に残っていた。フェイナの顔は先程と打って変わって沈んでいる。
「クワルは何て言ってた？」
「人助けなんて面倒くさいことやってられるか、だってさ。やりたくないなら仕方ないよ。」
俺は嘘をついた。俺自身、何が真実か分かっていないが…。キエンは「そう」とだけ言ってフェイナの元へと向かった。

「フェイナ、アタシは協力してあげるから、元気出して。…でも研究室ってのは性に合わないから活動するときだけ呼んでね？　じゃあ、アタシも帰るわ。」
キエンも去り、後には俺とフェイナとルミネが残された。

沈黙する部屋の中でフェイナが口を開いた。
「やっぱり、私が悪いんですよね。クワルさんのお名前を覚えてませんでしたし。」
どうする？　フェイナに『怯えていたかどうか』を訊いてみるか？　…いや、ここはフェイナに合わせよう。余計なことは言わない方がいい。
「じゃあ、次に会ったときは忘れないことだよ。取り返しのつかない失敗じゃないさ。」
そうは言っているけど、俺はどうすれば取り返しがつくのかは全く想像できていない。クワルといえば、綺麗な女性にはとりあえず話しかけるイメージがあったけど、何故かフェイナとはあまり関わろうとしない。この理由はいつか分かる日が来るのだろうか。
「そうだ、フェイナ。それからルミネ。俺としてはあと一人、仲間に入れたいんだけどいいかな？」
「はい…。」
「…まあ、いいですわ。明日ここに連れてきなさい。」
「分かりました。それじゃまた明日！」
フェイナの顔は晴れなかった。今日はもう出直そう。

～フェイナ～

変わろうと思って、何かがしたかった。正直に言うとディムに「何がしたい？」と聞かれたときまで特に何も考えていなかった。でも、私の中では何となくでは決まっていたのだろうと思う。

人助けがしたい。

それは紛れも無く私の本心だ。でも正確には違う言葉である。私は、私を助けてくれたディムやルミネに憧れているのだ。私は誰かのために人助けをするのではなく、私自身のためにそうしたいのだろう。いつか私自身を救えるように。

ディムは時間通りに来てくれた。でも、ディムの後ろには2人ほど誰かがついてきていた。病院でディムと一緒だった人たちだ。女の子の方がキエンさんで、大柄な男の人が…名前は聞いてなかった。少しぐらいならいいやと思って、私は男の人の眼を見た。私は疎んでいた力を、名前を知るだけに使ったのだ。

ディムの友人だからと私は油断していたのかもしれない。クワルという名前はすぐに分かった。けれど瞬時に私に飛び込んできた他のイメージは私に衝撃を与えるのに十分だった。

クワルさんとドレイクが2人きりで会っていた。

同時に伝わってくる感情は怒り、恨み、殺意。矛先はドレイクではない。これらの感情が彼の根底にあった。私は他にも似たような人を“見た”ことがある。自らが生きる目的、願いが…誰かを殺すことである人間の特徴だ。その内なる悪意を抱えて尚、表向きはそのような素振りを見せない。その姿がとても怖かった。ディムの手前、あからさまに怖がることはしたくなかったので、私はキエンさんと向き合うことで自分を落ち着かせた。

クワルさんの秘めたる激情は怖い。そして、ドレイクの手がすぐ近くまで伸びていると思うとさらに恐怖した。でも私はディムにもルミネにも伝えない。ディムには友達と対立してほしくないし、ド

レイクのことになると一人で突っ走ってしまいそうだ。ルミネはやることが過激すぎるし、できればドレイク関連のことには巻き込みたくない。私なりにやってみることにしよう。

ラゼスの知る歴史

～ディム～

ルミネの研究室を出ていった俺はすぐに学院長の部屋へと向かった。しかし、秘書と名乗るあの男が居ただけで会えなかった。いないものは仕方がないので、次にしなければならないことをする。だから俺は寮に帰ることにした。

日が沈み、辺りがすっかり暗くなった頃に俺はある人の部屋の前まで来ていた。入り口のプレートには「ラゼス」と書かれている。俺はラゼスさんに会いに来たのだ。早速ノックをする。

「先輩、ディムです。お話があるんですけど。」

「入ってくれ。」

ラゼスさんの部屋に入る。俺たちとは違い一人部屋だが、部屋の広さはあまり変わらない気がする。ただし、部屋の中は物が少なく、あまりにも殺風景だった。というよりも生活感があまり無い。

「この部屋は学業優秀な学生に与えられる部屋なんだ。何故か僕にまで与えられたよ。僕にとって部屋なんてのは寝るためだけにあるのに…。なんだか勿体無い気がしてくるよね。」

俺がキョロキョロしていることに対するリアクションのようだ。これは失礼だったかと思い、ラゼスさんに向き直る。それにしてもこの人の発言は自分を卑下し過ぎではないだろうか？　俺には自信を持てみたいなことばかり言うのに…。

「何故かって…。先輩は学院生でも2人だけの紅蓮騎士でしょう？　十分な実績じゃないですか！　それに紅蓮騎士でも特別な活躍をしてると聞いてますよ。」

「…それは僕が特別だからね。」
特別。自画自賛をするような言い方ではなかった。ラゼスさんの口から出たその言葉は、俺が口にした同じ言葉のニュアンスとは真逆な雰囲気を纏っている。この機会に“黒のクレスタ”について訊いてみるか？
「僕の話は置いておこう。君が僕のところまでわざわざ訪ねてきた理由は何だい？」
暗に「訊くな」と釘を刺されたみたいだ。じゃあ手っ取り早く用件だけ言おう。
「実は明日、先輩を連れて行きたいところがあるんですけど、放課後に時間あります？」
「ふむ…、いいだろう。時間を空けておくよ。僕はどこに行けばいい？」
「中央棟の入り口でお願いします。」
なんとなく東棟の入り口とは言えなかった。この部屋を見て、ラゼスさんはあの場所が苦手なんじゃないだろうかと思ったからだ。
…用件が済んでしまった。特に深くも聞こうとしないし、今日はもう帰ってしまおうかな。
「じゃあ明日はお願いします。」
「ああ。…と、その前に僕もディムに訊きたいことがあったんだ。」
おっと、引き留められるとは思わなかった。ラゼスさんから俺に訊きたいことがあるとは珍しい。さらに珍しいことに、次の言葉が出てくるまでに時間がかかっていた。何か訊きにくいことなのだろうか。
「…君はメイムという名前の女の子を知っているかい？」
メイム…。俺の記憶にピンと来ることはない。おそらくあったことが無い人間だ。そもそも俺が名前を知っている女の子なんて、フェイナ、キエン、ルミネの3人くらいだ。…言葉にすると簡単だが、この事実について考えてみるとグサッと何かが胸に突き刺さった感

じがする。俺って交友関係、狭いなあ。
「思い当りません。おそらく会ったことはないですね。で、その子がどうしたんです？」
「い、いや、何でもないんだ。忘れてくれ。」
この人が慌てるところを初めて見たかもしれない。一体メイムという子は何者なんだ？

何者、といえば…俺やフェイナを狙っているドレイクは何者なのだろうか。ドラグハートの名前を名乗っていたし、俺の知らない何かがあるのは間違いない。それは俺だけが知らないことなのか、普通は知らないことなのかをはっきりさせる意味でも、今ラゼスさんに訊いておくべきだ。…話題を変える意味でも。
「ラゼスさん、話は変わりますけど…ドレイクについて教えてもらえますか？」
「唐突に変わるねえ。ドレイクは元七聖で紺碧の騎士団の元団長でこの学院の元講師。それ以外に何か知りたいことがあるのかい？」
やはりそれ以前の経歴は出てこない。だから単刀直入に訊くしかない。
「俺が知りたいのはそれ以前の話です。ドレイクはドラグハート内戦で反乱軍の一員だったというのは本当ですか？」
ラゼスさんの顔から笑みが消える。いつになく真剣な表情だ。おそらく、知っていて敢えて俺に言わなかったのだろう。
「…それは本当だよ。ドレイクは反乱軍の主要メンバーだった。それがどうかしたのかい？」

ラゼスさんから普段の温厚な印象が消えうせる。今の目の前の姿こそがラゼスさんの本質なのだろうか。俺はこれ以上この話に踏み込んでいいのだろうか？　ラゼスさんは俺の味方なのか…？
…少なくともドレイクの味方ではないのは間違いない。この人がドレイクの仲間であったのなら、氷結の雨事件は別の終わり方をし

ていたはずだ。だから俺は、今の考えをラゼスさんにぶつけてみることにした。

「例の事件のとき、学院内に持ち込まれていた結晶獣の数は、とても一人で秘密裏に運び込める数ではなかった。だからドレイクには手駒がいたはずなんです。しかし、犯人として追われているのはドレイクただ一人。公式の発表でもドレイクの単独犯となっていますし、結晶獣の持ち込みよりも氷結の雨を大きく報せています。

…何か、隠したい情報でもあるのではないですか？　例えば、ドレイクの指示で動いていた紺碧騎士は反乱軍の一員だったとか。もしかしてドレイクの背後には現ドラグハートが…」

「ストップ！　ディム、それは君の考えすぎだ。」

「そうかもしれないですね。じゃあ、実はドレイクが主義者とかいう人たちの仲間だったとかは？　ドレイクは本当はドラグハートの王家の人間なのでしょう？」

ラゼスさんは頭を抱えている。図星とかそういったものではなく、ただ俺に呆れているようだ。俺の言ったことは的外れだったのか。

「…ディム、それこそ勘ぐりすぎだ。家の名前で個人の主義主張が決まるわけじゃない。それを言ってしまったら、反乱軍のリーダーだった現在の聖竜王もドラグハートの人間だ。…もしかして君は単語だけ聞いて混乱しているんじゃないか？　それに何か焦っているようだね。まずは落ち着くんだ。一人で考え込んだところで何も好転はしない。」

そうかもしれない。俺はティフェレンが現れてから焦っている。漠然と嫌な予感を感じていて、それが頭を離れない。

漠然としたものははっきりとさせたい。

知らないということは無力だと言うことだ。

手遅れになる前に、危険は回避しなければならない。

いつも氷結の雨事件のときのような解決ができるとは限らない。
俺は折角手に入れたこの場所と仲間を、絶対に失いたくないんだ。

「今、僕から言えることは一つ。一人で抱え込むなということだけ。一人ではできないことの方が多い。君が信頼する人に協力してもらうんだ。君にはクワルやハイドといった仲間がいるだろ？」
そうだった。自分でいつも言っているはずじゃないか。今の俺には一人で戦う力は無いって。
「君がドレイクのことを気にしていることは分かった。僕の方でも少し調べてみる。何か分かったら連絡させてもらうよ。…僕を信頼してくれれば、だけど。」
「…お願いします、先輩。俺、先輩を信じてますから。」
そもそも先輩を疑ってなどいない。立場的に俺に言えないこともあるのだろうし、ドレイクが反乱軍だという話は関係ないことだったんだ。
「もう帰って寝た方がいい。一晩休めば色々と落ち着くと思うし。」
「そうですね、分かりました。では明日の件、よろしくお願いします。」
俺は本題の方をもう一度確認してから、部屋へと戻った。

～ラゼス～

「ドレイクがドラグハート王家の人間…か。」
ディムが部屋を出て行ってから、今の話を振り返る。僕はドラグハート内戦の当時は、何も力を持たないただの学生だったから、詳しいことは知らない。それでも当時の世界の動きには一般人の立場ながら注目していた。

内戦の背景は、１００年以上前まで遡る。昔から聖竜王は人間の平等を訴えて活動していた。しかしそれは魔法を使えるもの、クレスタに限られていた。アンクレスタを人扱いしないため、アンクレスタたちはドラグハートから逃げ、ゴルノイアへと集まっていく。そして、優秀なクレスタたちはウィスタリアを経由してドラグハートへと流れていた。

次第に構築されていったこの流れによって、クレスタとアンクレスタの人口比率に偏りが生まれた。当然、ゴルノイア側では生活が困難な人たちが多く溢れかえっていた。そこに主義者と呼ばれるドラグハートの人間が送られていき、生活が支援されていた。そうして次第にゴルノイアの民に劣等感を植え付けていった。だが、ゴルノイアの民は不満を言うことは無かった。ゴルノイア国内でも、聖竜王のおかげで今を生きられていると考える人間が増えていった。

その歴史に一石を投じたのが魔導機械技術だ。この技術は４０年前にベルヴェルクに住むクレスタ、バウル＝クロイツ博士によって現実のものとなった。次第にアンクレスタたちに普及していき、１０年前にはほぼ全ての家庭にまで普及したのだ。帝国宰相メヴィスはそれを機にドラグハートからの完全な独立を宣言し、ゴルノイア独自の軍隊が設立された。この頃から不穏な空気があったのは確かだ。そして８年前、一度帝国内から全ての紺碧の騎士団が追い出されている。

だが、主義者を一層することはできず、宰相は議会によって更迭された。「人間の敵である結晶獣を置いておいて、人間同士で争うとは何事か」とか言っている議員の言葉は有名だ。聖竜王が絶対だという考えに縛られた人間にとって、全ての人間のために立ち上がった自国の宰相は危険人物らしかった。一体誰が始めた争いなのか、少し考えれば分かるものなのに。ドラグハートが抗議をするのなら

まだ分かるが、彼は自国の人間に攻撃された。
この一連の流れは、報道機関を通じて宰相が悪人に仕立て上げられて世界各地に伝えられた。

帝国宰相が更迭されたのが今から5年前の話だ。同時にゴルノイア軍は解体され、宰相に味方する人間は次々と紺碧騎士に捕まっていった。その頃から、聖竜王国内で聖竜王を非難する声が大きくなり始めた。始めは誰も見向きもしない小さな動きだったらしく、特に取り締まりがあったわけでもないらしい。

反聖竜王の動きが勢いづいたのは2年前の話だ。それは内戦勃発の直前と言っても過言ではない。何者かが投獄されていた宰相を解放し、ゴルノイア全体に聖竜王の正体や悪行を露呈させた。宰相派を中心にしてアンクレスタが一斉に蜂起し、帝都エクストレムを取り囲んだ。これが“エクストレムの暴動”というゴルノイアで起きた内乱だ。紺碧の騎士団が立て籠もっていたが、城門を破られた時点で決着している。

そして、聖竜王国内でも主義者たちの主張は疑問視され始めた。聖竜王は神聖視されるような存在ではないと、小さな火種だった反乱の芽が大きく燃え広がるように成長した。そして、その中にはドラグハートの人間以外にも、ゴルノイアの人間もいた。

ディムの言っていた反乱軍とは、国の内外を問わない反聖竜王の集まりであった。そして、それを構成しているメンバーの中には、現七聖が多くいる。「結晶獣という問題に向き合うために、内部に巣食う悪を討つという志は共通のものだった」と僕が尊敬するあの人は言っていた。

だから、当時の反乱軍が結晶獣を使ってウィスタリアを襲うわけ

がない。主義者の残党という方がしっくりと来る。ここウィスタリアは七聖筆頭スカーレット様がいる場所だから狙われてもおかしくない。

「主義者の残党…。この線で調べてみるか。」

スイギョク先生の“魔法理論”

～ディム～

昨日、ラゼスさんの部屋から帰った後、思いの外すっきりとしてすぐに寝た。焦るだけ無駄だと割り切れたのだと思う。ラゼスさんに対する信頼もあった。

昨日は結局クワルと顔を合わせていない。俺が帰った時にはまだ帰っていないようだったし、朝俺が起きた時には出て行った後だった。一応ハイドに様子を訊いてみたが、普段通りだということだった。

今日も講義が始まる。今日は俺の隣に知っている顔は座っていない。

「私は“魔法理論”を教えます、スイギョクと申します。今日は魔法の基礎知識について簡単に説明いたしましょう。」

この講義の先生は白衣を着た女性だった。俺の印象としてはお姉さんとオバサンの中間ぐらいといったところの人だ。

「まずは、魔法の種類について…」

俺たちが使用している魔法は４種類に分けられる。

一つ目は自分自身の基礎能力を高める“強化”だ。足を速くしたり、腕力を強くしたりといった身体能力や、動体視力を良くするなどの反応を高めたりする。スピードとパワーを要求される接近戦で必須とも言えるもので、騎士団の前衛は習得必須の魔法である（一部に例外はいるらしい）。また、長時間の使用は肉体に悪影響を与えるため、要所要所で適用する必要がある。俺にはこの悪影響どう

のこうのといった知識は無かったが、普通は異常が出る前に疲労などという形で現れるので自分から本能で終わらせている。

二つ目は自然現象などを自分の意思で操作する“干渉”だ。アンクレスタたちが魔法と聞いて思い浮かべるものはこれである。できることは、物を浮かせたり、何もないところに火を出したりなど多種多様である。人を浮かせたりすることもできるが、人への干渉ができるかどうかは対象の意志次第だという。大抵は拒絶されると失敗するもので、人への干渉は直接ではなく間接的に行われる。例えば、浮かせたいなら対象となる人が乗っている足場を浮かせると言った形である。

三つ目は自然にある物質（非生物）を自らの望む形状、材質に変換する“練成”だ。といっても材質を変換することができるものは稀である。ルミネに説明されているとおり、一度練成で造られた物質は練成した本人しか練成し直せないという特徴がある。ただし、これは練成に限った話。練成物質には損壊率というものがある。形あるものはいつかは壊れるもの。俺は知らなかったのだが、造られた段階を損壊率０％とすると、この損壊率が５０％を超えた時、練成の魔法は自動的に消滅して元の物に戻るらしい。

四つ目は生物を召喚する“召霊”だ。現れる生物についての研究は進められているが、未だに現実に存在する生物を呼び出しているのか、発動者の想像を創り出しているのかが分かっていない謎の多い魔法である。今のところ有力であるのは、発動者の想像を創り出しているという意見だ。理由は、霊石を手放すと、召霊が消滅するからである。また、一度体を失った召霊は一定の期間で復活できることもその説を押す理由となっている。一定の期間は召霊によってまちまちであるが、あのガシャクロが復活することも考えておく必要があるわけだ。あの時は、蒼い剣のおかげで楽に勝つことができ

たが、次にその剣があるとは限らない。

「ここまでは皆さんも使っている魔法だと思います。しかし、今存在している魔法はこれだけではありません。馴染みはあまりないかもしれませんが、“上位魔法”について説明しましょう。」

上位魔法。つまり、今までの説明にあったのは下位魔法だということか。

「上位魔法とはその名の通り、基本となる魔法の上位に位置する強力な魔法です。まずは、強化の上位魔法である“霊石覚醒”について説明します。霊石覚醒という正式名称よりは“変身”の方が分かりやすいかもしれません。強化と違い、自分の体を別の物に変えることで力を得るという魔法になります。人の体ではできなかったことも簡単に行うことができますが、元の体に戻れなくなるというリスクを孕んでいます。私個人としては禁忌としたい魔法であるのですが、結晶獣と戦うために必要だという見方が一般的です。」

変身。強化の上位魔法。キエンが使っているから、その危険性も十分に理解しているつもりだ。それと同時にその有用性も。結晶獣が存在する限り、危険だからやめようと大きな声で言えない。ただ、濫用は危険である。使用者が死ぬだけならともかく、本当の化け物にでもなって暴れられたら大惨事だ。…まあ普通の人間なら発動すらできないから問題では無いか。自分が人でなくなるイメージなど普通はできるものではない。

「次に干渉の上位魔法である“霊域展開”についてです。これは自身の周囲を自身が望む空間に創りかえる魔法です。発動に必要な情報は、領域の範囲と領域内のルールです。領域の範囲は発動する人間によって大きく異なり、例えばこの講義室の範囲で行うことがで

きるのですら一握りの人間に限られます。そして、その領域に全身が入っているものが対象となり、領域内のルールに従う必要があります。干渉系魔法の上位と呼ばれる所以は、人への干渉が容易であるという点です。実質的には直接干渉にはなりませんが…。」

干渉の上位魔法。俺とハイドが苦戦した、あの膝を固定する魔法はこれだったのではないだろうか。確かに訳の分からないうちに魔法を掛けられていた。干渉が容易というのも頷ける。

「最後は練成の上位魔法である“霊装顕現”です。霊石自体に練成魔法を使うもので、練成する物質の大きさの制限がありません。ただし、使用者が常に触れているという条件があります。一般的に通常の練成よりも高い強度が得られますが、このデメリットのために魔導機械への応用はできません。」

そして霊装。初めは俺の魔法はこれだと思っていたが、特徴が食い違っている上に、他人の魔法が使えることの説明にならない。俺の周りでこれを使えるのはクワルだけかな。

「以上で魔法の種別に関する話は終わりです。何か質問はありますか？」

特に質問はない。だが聞きたいことがある人がいるようだ。何人かの手が上がる。

「先生は先程、禁忌したい魔法と言いながらも変身の魔法の説明をしていましたが、何故私たちに教えてくれたのですか？」

…それは個人の思惑と講師としての立場の違いだと俺は納得して聞いていた。説明でも個人的と一般的というように分けていたし…。でも、先生の返答は別のもので俺はなるほどと思った。

「想像には自らの意思が反映されています。意思とはその人物の経

験や知識から形作られるものですから、人は知らないことを想像することなどできません。だから我々は学ぶのです。誰かの想像を、その根本ごと自分の物とし、新しき想像を創造するために。

今あることの良い点、悪い点を正しく理解することが、次のより良い道を探していくための道標になるはずですからね。要するに、学院生の皆さんは勉強を頑張ってくださいということです。」

実に教師らしいまとめ方だった。

シーナー先生の“魔導機械工学？”

～ディム～

さて、次の講義はまた魔導機械に関するものだ。ノイン先生が言うには、この講義は大型の魔導機械に関する話になるらしい。…それならば、ハイドの隣に座るしかない！　理由は簡単。楽しそうだからだ！

幸いというか案の定というか、ハイドの隣の席は空いている。俺は遠慮なく隣に座る。

「おい、貴様。なぜ普通にそこに座る？　他にも席はあるだろう？」

「くっくっく。ハイドくん、俺が他に座らなきゃいけない理由もないだろう？」

ハイドの冷たい目が俺に向けられる。言い返しても無駄と思ったのか、自分から別の場所へと行こうとした。だが、そうはさせない。わざわざタイミングを見計らってきたんだから。

「どこへ行くんだ？　もう先生来たぞ？」

「…チッ。」

本気で舌打ちをしてる。そんなに嫌がられると…ますます期待してしまう。

「やあ、こんにちはこんばんはおはようございまーす！　魔導機械工学？を担当するシーナーだ！　よろしくぅ！」

「ハイド、ごめん。お前を弄ってる場合じゃないや。」

「奇遇だな。俺も貴様に構ってる場合ではないと思ったところだ。」

なんだろう、この感じ。反面教師を見た時ってこうなるのかな。

今はふざけたら負けな気がする。ノイン先生も魔導機械工学って感

じの人ではなかったけど、これはもっと酷い。喋らなければ研究者って見た目なのに…。

「…疲れた。すまないが、テンションを下げさせてもらう。」

急に声のトーンを落とした。そして発言に抑揚もなく、棒読みのような喋り方になる。とりあえず暑苦しい人ではなく、こちらがこの人の本性だろう。…じゃあ何故最初はあんなのだったんだ!?

「本講義では、魔導機械について学んでもらう。講義?では何も学べていないことを前提に話をするとしよう。」

優しいのか厳しいのかよく分からない人だ。実際、魔導機械の定義から話が始まった。

ノイン先生の講義にあった通り、魔導機械とは練成物質に魔法を記憶させて、魔法に関係のない第三者がその魔法を使用できるものだ。利点は魔法を使えない人間が魔法を使えるということで、欠点は直接霊石を使用した魔法には遠く及ばないこと。

このような魔導機械が生まれたのは今から約４０年前、ベルヴェルクのバウル＝クロイツ博士によって発明された。当時問題となっていたアンクレスタの人口比率の増加が解決できるかもしれないこの技術は瞬く間に広まっていったそうだ。このクロイツ博士というのがクワルの言っていた尊敬する爺さんなのだろう。

欠点である「直接霊石を使用した魔法には遠く及ばない」わけは、前に聞いた通り記憶容量の問題だ。そもそも人の想像であるならば、全てを記憶してある必要はないのだという。切っ掛けとなるイメージから次々と新しいイメージを創り出して魔法になっているのだ。しかし、自ら考えることのない魔導機械はその全てを記憶していなければならない。だから、人が頭の中だけで行えることと同じことを巨大な機械で行う必要がある。

魔導機械と最も相性がいいものは乗り物だ。人が乗ることが前提であり、自然と大型になるため、記憶容量の確保は容易である。また使用する魔法も、車輪を回転させるだけならば容易である。今では車輪を使った乗り物は公共の乗り物では全く見られないが、自作が容易であるため、趣味で乗っている人はまだまだいる。現在はどんな乗り物が主流かと言えば、俺がウィスタリアに来るときに乗った魔導列車などのように宙に浮くものである。ちなみにこのシーナーという先生は世界の各都市を結ぶ魔導列車の開発に携わった人らしい。

「で、ハイド。お前も何か自作する気だろ？」

「…まあな。気軽に使える足が欲しかったからな。」

お前は自前の足で十分だろうと思う。だから多分、というか絶対にこいつの趣味だ。

「魔導機械は物質の練成を行い、練成物質に魔法を書き込むことで完成する。この時書き込める魔法は干渉魔法だけだ。書き込む行為自体も干渉魔法である。他の魔法を書き込めないかは研究段階であるが、できる可能性は低いことは分かっている。」

そういえばハイドは干渉魔法を使用できないはずじゃなかったか？　どうやって自作するんだろ？　やっぱりクワルあたりに頼むのだろうか。

「なあ、干渉魔法が使えないのにどうやって二輪（バイク）魔導機械作る気なんだ？」

「貴様は、魔導機械を普段どこで手に入れている？　それを考えれば答えは出るだろう？」

ふむ。欲しい魔導機械があれば、店で買うよな。…あ、そういうことか。

「つまり、部品を売っている店があるってことか。」
「そういうことだ。…そんなことも知らない貴様のためにレクチャーしてやろうか？」
「…考えとくよ。」
魔導機械について熱く語るハイドには興味はあるが、魔導機械の部品に興味はない。それにハイドが急にフレンドリーになったときは何か俺に不幸が降りかかるジンクスがある。これは危険信号だ。ハイドの話に最後まで耐えきれない俺の未来が見える。遠慮するしかないかもしれない。

レティ先生の“生物・医療”

～ディム～

２日目の講義もこれで終わりだ。もう2日目となると慣れたもので、冷静に講義を受けていられる。初っ端にノイン先生だったのもいい影響を与えているのかもしれない。…もうどんな先生が現れても驚かない自信がある。

ちなみに講義室の移動は無かったが、俺の隣にハイドはいない。今度は俺から逃げ出した。というわけで再び俺は一人で席についている。

講義室の扉が開かれ、騒々しかった室内が静かになる。次の先生が来たようだ。

白衣を着た如何にも研究者な格好だ。燃えるような緋色の長い髪をした女性。白衣の下も研究者らしい煌びやかな緋色の……ドレス？

待ってくれ。全然研究者じゃないぞ、この人。というか見たことあるぞ！？

「早速始めます。テキスト３０ページを開きなさい。」

「テキストなんて指定されてませんよ！　それに何で学院長がここにいるんですか！？」

ついつい起立してツッコんでしまった。俺の指摘に何故か素で驚いている。

「…今のは言いたかっただけです。では改めて自己紹介をしておきましょう。

皆さん、初めまして。“生物”と“医療”の講義を担当するレティといいます。よろしくお願いします。」

「なんで、初めましてなんですか！　既に学院生の前で挨拶してるじゃないか！？　ってか忙しいんじゃないの！？　こんなとこで１回生に教えてる暇とかある人なの！？」

「えーと、そうですね。歳は２４です。まだまだ新米で申し訳ありませんが精一杯頑張ります！」

「年齢なんてどうでもいいですよ！　…思ったよりもお若いんですね、じゃなくて！　なんであなたがここにいるんですか！？」

「えー、そういうこと聞いてくる？　…うん、ちょっとだけ教えちゃおうかな！　ぶっちゃけ今片思い中です！」

「『彼氏はいますか？』なんて聞いてないよ！？」

「…そこの君。とりあえず落ち着いて席に着きなさい。あまり騒ぐと他の人に迷惑になりますよ。」

誰のせいだよ、と思いながら素直に座る。落ち着いて周りを見ると、俺だけが変な目で見られていた。何故なんだ？

冗談はさておき、本当に何故この人がここにいるのかが分からない。学院長が何故、とばかり言っていたが俺が聞きたいことは別にある。ドレイクはどうしたんだ、ということだ。学院長である前に七聖筆頭のはずである。聖域を脅かす危険のあるドレイクを野放しにしている状況で、こんなとこで講義をしている暇があるわけがない。

だが、何かしらの説明も無く、学院長は講義を進めていた。今日はフェアガルテに住む生物についてという話のようだが、最初の方は聞いていなかった。

「我々がフェアガルテと呼んでいるこの大陸には、大きく分けて３種類の生物がいることになります。この類別は犬だとか鳥だとかいう以前の仕分けになります。それぞれが何か説明できる人はいますか？」

珍しく誰も手を挙げなかった。学院長だから発言しにくいという

わけではなく、単純に答えが分からない。

「答えは、人間と動物と結晶獣です。」

「異議ありです学院長…ぐわっ！」

挙手して立ち上がったのはハイド。そのハイドにペンが投げつけられていた。

「レティ先生と呼びなさい、ハイド君。では意見を聞きましょうか。」

呼び方が気に食わなくてペンを投げつけたらしい。ハイドが額を押さえていることから、それなりに威力があったことが窺える。

「…人と動物という分け方と、結晶獣を生物とする理由が分かりません。」

学院長は反論に対し「ご尤も」と言いながら楽しそうにしている。

「この分け方は私独自のものですからね。

まず、人間と動物という分け方をしているのは、意志の有無にあります。従来の生物学でいうのならば、人間も哺乳類となるのでしょうが、魔法を扱う上では人間とそれ以外の動物では全く別の生物と考えた方がいいのです。その理由の一つとして干渉魔法の掛かり方にあります。皆さんは既に干渉魔法は人間に掛けることが難しいという知識を持っているかと思いますが、これが魔法医療の発展の妨げになっているのです。しかし、実は通常の動物での実験は上手くいっています。この違いはどうして生まれるのか。現状では『意志を持つ生物には潜在的に魔法に対し抵抗する本能がある』と考えています。

続いて、結晶獣を生物とする理由ですね。ハイド君が生物とする理由が分からないと言った根拠は、結晶獣が食事を必要としないことや、内臓などの生物としてあるはずの機能が一切ないことにあります。しかし敢えて私は結晶獣を生物とします。それは人間を襲う本能があるから。私は結晶獣が人だけを襲う理由を『意志を喰らう

から』だと考えています。我々とは違う食事をしていると考えれば、あれらも生物ではないでしょうか。」

意志の有無。ということは先月までの俺は人間よりは動物に分類されるのか？　…そんなわけないか。

「ついでに最近発見されたことも教えておきましょう。結晶獣が結晶獣の破片を吸収して巨大化するというものです。これは聖域の外で戦闘をした紅蓮騎士の報告です。結晶獣の死骸といえる破片が一度粉々の粒子になり1体のキーゼル級の結晶獣に集まった後、そのキーゼル級結晶獣はその体積を増していき、フェルズ級結晶獣になったというのです。今まで我々が目にしてきたフェルズ級の結晶獣というものは、こうして結晶獣同士が融合していった結果だと考えられます。同時にこれはマイン級結晶獣が現れないことの説明にもつながるかもしれません。おそらく、複数のフェルズ級が居て初めてマイン級というサイズの結晶獣が生まれるのでしょう。

我々は、結晶獣の融合による巨大化を成長（グロース）と呼ぶことにしました。」

…こんな場で言っていいことなのだろうか。起立したままのハイドの口が開いたまま塞がらないことからも、今の情報は初めて発表されたことが分かる。

成長（グロース）。これが本当だとしたら、コルン級の結晶獣の集団がいたらキーゼル級が生まれてくるということになるじゃないか。コルン級は聖域の外の方では偶に見られてしまうような結晶獣だ。人を殺す力は無く害は無いと思われていたから無視されてきたが、この事実が一般に知られてしまうとパニックになるかもしれない。

こんな事実を俺たちに教えてしまう理由が全く分からなかった。

ルミネの追憶

～ディム～

色々な意味で衝撃的だった学院長の講義が終わった。一つ分かったのは、あの人は意外と説明が下手だということとか。内容は興味あるけど、理解させるための話の順序がおかしい気がする。まあこちらの理解度が分かってないからそんな風に成るのかもしれないが。

さて、今日も約束があることだしさっさと向かうとするか。俺はノートを鞄にしまう。そこで俺は横でじっと俺を見つめる気配に気づいた。最初はキエンかとも思ったが違う。まだ席に座る俺を見下ろしているのは緑色の髪をした小柄な女子。一昨日にクワルが追いかけていった子だったか。俺は座っていて、彼女は立っているのに俺は少し顔を上げるだけで目が合わせられた。

「え、えーと…俺に用？」

偶々そこにいて、偶々俺の方を見ているのかと思ったが、彼女の視線は俺から離れない。声をかけた俺をただ黙って観察し続けている。正直、その視線に耐えられない。

「あ、クワルに用か？　悪いけど、今日は会ってないからどこに行ったかは知らないよ。」

俺は唯一の心当たりを訊いてみた。だが、反応は無い。いや、正確には反応はあったか。ブツブツと何か言っている。

「…彼は関係ない。…君、名前は？」

やっと口を開いてくれたと思ったら、なんか名前を訊かれた。それにしても表情が変わらない子だ。何を思っているのかが全く想像できない。

「ディムだ。で、どうした？　まさか俺とお近づきになりたいとか

そういうこと？」
「…そう。付き合って。」
茶化した発言をそのまま受け止められると、俺はここまで弱くなるのか。何も言い返せずだらだらと汗が流れ出る。しばらく無言のまま時間が流れた。

沈黙を破ったのは彼女の方だった。
「ディム、ついてきて。」
「え？　ちょ！？」
彼女は俺の襟を掴むと、無理やり立たせて俺を引っ張っていく。かなり力が強く、俺は抗うことができない。
「ちょっと待てって！　逃げないからとりあえず離せ！」
俺の抗議は素直に通り、俺は解放される。
「何なんだよ、お前は！　用があるなら先に言え！」

彼女は「分かった」とだけいうと真っ直ぐに俺を見る。表情が不気味なほど変わらないが、俺に対していい感情を持っているとは思えない。周囲を見回して何かを確認してから彼女は俺にやっと話してくれる。
「君、ラゼスと親しいの？」
おっと。まさかラゼスさんの名前が出てくるとは思わなかった。彼女は俺とラゼスさんが知り合いだといつ知ったのだろう？　不意を突かれた俺は「あ、ああ。」とそんな返事しか返せなかった。
「ねえ、あの人ってどんな人？」
「へ？　頼れる人…かな。」
「どこが頼れるの？」
「…そりゃあ強いし、目標もはっきりしてるからね。」
七聖すら一目置く戦闘能力を持ち、俺に行動することの大切さを教えてくれた人だ。俺がここにいることができる切っ掛けになった人でもある。俺はあのようになりたいと思った。

「そう。…残念。」
小声で聞き取りづらかったが、確かにこの少女は残念と言った。
俺は確かに残念な男だが、今言われるのは納得いかない。俺が不満を顔に表していると、彼女はトッテテーと走って行ってしまう。
「あ、ちょっと！　聞くだけ聞いて名乗りすらしないのかよ！」
用は済んだのか聞く耳持たずに行ってしまった。追うことは簡単だが、講義が終わってから結構時間が経ってしまった。
「仕方ない。ラゼスさんとの約束を優先するか。」

「すみません、お待たせしました。」
「いや、僕も今来たところだから気にしなくていいよ。」
約束した場所に俺が行ったときには既にラゼスさんが待っていた。きっと昨日のフェイナよりは待たせただろうに、人間ができてるなあ。まあ、昨日のフェイナはわざとだろうけど。
挨拶もそこそこに俺はラゼスさんを連れて東棟に向かう。初めはニコニコしていたラゼスさんだったが、東棟が近づくにつれて笑みが消えていった。クワルもそうだったことを考えると、東棟には俺の知らない何かがあるのではないかと思ってしまう。一応訊いてみるか。
「どうしました、ラゼスさん。顔色が優れないようですが…」
「ああ、気にすることは無いよ。…ただちょっと会いたくない人がいるだけだから。」
まさかのクワルと共通の理由だった。俺の想像以上に変な人間が集まっている場所なのだろうか。それともクワルとラゼスさんが会いたくない人は同じ人なのだろうか。

俺はラゼスさんを連れて、昨日訪れたアルカナム研究室に来た。表札を見たラゼスさんは首を横に振りながらため息をついている。

そういえば今まで気にしてなかったけど、ラゼスさんとルミネは知った仲なのか。だとしたら、今のラゼスさんは昨日の俺と似た状況になってしまったのか。…今更ながら悪いことしたかなと思う。でも、俺にはラゼスさんの助けがいるのだ。

「失礼します。昨日言ってた通り、連れてきましたよ！」

「待ってました♪」

部屋の中には昨日出ていった時と同じメンツ、フェイナとルミネがいた。フェイナは昨日のことから立ち直ったのか、とても楽しそうに迎えてくれる。…反面、ルミネはとても不機嫌そうだった。その視線は俺の背後に向けられている。

「ディムに連れてこられたのが、まさか天才ルミネ嬢の研究室だとはね。」

「あら、そういうあなたは周囲の期待から逃げ出したニワトリさんじゃありませんこと？」

「君、喧嘩売ってるよね？」

「そうですわね。いつも通り、スマイルと同じ値段で売ってあげますわ！」

ルミネもラゼスさんも険悪な雰囲気を隠そうともしない。両者の視線の衝突で卵が焼けそうだ。俺は引き合わせてはいけない2人を会わせてしまったのか。

「ストーップ！　喧嘩はダメです！」

一触即発な2人だったが、フェイナの仲裁で矛を収める。何故か右手にフライパンを、左手に卵を持っているが、ここはスルーしておこう。どこから出したかとか、お前も同じこと思ったのかとか言いたいことはあるけれども、話が進まない。…そういえば、フェイナはラゼスさんには尻込みしないんだな。

「まあいいですわ。で、ディムくん。この男が仲間にしたい人とやらですの？」

「はい。」

ってそういえばラゼスさんの了承を得てなかった。何で俺は確認してなかったんだ!?　これだけ険悪な仲だったらおそらくは無理だ。しかし、俺の心配を余所に、ルミネは例の書類をラゼスさんに渡し、ラゼスさんは渋々ながらサインをしていた。

「書類は受け取りました。後はわたくしの方で処理しておきますので、紅蓮騎士の方はもうお帰りになっても結構です。用事があればこちらから呼びますので…。」

「じゃあ、お言葉に甘えて帰らせてもらうよ。」

ラゼスさんはサインだけしたらさっさと退室してしまった。俺も当事者のはずなのに目の前の展開についていけない。

「あ、あのー…結局どうなったんですか?」

責任者であるルミネに確認する。

「あら?　これがあなたの望んだ結果でしょう?　良かったですわね、黒のクレスタを仲間にできて。」

棘がある言い方だがルミネはラゼスさんを仲間として認めてくれたようだ。確かに俺の望みどおりなのだが、本当にこれで良かったのか不安になる。

「今日はもういいから帰りなさい。いいですわね?」

「え?　どうし…」

「い・い・で・す・わ・ね!」

有無を言わせぬ迫力で封殺された俺はすごすごと退散する。ラゼスさんを連れてきたのは失敗だったか。ここまで本気で怒るルミネを俺は初めて見たのだった。

～ルミネ～

どうしてディムがあの男を連れてくる可能性を考えなかったのだろう。昨日、ディムが仲間にしたい人間がいると言っていたのを聞

いて、障害物競走で見せたチームワーク（？）もあり、わたくしはハイド＝ロベインだと思い込んでいた。

「ねえ。ルミネってラゼスくんと仲が悪かったの？」

不機嫌に見せているわたくしを怖がってか、目を合わせないようにしてフェイナが訊いてくる。その時にコーヒーを入れてくるところが、この子の気が利くところだ。これでどうして人付き合いが苦手なのか分からない。

「別に仲が悪いわけではありませんわ。良いわけでもないだけです。」

わたくしはコーヒーを受け取りつつ言葉を返す。その言葉に嘘は無い。わたくしは心の底から彼を嫌っているわけでもない。ただ、わたくしは彼を認めたくないのだ。

彼…ラゼス＝ハイヤーンは人に名乗る時、必ず「ラゼス」とだけ名乗る。自分からは決してフルネームを言おうとしないのだ。家のことを嫌っているのだということは何となく察しが付く。しかし、仮にもハイヤーンの家のものだ。それには責任が付き纏っている。わたくしがアルカナム家だということと同様に…。

わたくしも2年前まで、アルカナムという家名で苦しんできた。命の危険に晒されてきたこともある。でも、わたくしは人々に求められた。アルカナムの人間として立っていて欲しいと。その名を頼りにしている人たちがいて、わたくしにしか出来ないことを求められた。わたくしは辛いながらもそれに応えたのだ。

そんなわたくしから見れば、彼は責任から逃げ出した臆病者だ。騎士として多大な戦果を挙げている彼だが、わたくしは彼を何一つ信用していない。利口ぶって、誰もが認める実績を残す彼が、彼自身が作りだしている虚像のような気がした。醜い実像を隠すための…。

あと、自分を卑下した発言も気に入らない。何が「魔法は苦手」

だ！　本当に魔法が苦手な人はフェルズ級結晶獣と戦うことなどできやしない。暗に彼はわたくしたち、普通のクレスタを侮辱している。わたくしに対する呼び方は大体「天才様」か「ルミネ嬢」だ。思い出したら腹が立ってきた。

…でも、嫌ってない。理由は、今わたくしの隣で首を傾げている少女にある。この極度の人見知りであるフェイナが、ラゼスを全く怖がらないのだ。フェイナの人を見る目は確かだと、わたくしは思っている。わたくしに見せる姿が彼の全てならば、フェイナが怖がるはずだ。昨日のクワル＝クロイツのように。

「そういえばフェイナ。あなたにしては珍しく、今日は普通に話してましたわね。あの男とそんなに関わりがあったかしら？」

「ラゼスくんのこと？　…私が会ったのは2回目かな。」

「へえ。尚更珍しいじゃない。これも進歩ってことかしら。」

あの男だということだけは気に食わないが、フェイナの人見知りを治すのに一役買ってくれたことになるのか。じゃあ、感謝しないといけないかもしれない。ディムにも。

「だって、ルミネは本当はラゼスくんを信頼してるもん。だから私も信頼するんだ。友達だからね。」

わたくしは口にしていたコーヒーを吹き出し、ゴホッゴホッと咳をする。一体どこからそう発想した？　それでは卵が先か鶏が先かという話になるではないか。

「ルミネはいつも頑張ってた。負けたくない人がいるって。口は悪かったけど、そのときのルミネは楽しそうに見えたから、悪い人なわけない。」

…否定したい。

確かにわたくしはアルカナム家の長女として、恥ずかしくない成績が欲しかった。努力の結果、天才と呼ばれるくらいになった。で

も、あの男の名の前では霞んでしまう。わたくしは色々できるが、他の人でもできることしかできない。あの男は誰にでもできることじゃないことができる、そういう一つを持っている。自分ができることを見据えて、活躍できる彼を羨ましく思う。わたくしはそんなあの男の背中を追ってきたのかもしれない。わたくしにできることで…。

あれ？　もしかして否定できない！？

「いいよね、ライバルって。私にはいないから羨ましいな。」

わたくしとラゼスはライバルという一言で言える関係ではないことだけは言える。でもわたくしは遠い目をしているフェイナに対して何も言えなくなった。

フェイナは特別な子だ。召霊しか使えないために、クレスタともアンクレスタとも言えない立場。何よりも極度の人見知りだ。今まで話した人間の数は知れているだろう。それで競い合う友人がいたとは思えない。…わたくしは、フェイナにとってのそういう存在にはなれないから。

わたくしがフェイナに会ったのは、ここに入学したちょっと後だ。

～ルミネ（2年前、聖暦221年）～

わたくしにとって、周囲の人間は“敵”だった。わたくしが敵にしたわけじゃない。ただ、周囲からの視線には敵意があった。彼らがわたくしを見る目はまるで、犯罪者を見るそれであった。彼らにとっては本当にそうだったのかもしれない。わたくしはアルカナムの娘だったから。

自然とわたくしは孤立した。歳の近い人はわたくしに近づくリスクを恐れていたのだ。わたくしの周りはわたくしを利用しようとす

る大人たちばかり。どれも理由は分かるから表向きは嫌な顔をしていなかった。けれど偶に全てが嫌になり、姿を消して空を飛びまわっていた。

ある日、いつものように杖に乗って飛んでいたわたくしに近づいてくる一羽の鳥がいた。４つの翼がある鳥。その鳥は隠蔽魔法（ステルス）をかけているにも関わらず近寄ってきた。偶然かとも思い避けてみるが、その鳥はわたくしの方に方向を変え杖の先端にとまった。クリクリっとした目がわたくしを見つめている。

「どうしましたの？　と言っても伝わらないでしょうけど。」

見るからに怪しい鳥であるが、つい声をかけてしまった。日々の疲れが溜まっていたからかもしれない。こんな鳥でも、自分のことをアルカナムの娘として見ない存在にわたくしは癒されていた。

わたくしの声に反応した鳥はもう一度飛び立ち、眼下に広がる森林へと降りていく。聖域の範囲ギリギリにある人の手が加わっていない森。誰も近寄らない場所だからこんな鳥もいるのだろうか。なんとなく気になってしまったわたくしは、鳥に続いて森の中へと入って行った。

鳥が下りて行った先は開けた場所で、池があった。池の水はとても澄んでいて底がはっきりと見える。池の中央には水底から一本の大きな木が生えていた。鳥はその大木の根元へと向かっていく。

「あら？　何かしら？」

木々と池がつくりだす緑と青の空間に、周囲から明らかに浮いている桃色の何かが根元にあった。近づいていくにつれて、それが人の髪の毛であることが分かる。着物を着た女の子が大木の根の上で寝ていたのだ。鳥が少女にとまると、少女はゆっくりと起き上がる。

「ミリィ、どうしたの？」

眠そうに目をこすっている。まだ日が落ちてもいないのに、気楽なものだ。ただ、一つ気になることがあった。どうしてこの少女は

こんな聖域の端にいるのだろう、と。わたくしは彼女を見たまま考え込んでいた。すると彼女は何かに気付いたのか、飛び起きて大木の裏に隠れてしまった。

大木の裏？　誰から見て？

あの鳥だけでなく、この少女にもわたくしのステルスが見破られていたということか。わたくしはステルスを解いて少女のいる場所へと向かう。

「隠れていてごめんなさい。でも、あなたって凄いですのね。このわたくしのステルスを見破るなんて。…わたくしはルミネセンス＝アルカナム。あなたのお名前は？」

わたくしが声をかけると、少女はビクッとした後、震えていた。そうだった。疑問や興味が表に出てきていて忘れていたが、わたくしはアルカナムの娘なのだ。これが正しい反応だ。これ以上この子に関わるのも迷惑なだけだろう。わたくしは震えている少女をそのままにして立ち去ろうとした。

「フェ…フェイナ、です。」

その声は震えていた。わたくしは少女の方をもう一度見る。すると先ほど震えていた声とは裏腹に、彼女の蒼い目は真っ直ぐにわたくしを見つめていた。目と目を合わせようとはしなかったけれど…。

「わ、私と…」

わたくしはただ黙って彼女が言い切るのを待っていた。

「友達になってください！」

その言葉は不意打ちだった。帝国貴族の娘であるわたくしに近寄ってくるのは、利用したいということが見え見えの連中ばかり。父

が投獄されてからは、そういった連中も巻き込まれることを恐れ、皆離れていった。気付けばわたくしはこの学院で独り。同級生との事務的な会話と、父の側近という者たちとの密談くらいしかしていない。

友達。今のわたくしにそんな言葉がかけられるとは思っていなかった。

「…あなたは知らないのかもしれませんが、今のわたくしの立場は危険なものですわ。必要以上に近寄るとあなたも危険な目に遭うかもしれません。ですから、やめておきなさい。」

わたくしは嬉しかった本心を隠し、世間を知らないであろう少女を突き放しておく。言葉を聞いたフェイナの目には涙が浮かんでいた。でも、これでいい。

しかしフェイナは目から涙を拭うと、池の水をチャプチャプと鳴らしながらこちらに寄って来る。池の深さはかなり浅いもののようだ。歩む足には力がある。

「立場なんて関係ない！　私はあなたと友達になりたいの！　一人は嫌なんです！！」

彼女が叫ぶ「一人は嫌」という言葉に、わたくしは衝撃を受けた。この少女は多分ここで一人で過ごしているのだろう。だから出てきた言葉のはずだ。…でもわたくしには別の意味がある気がした。「あなたと」と言った彼女には、わたくしが一人なのが嫌だという意図があると思ってしまったのだ。

「何も知らないのに、勝手なことを言わないで！」

つい大声を出してしまった。こんな声を出すのは久しく無かったと思う。わたくしはこの時「何も知らない」と言ったけれど、もしかしたらフェイナの方がわたくしのことを分かっていたのかもしれない。

わたくしが怒鳴った後、フェイナは最初に寝ていた大木の根の方へと歩いていく。怒鳴ったわたくしに怖くなって逃げたのかと思ったが、その足取りに急ぐ様子は見られない。根の隙間から何かを取り出すと再びわたくしのところまで戻ってきた。

「食べる？　甘いよ。」

持ってきた物は果物。あまり見ないものだから名前は知らない。この辺りに自生しているものだろうか。フェイナはそれを二つに割ると片方をわたくしに差し出す。

「私、皆と違うし、それにバカだからよく分からないけど、これだけは知ってる。誰だって美味しいものを食べたら幸せだって。一緒に食べよ？」

わたくしは差し出された果物を受け取り、一口かじる。甘かった。美味しかった。それだけで、昂ぶっていた心が落ち着き、何故か涙が出ていた。

「私、ルミネのこと知らない。だから教えて？　私も私のこと教えるから。」

その日、わたくしはただの子供になっていた。

～ルミネ～

2年前のあの日から、わたくしはフェイナの元に通っていた。あの場所でだけ…いえ、フェイナの前でだけわたくしは素の自分になれた。わたくしの心が折れなかったのは彼女がいたからに他ならない。

でも、わたくしはフェイナの弱さに気付いてあげられなかった。学院生として忙しくなるにつれ、フェイナのところへ行く頻度が減

った。父が解放されてアルカナム家の汚名が晴らされてから、周囲のわたくしの扱いが変わっていたことも理由かもしれない。

そして、先月のあの事件…氷結の雨が発生した。直接的な原因はドレイク。しかし、わたくしの責任でもある。わたくしは結局自分のことしか見ていなかった。フェイナのことを見ていれば、未然に防げたかもしれないのに。あの事件で誰も死ななくて本当に良かった。もし、誰かが死んでいればフェイナは自分を責めるだろう。わたくしは本当にディムに感謝している。彼がいなければ、今のわたくしたちはいないのだ。

もう間違えたくはない。先日、フェイナが「ディムと一緒に何か活動したい」と言ってきたとき、これはチャンスだと思った。幸いにもわたくしには自由に使えるこの研究室が与えられている。活動は何でもいい。わたくしの傍にフェイナが居さえすれば、あのような事件は防ぐことができるはずだ。

だから、わたくしはディムの要求も素直に呑んだ。ハイドならばいいだろうという予想もあったが、これもディムが居てくれさえすればいい。そうして連れてこられたのは、ラゼス＝ハイヤーンだった。わたくしは渋々ながら、研究室のメンバーとして認める書類をラゼスに渡した。

個人的には気に入らないのだが、断る明確な理由もない。ディムもフェイナも信頼している。ただ一つだけ気がかりなことは、彼が七聖と親しい間柄だと言うことだろうか。ドレイクの仲間ではないとは思っているが、味方だと安心していい相手ではない。何度も言うが、責任を背負わぬ男を信用する気はないのだ。フェイナに牙を向くならば、遠慮なく撃つ。

特別演習

～ディム～

昨日は色々と上手くいかなかった気がする。結果的には、ルミネの研究室の集まりにラゼスさんを加えることはできた。これから来るであろうドレイクの攻撃に対抗するのにルミネとラゼスさんがいることは心強い。ただ、頼りにしている2人の仲が悪いことは知らなかった。…と言っても実は仲良かったりしないかな。表向きには嫌って見せているけれど…以下略みたいな。そうでないと昨日、手続きがスムーズにいってた理由が俺には説明できない。あの2人のことだから俺には考え付かない理由があるかもしれないが。

ちなみに昨日もクワルに会えなかった。ハイドが言うには昨日はどこかに泊まってくると連絡があったそうだ。ラゼスさんについて聞いてきた女の子について聞きたかったのだが会えなかったものはしょうがない。

「おはようございます、ディム様。」

「ああ、おはよう、レン。」

こうして朝起きてからレンと挨拶を交わすのも慣れた。まだ一週間も経っていないというのにな。俺はいつも通り朝食を摂りながらレンの言葉を聞く。

「本日は特別演習の予定になっております。」

「ん？　特別演習？　今日は騎士団候補生と魔導技師候補生に分かれての演習じゃないのか？」

「仰るとおりですが、文字通りディム様には特別に演習が用意されております。詳しくは学院長がお話になるので、本日はまず学院長室へ行ってください。」

学院長が直接俺に…。ということはドレイク絡みで何かがあると

見ていいのだろうか。丁度いい機会だし、俺の聞きたいことも全て訊いてみるか。

というわけで、俺は今学院長室の前に来ている。ここに来て俺が会ったことがあるのは、あの秘書の男だけだ。今日は向こうから呼んだわけだし、学院長がいるはずだ。

「はい。どちら様で？」

ノックをして出てきたのは秘書の男。扉を開けた先に俺がいるのを見て首を傾げている。

「ディムくんじゃないですか？　どうしました？　もう候補生の演習が始まる頃ですよ。」

なん…だと！？　俺がここに来ることは予定になかったというのか？

「いや、学院長が俺を呼んでると聞いているのですが…」

「…チッ、確認してきます。」

今一瞬舌打ちが聞こえてきたのは気のせいだろうか。一旦引っ込んだ男はすぐに出てくる。

「会うそうです。どうぞ中へ。」

俺は中へ案内される。と同時に何故か男は入れ替わりに外へ出て行った。

「突然呼び出してごめんなさいね。そろそろあなたとはじっくりと話をする必要があると思ったのよ。」

緋色ずくめの女性、スカーレット学院長がそこにいた。良かった、今日は普通に話せそうだ。

俺から訊きたいことはたくさんある。

俺を推薦した理由。

ドレイクやその背後の敵について。
ティフェレンについて。
俺とフェイナの今後の扱いについて。

「じゃあ、俺から訊いてもいいですか？　どうして俺をここに入れようと思ったんです？」
俺が真っ先にした質問は、これからのことでなく、これまでのこと。つまり過去の話だ。だが、どうしても気になっている。聞いたからどうなるかとかは全く分からない。建設的なことではないと思う。でも、この人の口から理由を聞きたかった。
しかし、残念ながら返答は納得できるものではなかった。
「ふふ。こう見えても才能を見る目はあるつもりなの。君だけじゃなくて、2年前にはラゼス君も私が推薦したのよ？」
明確に返答する気はさらさらないということらしい。おそらくどうして俺のことを知っていたのかと聞いても無駄だろう。ちなみにラゼスさんを推薦したのもこの人であるというのはなんとなく分かっていた。あのとき列車でラゼスさんが俺に声をかけてきた本当の理由は、推薦者がスカーレット＝ディストールになっていたからなのだろう。

「それよりも、これからの話をしましょうか。君は自分からここに来てまで知りたかったことがあったじゃない？　ドレイクのことについてとか。」
「何か分かったんですか！？」
「一応はね。君はドラグハート内戦を知ってる？」
正直最近になって耳にした言葉だが、「知っています」と答えた。まるで示し合わせたかのようなタイミングで講義にまで出てきたしな。
「それなら話は早いわね。ドレイクは反乱軍の一員だったの。それで、紺碧騎士に扮していた共犯者たちの素性も分かった。彼らも反

乱軍に所属していた人間だったの。」

何と言うことだ。俺の予想は当たっていたのか。ならば背後にいるのは元反乱軍…現ドラグハート聖竜王国か？

「ただし、安直に旧反乱軍が裏にいるとは考えないでちょうだい。」

「何故です？　そこまで分かってたら…」

「私もあの内戦で反乱に加担していたのよ。同じように色々な場所から反乱軍に加わっていた。各々の思惑はどうだったのかは今となっては分からない。当時は一枚岩だと思っていたし、私が選んだ信頼できると思った実力者たちが今の七聖なの。」

当時の反乱軍とやらは俺が思っていたよりも大規模だったようだ。俺は一括りで考えていたが、当事者にしてみるとそう考えることの方がおかしいのだろう。

「つまりあなたはドレイクを…フェイナを傷つけたあの男を信頼していたということですね。」

「そういうことになるわね。さっき才能を見る目はあるって言ったけど、人を見る目は無かったかもしれない。」

見て分かるぐらい落ち込んでいる。これが実は演技でドレイクの裏にいたのはスカーレットだった、なんてことになるようだったら俺は間違いなく騙される。

「それでどうして俺にそんな話を？　俺はあなたの失態とかに興味は無いのですが。」

「…それはね。最近、君たちで集まって何かしようとしてるでしょ？」

ルミネの研究室での話のことだ。何故知ってるのか、と思ったが書類にして提出してるからバレバレか。

「私はそれを全力で支援しようと思ってる。都合がいいことに君とフェイナさんが同じ場所にいる。そこに学院生でトップクラスの実力があるルミネさんとラゼス君がいる。もしかしたら君にはそういう

う意図があったのかもしれないけど、私はそのチームでいて欲しい。ドレイクらと戦うためにね。」

きっかけはフェイナの発想だった。言い方は悪いが、俺はそれを利用した。自分たちだけでドレイクに立ち向かえる体制を作りたかった。だから戦力としてラゼスさんを加えた。この考えには学院側を信用しきれないという前提がある。学院長がこれを支持するということは…

「学院長も…誰を信用していいのか分かっていないということですね。」

学院長は無言で首肯した。さっきの秘書が部屋から出て行ったのも追い出されたからなのか。それにしても俺たちは一体誰と戦っているのだろう。いることは分かっているのに一向に姿が見えてこない。

「で、具体的に俺たちは何をすればいいのですか？」

「特に何も、かしらね。好き勝手やってくれて構わないわ。君たちにはね。」

現状では動きようがないということだ。だから、俺たちはフェイナの言う「人助け」とやらをすることになりそうだ。…さて、俺個人は何をやらされるんだ？

「失礼いたします。」

このタイミングでノックも無しに入ってきたのは、ティフェレンだった。

「ちょうどレンも来たことだし、場所を移しましょうか。説明はそちらで行いましょう。」

「は、はあ。」

俺はよく分からないままに、学院長についていった。

ここは以前に紫結晶を破壊する試験を行った小闘技場である。俺は今そこに、剣を持って立っている。正面には１０ｍほど離れた場所にティフェレンが向かい合うように立っている。

「あのー、学院長？　本当にレンと戦わなきゃいけないんですか？」

俺がここに連れてこられた理由は簡単だ。実戦に向けた訓練である。確かに今の時間は学院生は実習を行う時間だ。ただ何故俺だけがここでレンと１対１で戦わなきゃいけないのだ！？

その返事は学院長からではなく、正面にいるティフェレンから返ってきた。

「ディム様がドレイクと戦う準備をされているのはワタクシも承知しております。ですが、その準備に一つだけ絶対的に足りないものがございます。それはディム様ご本人の力です。残念ながら、ワタクシの見解では今のディム様ではフェルズ級の結晶獣１体を相手にすることも難しいと言わざるを得ません。それで七聖クラスと戦うなど言語道断。次にドレイクと対峙した際には必ずやディム様が敗北するでしょう。」

ぐさぐさっと言葉が突き刺さる。俺自身も感じていたことだ。だからこそ言い返すことなどできない。でも、難しい。やる気になれば何でもできると思って、事件の後からずっと師範の元で稽古をしていたのに、目に見えた上達はしなかった。

「いや、俺だって頑張ってんだよ？　あれから師範の元でボロボロになるまでやったんだけど、ダメダメさ。」

「いいえ。ワタクシが扱けばディム様のレベルはまだまだ上がります。安心して訓練に臨んでください。」

レンには自信があるようだ。正直、師範よりも強いとは思えないんだけどどうにかなるものなのかな。

「分かったよ。じゃあ始めるか。レン、お前も武器を出せ。」

俺の発言に首を傾げるレン。もしかしてキエンと同じく徒手空拳のスタイルなのだろうか。と思ったらスカートから霊石を取り出して、青色に輝かせた。次の瞬間、俺は目を疑った。

「…お前、本当に何者なんだよ。」

ティフェレンの右手に…いや右肩に担がれているのは刃渡りが3m近くある片刃の大剣だった。どちらかと言えば包丁のような形状だ。レンは自分の身長の2倍以上もある大剣を片手でぶんぶん振り回して見せる。10m離れている俺にまでその風圧が届いていた。

今ほど俺の手元にある剣が頼りなく感じられるときは無いだろう。間違いなく剣同士がぶつかれば剣ごと俺の体が持って行かれる。

驚愕している俺を余所に、ティフェレンの準備はまだ続いていた。左手にもう一つ霊石を取り出して、先ほどと同様の青色の光を放つ。光が収まった後、左手に握られているのは右と同様の大剣。両手に持った状態で構える。その構えに危なっかしさは微塵も無い。

「ディム様。とりあえずご指示の通り、ワタクシの武器を出しました。ですが、このまま始めますとディム様のお命が保障出来ません。それでもよろしいでしょうか？」

「よろしくねえよ！」

俺が言うとレンはすぐに武器を消す。敵に回したら俺の命が無いことは間違いない。この学院には化け物しかいないのか？　今思うと、あの事件の時、どうして俺やルミネたちしかいなかったのかが不思議なくらいだ。

「学院長、俺が戦わなくても世界は平和になるんじゃないですか？」

「あら？　十分平和になってるじゃない。表立って国同士が敵対してるわけでもないし。問題があれば騎士団が動くわ。」

うーん。これは平和の定義の問題か？　少なくとも命が狙われて

いるかもしれない状況は平和ではないと思うけど、今は俺個人の問題か。

「でも、君は自分の…いえ、自分たちの問題を人任せにしたくは無いんでしょ？　だからレンに戦い方を教えてもらいなさい。」

「レティの言うとおりです。ワタクシ個人としては今のディム様を戦わせたくは無いのですが、目を離した隙に自分から危険に首を突っ込むと思われますので、仕方なく教えて差し上げます。」

「…分かりましたよ。お願いします！」

俺は赤い剣を選択して、突きの構えをする。ティフェレンは少なくとも強化と練成が使える戦士系だろう。そして、ハイドより圧倒的に強い。思えば俺はまともな対人の接近戦はハイドとしかやったことがない（師範とはまだ戦いにならない）。

相手は無手。だが、最初から全力でやるしかない。右手を顔の横に。剣は目線と同じ高さで水平に。左手を刀身に這わせ、腰を落とす。思い描くは俺が知る最速の男。音を置き去りにして目標へと飛んでいくのみ。俺は重心が乗っている右足に力を込め、解き放った。

銃声と共に弾丸と化して俺は飛んでいく。今の俺の時間の感覚はとてもゆっくりになる。１０m先のレンが止まっている間に俺の突きを当てるだけの簡単な作業のはずだった。

（レンが…動いてる？）

こちらが飛び出すと同時に、レンもこちらへと向かってきていた。移動する速度は俺の方が速い。でも、俺は最初の行動から途中で変更することができない。俺の剣は、最初にレンがいた場所に向けられたままだ。レンの掌が俺の顔面が通過するであろうコースにそっと差し出される。俺は顔に迫るレンの掌をただ見ていることしかできなかった。

「ガッ！」

俺は顔面を鷲掴みされて急停止した。体だけ慣性で動いていき、

首にかなりの負荷がかかる。そして俺は地面に仰向けに寝かされるように叩きつけられた。もうピクリとも動けない。…完敗だった。

倒れて動けない俺に学院長が近寄ってくる。その手には霊石があり、何かをしようとしていることは分かる。俺は声も出せずにそれを黙って見ていた。

「我が意思を炎に乗せ、譲渡する。彼の意志を力に、我が意思が導くままに、在るべき姿へと還れ。」

俺の体が炎に包まれる。ああ、なんかポカポカとしてて暖かい。これが極楽か…

「って火葬する気か！？」

俺は飛び起きて抗議する。と、ここで気付く。

「あれ？　普通に動ける。それに熱くない。どういうことだ？」

立ち上がった後すぐに俺を包んでいた炎は消えた。

「レティの治癒魔法です、ディム様。」

ティフェレンが説明してくれる。しかし、人の治療は魔法でできないのではなかっただろうか。

「とりあえず、レンの力は分かったでしょ。これから演習の日はレンとここで手合せをするように。いいわね？　それから、レン。もう少し手加減してあげてね。動けなくなったら時間が勿体無いから。」

じゃあね、と告げて学院長は居なくなった。戦闘技術上達の折角の機会だ。確かに時間が勿体無い。今は学院長の魔法については保留にしておこう。

「さあ、ディム様。続きと参りましょうか。次は先程のような無謀な突撃でないことを祈っております。」

さっきのは見事なカウンターだった。一歩で行こうとしたことがそもそもの間違いであったのだ。空中で俺が動けなくなったところ

に掌底を合わせたのだろう。もしかしたら掌底ですらなかったのかもしれないが。

そういえばハイドは俺と戦うときも必ず地に足をつけていた。スピードで圧倒していてもフェイントを織り交ぜてもいた。

（「茶番だ！　何の意味がある！？　所詮は模擬戦だと思っているのか？」）

今になってあのときのハイドの怒りが分かった気がする。あの時の俺は何も知らず、そしてバカだった。

「大丈夫だよ、レン。とりあえず一つは進歩したよ。」

俺は再びレンに立ち向かっていった。

～ｏｕｔｓｉｄｅｒ～

「ええ。とりあえず、ディムくんの特訓を始めましたね。いやぁ、まさか私に何も連絡無しだとは思いませんでしたよ。」

薄暗い廊下の中、黒緑のタキシードを着た男が壁にもたれかかって一人喋っている。その右手には何かが握られていて、それを右耳に押し当てている。魔導機械の通信機。簡単に言ってしまえば電話だ。

「ははは。仰る通り、私は信用されてないですよね。こんなにも献身的な男はそういないのに。旦那もそう思うでしょう？

……

旦那までそんな酷いこと言わないで下さいよ！　え？　少し寡黙になれば信頼される？　んなバカな。

……

ええ。了解です。何かあればご報告します。それでは。」

通信が終わり、クレインは懐に通信機を仕舞う。壁から身を離して今の自分の職場へと向かって歩き出す。

「さて、旦那のためにも頑張っていただきましょうか。ねえ、ディムくん？」

最初の活動

～フェイナ～

「ディム、どうしたの！？」

私はルミネと2人でディムが来るのを待っていた。大体予想通りの時間にやってきた彼の顔は…真っ青だった。

「…い、ゃ…なん……いよ…」

耳では何を言っているのか聞き取れないが、ディムが「いや、なんでもないよ」と言いたいことは私に伝わってきた。でも、少なくとも大丈夫じゃないことだけは分かる。私はすぐにディムに駆け寄って、下から彼の顔を覗き込んだ。

ディムの目を見つめることで映像が流れ込んでくる。

まず見えたのはメイド服姿の女性だった。私はまだ会ったことが無い。ディムは剣を持って相対しているが女性は手に何も持っていない。武器を持たない女性に剣で斬りかかるディム。しかも全力だ。一体これはどういうことだろうか。

ディムの剣が彼女を捉えることは無かった。剣戟は全て空を切り、その度にディムは投げ飛ばされたり、殴り飛ばされたりしている。ただそれの繰り返しだった。

「ぎゃあああああ！！」

「あ！？　ディム、ディムーーー！」

しまった。ディムに何が起きたかを知ろうとするあまり、つい使ってしまった。相手の目を見ることでその記憶を見る私の能力（ちから）。その“人”を知ろうとして使ったわけじゃないから浅い記憶、つまり

は最近の出来事を見ることになる。ただ、これは私が見ている記憶を対象も見ているのだ。相手の精神的外傷（トラウマ）を抉ることもある危険な力である。どうやら、ディムは思い出したくないくらいひどい目に遭ったのだろう。

ディムはそのまま気を失って倒れてしまった。

「どうしよう、ルミネ？」

「とりあえず、ソファーにでも寝かせておきましょう。」

私はロンロンを召喚して、ディムをソファーに運んだ。

「全く…フェイナの顔を見て叫んで気絶するなんて、失礼な男ですわね。フェイナ、気にしてはいけませんわよ。あなたではなくてディムがおかしいだけですから。」

私は、ははは と乾いた笑いだけしておいた。ルミネは知らないと思うけど、私のせいなんだ。

「それにしても、ディムはどうしたのでしょうか。」

「ワタクシがご説明いたしましょう。」

私とルミネ以外から発せられた女性の声。研究室の中にいつのまにかメイドさんがいた。

「あら？　初めて見る顔ですわね。また、お父様が遣したのかしら？」

「いえ。ワタクシはディム様の従者のティフェレンと申します。レンとお呼びください。」

ルミネはさほど驚いていない。深く聞いたことはないけど、いいとこのお嬢様らしい。きっと偶に使用人のような人が現れるのだろう。ただ私はこのメイドさんの顔を見たことがある。先ほどのディムの記憶の中にいた人なのだ。

「あなたがディムをこんな目に遭わせたんですか！？」

言ってから気づく。私の質問には何の脈絡も無い。いつものこと

とはいえ少しは成長しろよ、私。
私の敵意交じりの唐突な質問にも、メイドは表情を崩すことなく至って冷静だった。
「結論から言えば、そうです。ですが、これはディム様のために行った訓練でございます。結果的には身体的に痛めつけることになってしまい、残念です。お二人のご理解をいただきたいと思います。」
突然現れていきなり理解しろと言われても納得する人は何人いるのだろうか。しかし、私にはこのメイドが本心からディムのために行動していることが伝わってくる。
「本来ならば本日はもう動けない状態といえるのですが、ディム様はどうしてもここに来なければならないと仰られていたため、こちらまで連れて参りました。しかしながら、やはり無茶でした。ディム様をお部屋まで連れて行きますが、よろしいでしょうか？」
「え、あ、はい。」
「それでは。失礼いたします。」
女性としては高い身長であるそのメイドは、気を失っているディムを軽々と担ぎ上げ、部屋から出て行った。

「…結局、彼らは何をしに来たのかしら？」
結果だけ見ればそう思うよね。ただ、私は彼が無理をしてここに来た理由を知っている。私が普通の人だったら自意識過剰ともいえる理由だが、彼は私たちに会いに来たのだ。だから彼はルミネと一緒なんだよ。私を一人にしないために頑張ってくれているんだ。私には勿体無いくらいにいい人たちだ。…一方的に相手のことが分かる私はやっぱり卑怯なのかな？

「ディムも帰ってしまったことですし、今日はもう解散にしましょうか？　やることもありませんし…」
解散を告げようとするルミネに、私は右手の人差し指を左右に振りながらチッチッチッと言ってみた。ルミネの頭上に？マークが浮

かぶ。
「やることならあるんです！　…ディムがいないのは残念ですけど…。2人でいいからやりましょう！」
「…だから何をやるんですの？」
ルミネの顔は、「また何も考えずに言っていますの？」と言っていた。いや、考えてないことはないよ！？　ただ偶に口が勝手に動いてただけで……ごめんなさい。でも、今回は違う。
「これです！」
私は懐からあるものを取り出してルミネに見せた。
「…ペン…よね？　それなりに高級そうなものですわね。それがどうかしました？」
ルミネの言うとおり、少し高そうなペンだった。もちろん私のものではない。これは今日、私が廊下で拾ったものである。
「もちろん、落とし主を探します！」
「…はあ。（またメンドクサイことを…）」
ルミネはやれやれといった様子で溜息をついた。というか、「はあ」とはっきり発音した。心の声まで聞こえてきている。
「さあ、早速出発しましょう！」
ここは勢いで行けば大丈夫と思い、私は研究室の扉を開ける。しかしルミネは椅子から立ち上がる気配はない。
「フェイナ、当てがあって出発しようとしてるのですわね？」
「……え？」
「え！？」
お互いが「え？」と言って固まった。こういうのって地道に足で探すしかないんじゃないの？
「しょうがないですわね。わたくしはここで情報を集めますから、フェイナは外で探してきてください。それが誰かの大切なものだとしたら、今も探して回ってるでしょうしね。」
「え？　ルミネは行かないの？」

「わたくしにはわたくしなりの探し方というものがありますの。あなたはそのペンを落とした“人”を助けたいのでしょう？　効率よくやりましょうか。（ごめんなさい。今日は外に出る気分ではありませんの。）」

確かに私は誰かを助けたいと願った。でも、今回は皆と一緒に学院内を歩き回りたいだけだったんだけどな。…今日はディムもいないし、それは諦めよう。ついでにルミネの心の声も聞かなかったことにしよう、うん。

というわけで、私は東棟の入り口に来ている。このまま外に出ていくつもりだったが、入口付近に四つん這いになって何かを捜している人を発見した。

「ま、まずいよぅ！　早く見つけないと、姐さんにどやされる！」

もしかしたら早速当たりなのだろうかと期待する。小柄な人で、見た目だけでは男性か女性かよく分からない。初めて見る人。正直言うと、話しかけるのが怖い。このまま通り過ぎたくなる。

それじゃ何も変わらない。人助けは自分で決めたことだ。自分で言いだしたことだ。ディムとルミネに甘えてばかりではダメなんだ。今正しく目の前の人は困っている。私の持っているもので解決できるかもしれないのだから、自分から踏み込んでいこう。

そう思ったとき、なぜかディムが傍にいてくれる気がした。

「あ、あの…」

「あー、まずいなぁ。ハスターはボクを手伝ってくれそうにないし、誰にも助けを求められない。本当にどうしよう！？」

「あのっ！」

「うわあ！」

独り言の多い人だった。声は高めだけれど、男性。大きな声を出すまで私の存在に気付いていなかったみたいだ。相当焦っていることが分かる。彼から伝わってくる感情も焦り一色だ。

「このペンの持ち主を知らないでしょうか？」

「いや、知らないよ…ってボクにはそんな時間は無いんだよ！」

どうやらハズレらしい。彼は床の上を食い入るような目つきで一心不乱に何かを捜している。彼の心には捜すこと以外に無い。話しかけるなというオーラが出ていた。私は「頑張ってください」とだけ告げて、東棟から出て行った。

続いて私は中央棟へと向かっていた。事務棟と講義棟を合わせたその建物は、一番多く人が出入りしているところだ。だから基本的に私は近寄らないのだけれど…。

建物に入るその前に、庭の木の根元で屈んでいる人を発見した。手入れがまだされていない、長めの雑草が生えている場所を、文字通り草の根を分けて捜している。随分と目立つ見た目だった。服装は騎士を思わせる男性のものであるのに、髪の毛は長く、そして青い。確かディムの友達だったはずだ。名前は…聞いてないや。ディムと話しているところを見たことがあるが、なんとなく怖い人だなと思った記憶がある。

でも、この人がこのペンの持ち主かもしれない。ちょっと怖いけど、私は再び勇気を振り絞って話しかける。

「あのっ！」

すぐに自分のことかと思ってくれたのか、私の方に顔を上げてくれる。

「どうしました？　えーと、フェイナさんでしたね。」

あれ？　思っていた反応と違う。

それに私の名前をちゃんと覚えている。なんか私がこの人の名前を知らないのが恥ずかしい。

「おっと、失礼。まだ名乗っていませんでしたね。私はハイド＝ロベインといいます。フェイナさんのことは…まあ、とある関係で知っていただけです。」

私の小さな困惑を察知してか、彼は自分から名乗ってくれた。思ったより丁寧な人で余計に困惑したので、顔に出さないように必死だった。彼はそんな私を見ている。礼儀正しく、私の目を見ている。

（ごめんなさい！　確認させてください！）

それまで俯いていた私は顔を上げ、彼の目を見返す。目と目が合って流れ込んでくるイメージ。そこにドレイクがいないかをはっきりさせなければいけない。彼もディムの友人だから…。

私に見えた映像は、3日前の障害物競走だった。実は私は見ていなく、後でルミネから結果だけ聞いた。ディムとハイドくんが2人で協力してクリアしていく。2人ともとても楽しそうだ。私も混ざりたいくらいに…。

順調だったその競争。しかし、駅に到着したところで問題が発生した。

（「ディム……財布…落としたみたいだ。」）

「まだ見つからないんだよおおお！！」

ハイドくんの絶叫と共に映像が途切れた。彼は無意識に叫んだためか、自分でビックリしていた。彼が3日の間、どうやって過ごしてきたのか気になるが、これ以上の詮索は彼の心を傷つけそうだ。とりあえず、ハイドくんにドレイクが近づいていないことは確認できたから良しとしよう。…ついでに彼の捜し物が何かも分かっちゃった…。

「…すみません。ちょっと動揺して。ところで、私に用事があったのではないですか？」

「あ、はい。このペンの持ち主に心当たりありませんか？」

持ち主でなくとも、持ち主を知っているかもしれないと思って訊いてみる。しかし彼は首を横に振った。
「残念ながら知りません。もしかして、それは拾いものですか？」
「はい、そうです。」
「（拾ったものを持ち主に届けるとは立派だ。でも、一人一人訊いてても埒が明かないな。普通は見つからない。）では事務棟に届けた方がいいでしょう。学院内で大切なものを落としたら、まずは誰もが寄る場所ですから。」
「ありがとうございます。それでは失礼しますね。財布が見つかるよう祈ってます。」
「はい。…ん？　…んー、いつの間にか口走ってたか…。」

ハイドくんと別れてから私は中央棟、事務受付にまで来た。そこには先客が一人。白髪が目立つお爺さんだった。確か歴史を教えてたゴートン先生だ。受付の人との会話が聞こえてくる。
「じゃから、わしの落し物がここに来とらんかと訊いておる！」
「いや、まずは何を落としたのか言ってもらえませんと対応できませんよ。」
丁度落し物を捜しているようだ。先生の持ち物と言われると、このペンの立派さも納得できる。
「わしが落としたもの…か。」
何故か顎に手を当てて黙っているお爺さん。急に黙ってしまって受付の人も困っているのが伝わって来る。対するお爺さんからは何も伝わってこない。無心だ。…って本当に考えているの？
「そうじゃな……わしは夢をどこに落としてきたのじゃろうか。知っていたら教えてくれんかのう？」
「えええええ！　知りませんよ！」
いや、そんなこと誰も知らないと思う。受付の人も困ってる。
「えと……。やっぱり無理ぃ！」

この中に入っていける気がしなかった私は、逃げるようにして一度外に出た。

「はあ。なんか今日は疲れるなぁ。」

重い溜息をつく。普段より活動していない方だと言えるのに、肩に何かが重く圧し掛かっているようだった。私は中央棟の入り口傍にある階段に腰かけて休んでいる。

「どうかしたのか？　我が主よ。」

「あ、ソウル。実は…」

いつの間にか私の傍にまでソウルが来ていた。相変わらず声を掛けられるまで気付かない。こんな大きな体でどうやって忍んでいるのだろうか。そういえば私のことを主と呼ぶこの友達のことを私は良く知らないんだよね。でも、辛いときにどこからか現れて話し相手になってくれる優しい人…違った、犬だった。

私は手にしているペンのことについて簡単に説明した。

「ふむ。そのようなことなら我の出番ではないか。どれ？」

話を聞いたソウルはその鼻先を私の持つペンに近づける。そうか、普段会話してたから忘れてたけど、ソウルは犬だもんね。ということは臭いで持ち主が分かるってことか。

2、3回嗅いだかと思うと、ソウルは居住区の方向を向く。どうやら見つかったようだ。ソウルが屈んだので、私はその背中に飛び乗る。ソウルの静かすぎる足が居住区へと向かった。

ソウルがやってきた場所は学院の男子寮だった。私がこのペンを拾ったのも学院なのだから、学院生だろうなとは思っていた。

「主よ。すまないが、ここからは一人で行ってくれ。」

ソウルの巨体は建物の中に入ることはできない。それに知らない人が見たらビックリしてしまう。元々ソウルの助けが無くてもやる

つもりだったのだ。
（頑張れ、私！）
心の中で喝を入れ、私はソウルから飛び降りる。目的の場所を聞いてから私はそこに向かった。

（ここですね。）
入り口にあるプレートには2人ほど名前が書いてある。ケインという人とロロットという人の部屋らしい。とりあえずノックをした。
「…はい、ロロットです。どちら様ですか？」
「突然押しかけてすみません。私はフェイナっていいます。ロロットさんかケインさんのどちらかの方がこのペンを落としたと思うのですが…」
扉がガチャっと開く。中から出てきた人は、私の手にあるペンを見るなり表情を明るくした。
「あ、ありがとうございます！　もう見つからないかと思っていました。わざわざ届けていただいてありがとうございます。それにしても良く僕のものだと分かりましたね！？」
私は「ははは」と乾いた笑いだけ返しておいた。別にソウルのことは、能力のことと違って隠していることではないけれど、なんとなく説明しづらい。彼の言った内容は彼の疑問ではあるが、私への質問ではないようだ。彼は私から受け取ったペンを大事そうに胸ポケットにしまった。
「大事なものだったんですね？」
「ええ。昔、大切だった人からもらった、大切なものなんです。」
そう話す彼の顔は、楽しそうにも悲しそうにも見えた。大切だったということは、その人は…。間違ってもそんな過去を覗いては…、思い出させてはいけないと思った私は、咄嗟に顔を下に向けた。
「…未練、なんですかね。こんなものに縋（すが）っている僕は、周りから見ればひどく滑稽でしょう。」
「違いますっ！」

私は下を向いたまま声を張り上げた。自嘲している彼を否定したかった。

「誰かとの繋がりを大切にすることが滑稽なわけがありませんっ！」

ペンを大事にする彼は、そのペンを通して、いなくなってしまった大切な人を大事にしているのだ。ペン自体は物。でも、そこには大切な人の記憶があるはず。…私から見れば、ひどく羨ましいものだ。私に無いものを持っているくせに、それを自分で嘲ることが許せなかった。

彼のために言った言葉ではなかったが、私の言葉を聞いた彼の頬から滴が落ちた。

「そう、ですよね。僕が貶めてはいけない。当たり前のことですよね。…でもそう言っていただけたのはあなたが初めてです。ありがとう。」

涙ぐんだ声。彼の中で何かが吹っ切れた、そんな感情が伝わってくる。

良かった。今日、私がしたことは人助けになったんだ。

（私にもこれから、大切な人、大切な記憶、できるかな。）

目標を遂げた私は、嬉しい気分のまま、この日を終えた。

～ｏｕｔｓｉｄｅｒ～

薄暗い場所。そこは意外に広い部屋であり、辺りには多くのガラ

クタが積まれている。ガラクタは全て練成で造られたもの。様々な形状をしており、それ単体では何の意味も無いもの。このような部品を組み上げることで魔導機械（マキア）が完成する。ここは魔導機械の開発を行う研究室だ。

部屋の中央はガラクタが片付けられ（隅に寄せられて）おり、大きな作業机が鎮座している。その机の上には複数の小型の魔導機械が置いてあり、机の周囲には3人の人がいる。一人は女性、他2人は長身の男と小柄な男だ。

「これだけかい？　ラス、てめえはオレを舐めてるのか？」

「い、いやそんなことは！　別の意味でなら舐めたいけど…」

「ほほーう、死にたいようだね。」

「ご、ごめんなさーい！　頑張ったんですが、全然見つかりませんでしたぁ！」

小柄な男、ラスティはリーダーである女性、サマリクに対して必死に謝っている。そんなラスティに構うことなく、サマリクは机上の小型魔導機械に目を向けている。

「ハス。こいつを設置した人間は見つかったかい？」

「残念ながらまだ犯人の特定はできておりません、お嬢様。私の成果としましては、ここ研究棟以外にも撮影機（カメラ）が仕掛けてあったものを発見したことでしょうか。撤去はしておりませんが、こちらの地図に場所を記しておきました。」

長身の男、ハスターがサマリクに地図を渡す。

「…えらく広い範囲に仕掛けてやがるねえ。ってこたあ、研究棟の情報が目的じゃねえのか。」

「おそらくは。我らへの脅威と考える必要はないでしょう。」

サマリクは地図を折りたたんでハスターに投げると、小型魔導機械…カメラを一つ拾い上げる。

「十分脅威だっての。ったく、こんな小型でどうやって記憶（コマンド）しやがったってんだ？」

サマリクの機嫌は最悪だった。技術を盗みに来たと思われた謎の人物は、実際は自分たちのことなど眼中になかったことが分かったからだ。事実、今の彼女では真似できない。ハスターもラスティも何も言えずにただ彼女の怒りが治まるのを待っていることしかできない。

コンコン。

そんなときに来客を知らせるノックが部屋中に響いた。

～ルミネ～

「失礼しますわ。」

部屋に入ると、３人の男女の目が一斉にわたくしに向けられる。その表情は三者三様。女性は睨みつけてくるし、長身の男性はやれやれと呆れ顔、小柄な男性は驚愕といった具合だ。

わたくしがここ、オーラライト研究室に顔を出した理由は一つ。わたくしの研究室入り口に仕掛けられていたものについて訊くためである。この部屋の主、サマリクはわたくしが見つけたものと同じものを手にしていた。

「サマリクさん。わたくしの部屋の前にこんなものがあったのですけれど、心当たりはありますでしょうか？　随分と小型ですけれど、これはカメラですわね？」

わたくしはサマリクが持っているものと同じものを見せながら、訊いてみる。既に彼女の手にもあるのだから心当たりが無いわけがないのだが、わざとそう言ってやった。この魔導機械、誰でも用意

できる代物ではない。現在、この学院にいる魔導技師（マキアータ）でこれが造れるとしたら、真っ先に上がる名前が彼女たちだ。

しかし、どうも様子がおかしい。彼女らが悪事が見つかった悪党には見えない。わたくしにも達成感がまるでない。

「アルカナム様、それは私どもの作品ではありません。正直にいいますと、造れないのです。この部屋にあるカメラは、そこにいるラスティが東棟の中を探し回って見つけたものです。」

サマリクの代わりに隣の長身の男、確か名前はハスターだったか、が説明をする。どこまでが真実か知らないが、このチームでも造れないものを造るものたちがいるということは脅威だ。というよりも身内以外ということが一番大きな問題か。カメラということは設置した者は情報を集めている。何処の誰が、何を知りたがっている？

わたくしの脳裏に浮かぶ最悪のケース。それは、フェイナを狙うドレイクの一味であるということだ。

「そうだ。実は東棟以外の場所でもいくつか見つけまして、まだ撤去はしていないのですが、場所をチェックしておきました。こちらの地図をご覧ください。」

わたくしはハスターから地図を受け取る。その地図は学院の至る所に印が打ってある。また、それは学院の外にもあり、中央広場、そして居住区にもあった。男子寮の方にまでチェックがしてある。ご丁寧に各建物の地図までである。そしてわたくしは男子寮の地図を確認しているときにあることに気付いた。

「…疑ってしまい、申し訳ありませんでした。失礼しましたわ。」

わたくしは地図をハスターに返してすぐに部屋から出て行った。

彼から見せられた地図。そこに記されたカメラの位置から、設置

したものの思惑が分かった気がしたのだ。まだ確信はしていないから黙って出てきたのだけれど。

「もしかして狙われているのは、あの男？」

真夜中の広場

～ディム～

ここは…俺の部屋か。いつの間に俺は戻ってきたのだろう。いつもの朝と違うところと言えば、部屋の中が暗いということか。２段ベッドの傍の窓から差し込む月の淡い光だけが、この部屋の光源となっている。時間にして、深夜だと分かる。

もう一眠りしようとも思ったが、妙に目が冴えていて落ち着かない。眠れない俺は音をたてないように気をつけてベッドから降りる。案の定、隣のベッドの下段にはハイドが眠っていた。この男の寝る姿を俺は初めて見た。そういえば、俺はハイドより早く寝て、遅く起きてるのか。だから何だと思うが。

俺のベッドの上段を見てみるが、そこには誰も寝ていない。ハイドの上段に至っては布団すら存在しない。

（クワルのやつ…今日も帰ってこないのか。）

２日前にルミネの研究室前で別れて以来、言葉を交わしていない。おそらく俺からクワルに話に行ったら、クワルは普段通りに言葉を返してくれるだろう。けど、それだけだ。避けられていることは間違いない。

（「多分、おいらがいたら上手くいかないんだ。」）

クワルはあのときそう言っていた。フェイナのことを気にして、俺に近寄らないようにしているのか？　クワルはお人好しだからな。

…違う。クワルがそんな理由で俺を避けるわけない。

（「力が無いなんてのは全て終わった後で言え！　関わる権利なんてのは誰にでもあって、誰にだってない！　そんなことに権利なんて言葉はいらないんだよ！」）

そう俺に言ってくれたクワルが、フェイナに怖がられているとい

うだけで諦めることがおかしいんだ。俺の知ってるクワルが、俺を避ける理由…、クワルに何か危険が迫っているのかもしれない。クワルのことだ。俺たちを巻き込まないようにと考えていることは想像に難くない。

そう結論付けた俺は、外へと出た。学院生活が始まってから俺は、ドレイクの手が伸びていないか常に気を張っていた。その結果、問題は無さそうであると思っていた。だが今では何かを見落としている気がしてならない。

寮の外に出ると、月明かりだけが道を照らしていた。静かすぎる街。街灯も完全に消えている。嫌な空気だった。俺は前にも似たような状況に立ち会った気がする。

そうだ。あれは、氷結の雨の日の朝だ。今と違って既に日が昇った朝だったが、今みたいに誰も人がいない感じだった。俺はなんとなく中央広場へと歩いて行くことにした。

道中、誰にも出会わなかった。時間が時間だから当然か。でも、それが俺を理由なく不安にさせる。いつしか俺は、キョロキョロと周囲を窺いながら、こっそりと歩く不審者になっていた。

中央広場が近づいてくると、さすがに無音ではなくなってくる。巨大な噴水の水音が響いているからだ。俺は忍び足のまま、移動する。すると水音に紛れて、微かに人の声が聞こえてきた。俺は物陰に隠れながら近づいて行った。

「…ですか。……は無さそうですね。」
「はい。……については……もよろしいかと。」
「分かりました。引き続き調査をお願いします。」

2人の男が何か話している。内容は良く聞き取れないが、どうやら話は終わったようだ。男の内の一人が俺が来た道の方へと歩いて

行った。去って行った男の顔は暗くて良く分からなかった。
だが、残っている男の声を俺は良く覚えていた。シルエットもその男と一致する。そこにいる男は間違いなく、学院長の秘書、クレインだ。

「さて、少しお話をしましょうか？」

クレインは誰かに話をしようと言っている。一体誰と話をするんだ？　俺が見る限りはクレインは噴水の傍に一人で立っている。噴水の中にでもいれば別だが、そんなことは無いだろう。
誰が出てくるのかと待っているが誰も出てくる気配が無い。

「隠れてないで出てきてくださいよ。…あ、もう無理か。捕まえたからな。」

クレインの口調が変わる。俺の方に向けられている眼が不気味な碧色に光っていた。その時、俺の足首に何かが絡み付いていることに気付いた。
（なに、いつの間に！？）
クレインが話している相手は俺だった。いつ気付いたのか、いつ俺を捕えたのか全く分からない。
暗くて何が絡み付いているのか分からないが、振り払えそうにない。両足が捕えられているため、俺は手で引きはがそうとする。しかし、絡み付いているそれは手で掴もうとすると、砂のように流動して掴めなかった。俺の足が引っ張られる。俺はそれに逆らえず、中央広場へと引きずられていった。

「おやおや、ディムくんじゃないですかー。ダメですよ、こんな時間に出歩いていては……ガキは寝てる時間だろ？」

引きずられている間に両手も捕まって、俺は全く動けなくなった。広場に出されることで月光が当たり、俺を捕えているものの正体が視認できる。それは砂。砂のようではなく、紛れも無い砂だった。

迂闊すぎた。学院長が誰も信用するなと言っていたにも関わらず、一人で動き回る俺は本当にバカだ。俺に抵抗する術は…無い。

「……全く私だったから良かったものの、他の者が捕まえていたら君は良くて停学ですよ。」

俺は砂の拘束から解放される。クレインは呆れ顔で俺を見下ろしていた。倒れている俺に対し、クレインはガラが悪そうに屈む。

「今夜からこの時間は外出禁止になっているんですよ？　違反者は例外無く逮捕する、と。これは学院長が街全体に放送していたはずなのですが、君は聞いていませんでしたね？」

確かに全く聞いていない。もしかして、俺が寝ている間の話なのだろうか。だとしたら急すぎる話だ。でも、とりあえず致命的なミスになったわけではないのか。俺は一息ついた。この男がドレイクの一味ならば、さっきの段階で詰んでいる。落ち着いたところで、俺は体についた砂を手で払いながら起き上がる。

「何かあったんですか？　随分と急な決定で強引なことをしている気がしますけど。」

「……君には関係ないことですよ。」

素っ気ない返事。貼り付けたような笑顔。答える気はないということがよく分かる。…いや、これは暗にドレイクとは関係ないと教えてくれているのか？　…考えすぎか。

「さて、私が寮まで送りましょう。いいですか？　許可なく深夜に出かけないことですよ。」

俺はクレインに連れられて寮にまで帰った。それにしても妙なツーショットになったものだ。

結局、何も進展は無かったが仕方ない。明日にでもルミネに相談

してみよう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7387w/

クリスタル・ジェネシス　０２　　『アルバセクト』

2011年10月19日07時10分発行